

## NPO法人田村明記念・まちづくり研究会5周年記念誌 田村明をなぞらえる:未来へ Homage To Akira Tamura

型破りになるためには、その「型」を知らなければならない。 なにかを「なぞらえる」ということは、未来への扉を開くために欠 かせない過程と言えるでしょう。

建築を学ぶひとが、傑作をトレースするように。

なにかをなぞらえるためということは、正確に対象をみつめ、とき には同じように実践して、あるいは比較して、その実像に近づいて いく必要があります。我々NPOの活動もまさにそうしたものであ ると言えるのではないでしょうか。

今回の5周年記念誌はその活動記録を収録すると共に、NPO会員と 田村明との関わりについてのエッセイが載せられています。

それはあたかも、それぞれの人生から浮かび上がる田村明をなぞら えることと言えるかもしれません。

なぞらえるということ、それは、なにかしらの「本物」に出会うた めの途上にある状態を指す言葉でもあります。

田村明とその活動の軌跡を、積極的に、しかし謙虚に丁寧になぞら えることは、5年の歳月を経て、さらに未来に向けられています。 さらなる魅力ある都市(=まち)のあり方やそのためのまちづくり の方法を切り開いていくことを目指して。

# 田村明没後10年、NPO法人田村明記念・まちづくり研究会発足5年を記念して

#### 田村千尋

田村明がこの世を去ってから10年、NPO法人田村明記念・まちづくり研究会も発足してから5年の歳月を刻んだ。私にとって「たむらあきら」は血のつながった兄であると同時に「社会」を勉強する機会をあたえ、教示してくれた師匠でもあった。人間を知り、己を知ることは心を豊かにする王道だったのである。

「田村明を研究したい」という事を明示してくれたのは田口俊夫さんである。それをしっかりと協力、支援してくれたのは眞生子義姉であった。この二人が居なければ今このNPOは存立しない。今、発足時の事を想いだす。追われるようにこのNPO設立に邁進したが、私には本質的な一つの心配があった。それは本当に「田村明は研究するに値する人物」なのか、という事である。ネポティズムに陥ってはいけない。しかし、しばらくすると田村明の存命中、本人に会った事もない奥津憲聖さん、青木淳弘さん、淺川賢司さん、そして呂菊喜さんのように韓国の方まで明の発想の原点を探ろうと探索されていることを知った。そうか、やはり本NPOを立ち上げてよかったのだ。その意義を感じるようになったのである。勿論、発足後の思わぬ雨風もあったが「雨降って地固まる」である。

NPO発足以降、5年間のハイライトは2018年、横浜で開かれた International Planning History Society(国際都市計画史学会)で青木、淺川、田口、田村という20代、40代、60代、80代のメンバーが田村明にかかわる演題を持ち寄って発表出来たことは得難い時間になった。国を超えて田村明を紹介する機会を持った事、それは誠に異議深いものがあった。2020年にはコロナ渦の中、「都市ヨコハマをつくる」を英訳し出版できたことも一つの展開である。欧米で

の反響はまだはっきりしないが一つの行動から見えてくる何かを見 出して今後も発展していきたい。

最後に私自身の事だが、おそらくこの研究会がなければここまで両親や兄弟の事を掘り下げて調べることはしなかった。そして最大の発見は両親の「出会い」その時の「流れ」を読み解いているうちに、それがまるで大きなドラマを見ているように私に迫って来るものがあったのである。私も兄達も、この両親のドラマを大切にしたい。いま、改めてかみしめるように味わい感じている「感謝」という言葉をもって。

## 目次

田村明没後 10 年、NPO 法人田村明記念 まちづくり研究会発足5年を記念して	4
田村明プロフィール	10
Profile of Akira Tamura	11
NPO 田村明研究会 5 年間の歩み・雑感	15
1. 突然の世界最高峰登頂のお誘い	15
2. 2015 年 4 月設立の新米 NPO 法人	19
3. 田村明を客観的かつ科学的に研究するということ	24
Five years since the inception of our NPO	29
1. SUDDEN INTEREST FROM A TOP PUBLISHER ······	29
2. NEW NPO ESTABLISHED IN APRIL 2015	34
3. TO STUDY AKIRA TAMURA OBJECTIVELY AND SCIENTIFICALLY	40
NPO 記念誌原稿「田村明さんと私」	46
田村明記念・まちづくり研究会に参加して・・・	51
企画調整室「特別な時間」からの出発	56
自治体都市計画の矜持・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	61
横浜で田村明と出会う	63
1 こどもの頃の横浜	63
2 じっちゃんの名に懸けて	63
3 まちづくり研究会での出会い	64
4 横浜まちづくり研究会から横浜田村塾へ	65
5 夢に田村明登場	66
「田村 ism」をどう学び、どう生かしたか	67

1 田村さんと出会ったきっかけ	· 67
2 何をどのように学んだか	. 68
3 どのように生かしたのか	· 75
4 NPOの活動~未来に向けて~	. 87
<参考文献>	. 89
田村明さんを慕う方々との出会いより	. 90
田村明さんに会ってみたい	. 98
1. 研究対象「田村明」との出会い	. 98
2. NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会とのはじめての接点	. 99
3. M3 修士論文の失敗と留年 ·····	100
4. NPO の研究活動に参加する ······	· 101
5. 田村明さんに会ってみたい	102
6. 私にとっての田村明さん	· 104
7. 2020 年の横浜で	105
宅地開発要綱-アジアの大都市で蘇るか	· 107
1. 田村明との出会い	107
2. 新興国における宅地開発・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	108
3. 宅地開発要綱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	110
4. 田村明研究会	· 110
5. 宅地開発要綱の研究	· 111
6 新興国の大都市と宅地開発要綱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	· 113
都市ヨコハマの演出家・田村明さん	· 115
1. 横浜っ子の原風景―私の個人史から	115
2. 田村明さんの引力	118
3. 総合的な仕事がしたい一田村明さんの「二十歳の原点」	119

〈参考文献〉	122
田村さんとの出会いとまちづくり研究会	123
1. 田村さんとの出会い	123
2. 参加者全員と話し、その内容を覚えていた	124
3.「都市問題を考える会」の創設	125
4. 「まちづくり研究会」への発展	127
5. 20 年以上にわたり、月に 1 回の研究会を開催	128
6. 横浜市を離れて、田村さんの「総合性」の理解がより進んだ	· 131
田村明先生との出会い〜地方に住んでまちづくりを学ぶ	134
1 はじめに	134
2 壺中天有	135
3 啐啄同時	157
4 腹中書有	160
5 本懐	162
6 結び	163
有言実行の人・・・田村 明さん	167
対 話	169
1 田村義也の履歴	169
3 大学と兵役:	172
2 田村明の履歴	176
3 対話:	181
4 義也を送る俳句と和歌	187
NPO のこれまでの活動記録	190
NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会について	190
活動記録	191

田村明を天に送って	229
NPO 法人 田村明記念・まちづくり研究会 定款	217
About Us	212
▶ 2020 年度	211
▶ 2019 年度	207
2018年7月15日~19日 国際都市計画史学会 IPHS 横浜大会への参加······	203
▶ 2018 年度 ·····	202
▶ 2017 年度 ·····	200
2016年4月3日 NPO設立記念シンポジウム「田村明からのメッセージ」開催	197
▶ 2016年度	196
2015年6月12日 NPO法人設立記念講演会 ·····	195
▶ 2015 年度 ···································	193

## 田村明プロフィール

#### 田口俊夫

都市プランナー田村明(生1926/歿2010)は、権威ある日本建 築学会から2000年に、「都市づくりの理論及び手法の構築とその実 践」で、大賞を受賞した著名な人物である。都市づくりの理論家で あり、かつ実務家であった。田村は、日本の都市計画と市民による まちづくり分野を、世界標準の高みに押し上げた人物である(蓑原 敬 2016)。田村は1968年から1978年にかけて、企画調整局とい う組織を自治体・横浜市役所に立上げ、それまで国の機関に従属し て縦割りでバラバラな市の組織を横につなぎ一体化した。それによ り、飛鳥田一雄市長(日本社会党、市長在任1963/1978)の下で、 市職員が市民中心主義で自ら考え主体的に動く自治体組織を作り上 げた。市民の立場から行政のあり方を問う哲学をもち、横浜の都市 構造を根本から変えるみなとみらい事業等の「六大事業」の推進や、 当時としては先進的な都市農業の育成と宅地開発要綱に代表される 土地利用コントロール手法の発想、国に先駆ける公害対策から民間 や地域コミュニティの活力を生かした医療福祉分野での施策など、 横浜のまちづくりに多面的に関わった。わずか10年間でその後の横 浜の都市づくりの方向性を形作ったといえる。そして、田村の教え を受けた若手職員たちが、市長が変わっても、田村の都市づくり哲 学を受け継ぎ現代の横浜を形作っている。1981年横浜市退職後、 法政大学教授となり、全国のまちづくり現場を廻り市民や自治体職 員たちを元気づけた。1986年に全国の自治体職員や研究者が集ま り学ぶ自治体学会を、多くの仲間たちと設立している。また、横浜 と東京で市民と共に学ぶ「まちづくり塾」を開講した。

## Profile of Akira Tamura

By Toshio Taguchi

Akira Tamura (b. 1926, d. 2010) was a renowned Japanese urban planner who was awarded the Grand Prize in 2000 from the prestigious Architectural Institute of Japan for his work on "Construction of theories and methods of town planning and their practice." He was both a theorist and a practitioner of town planning. Tamura was a prominent figure who brought the town planning and citizens' town-making movement in Japan to the height of global standards (Kei Minohara 2016). Between 1968 and 1978, Tamura established the Planning and Coordination Department in the local government of Yokohama City with the intention of reforming the city's disparate and verticallydivided organizations, which had previously been subordinated to the national government. By doing so, under the leadership of Mayor Ichio Asukata (Japan Socialist Party, mayoralty term 1963/1978), Tamura created a citizen-centered municipal government in which city officials could think independently and act proactively. With a philosophy that questioned the nature of government from the perspective of the citizens, he promoted "Six Spine Projects" which fundamentally changed the old urban structure of Yokohama, which included the New Central Business District at the site of a relocated shipyard, the conservation of urban agriculture in conjunction with new town development, and the introduction of integrated land use control measures called the Local Development Exaction System. In addition to physical

planning, he was involved in many aspects of city management, from pioneering anti-pollution measures to medical and welfare policy formulation that drew on the vitality of the private sector and local communities. In just 10 years, he shaped the direction of town planning and management in Yokohama that is still followed today by young workers. After retiring from Yokohama City in 1981, he became a professor at Hosei University, a private college in Tokyo, and toured the country, inspiring citizens and local government officials alike. In 1986, he and his colleagues founded the Japan Society of Local Governmental Studies, which gathers local government officials and scholars from all over Japan to learn from each other. In addition, he opened the "Machizukuri (Town-making movement) School" with citizens in Yokohama and Tokyo. His final book, entitled "A Theory of Citizen's Government," was published in 2006.



The Tokyo Metropolitan Region

years in the city administration Region ©T. Taguchi ©Chihiro Tamura

Fig.1 Akira Tamura during his Fig.2 Yokohama in the Tokyo Metropolitan



Yokohama behind. Photo Courtesy of the Port Department, City of Yokohama

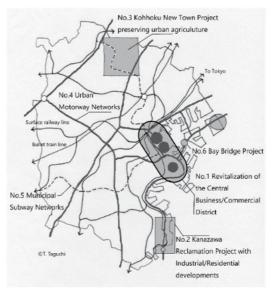


Fig.4 The Six Spine Projects Map and the location of the projects remade by Taguchi ©T. Taguchi



Fig.5 Urban Agriculture Area with rice field and forest in Maioka District Taguchi



Fig.6 Harbor opening commemor ated plaza planned and designed by the city urban design team <sup>©</sup>T. Taguchi

## NPO田村明研究会5年間の歩み・雑感

### 田口俊夫

### 1. 突然の世界最高峰登頂のお誘い

#### 1-1. 英訳本の完成

我々のNPO法人の設立目的は、都市プランナー田村明たちによる自治体経営と都市づくりに係る業績を客観的かつ科学的に研究し、その成果を国内外に広く伝えることである。この小さなNPOは非営利法人で、活動から利潤は生じない、逆に支出がある。NPOの設立目的に賛同して集まってくれた人々はわずかだが、この活動の志を共有している。

さて、このNPO法人が準備不足のまま、いきなりエベレストに 登ることになったお話をしたい。それでも、「世界の高み」を一瞬 見た感動は忘れることができない・・・。田村明は偉大であるが、

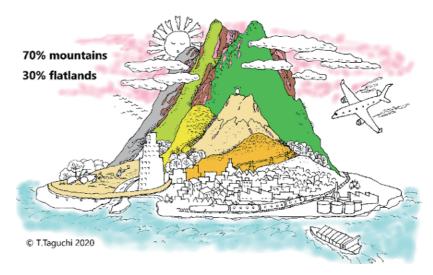


Fig.1 英国での出版物に掲載しようとした図版、田口作成

誰でも知っているわけではない・・・日本の若者たちにとってと同様に、世界の人にとっては全く「初めての人」である。その人を世界に紹介することの難しさを強く感じた。

一年以上の年月をかけて、田村明著『都市ヨコハマをつくる』(中 公新書1983)の英訳が完了した。そして、編集製本の上、関係者 に配ることができた。翻訳は坂本和子さんで、田村義也夫人の久美 子さんのピアノのお弟子さんである。義也さんが教えていた武蔵野 美術大学で、分野は異なるが建築を学び、ニューヨークのコロンビ ア大学大学院でも学んだ翻訳家である。素晴らしい、水が流れるよ うな英語に仕立て上げてくれた。全体の英語レベルではとても田口 など足元に及ばない。それを、今度はNPO会員の青木淳弘さんが、 本の素晴らしい装丁をやってくれた。2020年9月初旬にやっと完成 した。この装丁があってこそ、世界の人々に贈呈しても見劣りしな いものとなった。因みに、田口も英文表現の校正段階で相当坂本さ んとやりあった。そして著作権の問題を避けるため、写真や図版も 作製しなおした。いろいろな意見も確かにあったが、完成形を早く つくり、世の中に見せることが必要であった。なにしろ、英訳本の 完成を待ち望んでいた田村眞生子様にお届けするのが最優先であっ た。完成後も、背表紙シールと目次ページの作成など、見落として いたものを補完した。

横浜市立図書館では中央図書館と区別の分館へ20冊を寄贈した。 国立国会図書館も引き受けてくれた。大学図書館のなかには寄贈を 申し入れても、検討するといって返事がない処やISBNコードがな い販売されない本は受け入れないという都内の某私立大学もあった。 偉そうに言えば、英語という世界共通言語で日本のまちづくりを学 ぼうとしている、その大学に属する未来のある若い学生や研究者に

16

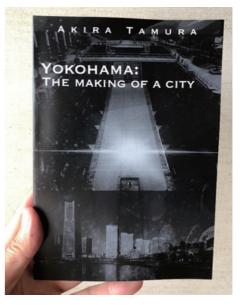


Fig.2 完成した『都市ヨコハマをつくる』英訳本

#### 1-2. 国際出版界へのお誘いと挫折

このような中で、国際都市計画史学会 International Planning History Society, IPHS横浜大会でお世話になった都市計画研究者の渡辺俊一先生(東京理科大学名誉教授)にお贈りした本が大きな動きの発端となった。渡辺先生や田口の知人の海外研究者にも贈呈したが、彼ら彼女らにとって田村の存在はまったく知られていなかった。それでも、日本の都市研究ができ立派な本も出版されていることが不思議ともいえる。感謝されたが指摘もあり、学術的な評価を求めるならば、日本の社会制度的な背景を述べ、かつ詳細な注釈が不可欠である。田村さんの著書には注釈がまったくない。なお、久美子さんの知人のニューヨーク在住の著名な日本人経済学者にも贈呈依頼があったが、コロナ禍で郵送業務が止まっていて、そのため、米国から一時帰国している知人に本を現地に手荷物で運んでもらっ

た。まさに運び屋である。いろいろあった。

次に早速、世界の頂点から反応があった。英国の人文社会科学系専門の大手出版社であるルートレッジRoutledge社の「都市計画・歴史・環境シリーズ」"Planning, History and Environment Series"でその編集長のアン・ラドキンAnn Rudkin女史と9月中旬から二か月間に亘って、出版企画のやり取りをした。ことの発端は、英訳本を進呈した渡辺俊一先生より、ジョン・ゴールド教授Professor John Goldを紹介され、ゴールド教授が自分より優れた編集者としてラドキン氏を紹介してくれたことによる。ラドキン編集長は英訳本の内容を高く評価してくれたが、日本のことを全く知らない読者向けに高度な学術論文を紹介文Introductionとして掲載し、かつ文中に詳細な注釈をつけることを要求した。それに応えるには田口では「役不足(英語表現では「田村明に近すぎる」)」とされ、出版を断念された。

2か月間に亘るやり取りで、ラドキン編集長の誠実な人柄を感じることができた。なお、当該シリーズは、世界の著名人が書く極めて質の高いもので、世界の出版界の「最高峰」ともいえる。このような破格の場を垣間見る機会を提供していただいた渡辺俊一先生とゴールド教授に感謝したい。これで、田村明が世界に通用することが分かり、かつ世界の出版界の情勢の一端を見ることができたので、次なる戦略づくりに資したい。そして、まだまだ他の可能性を模索するためにも、田村明を日本の都市計画史上で位置付ける学術論文を早急にまとめる必要がある。頑張りたい。

このシリーズのサイトは以下で見ることができる、

https://www.routledge.com/Planning-History-and-Environment-Series/book-series/PHE?pd=published,forthcoming&pg=1&pp=12 &so=pub&view=list

#### 2. 2015年4月設立の新米NPO法人

#### 2-1. 任意研究会の時代

2013年12月18日 NPO になる前の任意研究会で、初めての公開研究会を歴史的建築物である横浜市開港記念会館(横浜市中区本町)で開催した。研究会は、「まちづくりの総合化と田村明ー研究会」という意欲的な名称であった。60名ほどの方々が参加していただき、反響の大きさに少々驚いた。その時の講演内容が、田村千尋さんの「田村の家族たち」であり、田口俊夫の「都心部高速道路地下化に至る組織的構造と田村明」であった。この段階で、田口は分かったように田村の企画調整室での最初の困難な仕事を語ったが、実はいまだにこの研究は続いている。2019年に建築学会の査読論文で、同テーマについて書いたが、まだまだ分からない点が多い。新資料の発見もある。

さて、NPO法人設立に至る前に1年以上の準備期間があったので、もう7年近く田村明研究活動をしていることになる。すべては田村千尋さんから田口宛の、「アキラ兄の膨大なスライドをどうしたらよいか」という問いかけで始まった。横浜の田村塾で長年、千尋さんと親しくお付き合いしていた関係である。捨ててしまったらどうですか…と言ってから、いや待てよ「そろそろ田村明研究をした方がよい」と思い立った。そこで、千尋さんと研究の同志を募ることにした。

市役所時代の友人たちや田村さんに縁のある人が関心を示してくれたが、「研究」を理解している人はわずかだった。最初の設立会合が2013年4月頃であったと記憶している。関内にある会員の建築設計事務所会議室を毎回お借りしていた。この会を立ち上げる際に、市役所の大先輩からお叱りを受けた、「なぜ今になって、田村研究

19

をする必要があるのか…田村以降のまちづくりはすべて自分がやり、 その総括はすでに終わっている」というご意見であった。それに対 しては、ただただ吃驚するだけであった。

#### 2-2. 多様な仲間たち

20

会を立ち上げてから、一緒に田村明研究をやってくれる人材を求めて、市内大学や周辺大学にあたってみた…唯一一校を除いて誰も関心がなかった。会員から紹介を受けた慶応大学SFC(藤沢)の中島直人准教授(当時)を訪ねて、高校時代から田村明に関心をもっていた学生を紹介された。今もNPO会員になってくれている人物である。かつ、中島准教授が東京大学都市工学科に転出し、今も交流がある。有難いことである。因みに、横浜市市立大学の鈴木伸治教授は当初から支援してくれているが、事情があってNPO会員になっていない。鈴木教授は『今、田村明を読む一田村明著作選集』(春風社2016)を出版されている。また、大学を退官されたある名誉教授にNPOの代表役を頼もうとしたが、「それなりの待遇」を求められ断念した。専任の事務員や事務所もなく、会員が手弁当でやる会の運営に「待遇」は考えられない。

異様に若い人材が一瞬参加してくれたことがある。市内私立高校の高校生である、学校図書館で田村の『都市ヨコハマをつくる』(中公新書1983)を読み関心をもった、という。更に興味深いのは、県内にある環境系の国際研究機関の研究員たちが会員になってくれた。その理由が面白く、横浜市の現役の職員からまちづくりの歴史の説明を受けても、表面的なことしか語ってくれず、その背景や経緯が分からない。そこで出会ったのが当NPOで、初めて納得したという。韓国の若手研究者夫妻が田村明の『「市民の政府」論』(生活社2006)を読み、深く研究したいと来日したことがある。韓国では岩波新書のまちづくり三部作(『まちづくりの発想』1987、『ま

ちづくりの実践』1999、『まちづくりと景観』2005)や『都市ヨコハマをつくる』が翻訳出版されているという。海賊版でなく、岩波書店の許可をとっていた。

田村さんは、横浜市退職後、法政大学教授をしながら、各地のまちづくりグループや自治体からの要請で「まちづくり伝道師」として全国を廻った。現地で頑張る人々を応援した、この当時のつながりが各地に残っているはずだが追い切れていない。限られた事例で、現地の取材に挑戦し、島根の関係者を訪問したこともある。ただし、取材に至るまでの下準備や現地のインタビューなど、作業としては大変であった。田村さんがどこを訪れ、何を語り貢献したのか、を探るのは容易ではない。今でも、知らなかった地方から「田村さんにお世話になった」という言葉を聞くことがよくある。田村さんたちが創設した「自治体学会(1986年神奈川県での自治体関係者の集まりを契機に設立)」のつながりも深いようだ。ある時、法政大学時代の教え子の方々にも集まってもらったが、教え子たちはまちづくりに特化しているわけでなく、田村さんらしい自由な育て方をしていた。「まちづくりに関心のある市民」を育てていた、と感じた。

#### 2-3. NPO法人の設立と運営

NPO法人設立でその活動上必要となる資金面は、田村眞生子様からの浄財で賄えることになった。専用の事務所や事務職員を雇用するほどの団体ではないが、それでも費用が発生する。特に、NPOの活動趣旨として、田村明たちの活動実績を研究し国内外に発信する、という部分で費用がかかる。国内の研究学会への論文掲載料、海外学会で発表する論文の翻訳料又は校正料(元訳は著者がしても、ネイティブによるチェックが必要となる)がおおきく発生する。また、田村の活動を国内的に調査するための出張費、そして田村の活動を海外事例と比較考量するための海外出張費も必要となる。年会

費三千円ではとても賄えない。眞生子様には感謝するしかない。

NPO法人設立の下相談を市の担当窓口でしている当時、「個人の名前」を法人名につけるのは駄目だ、と言われたことがある。理由は公益性に合致しない…ということらしかった。それでは、活動の趣旨に合わないので困ると粘ってみた。結果として、担当者が異動して意見が変わって、よいことになった。2015年4月1日付で横浜市に認証されたが、直後に先輩NPOから助言をもらって、賛助会員枠を急遽つくることになり、定款の変更をした。会の運営に責任をもつ正会員の数を限ることで、議決機関としての「社員総会」の運営を保つという趣旨であった。やってみないと、分からない事だらけであった。

自分がかつて役人をやっていて言うのも変だが、毎回市や法務局の担当窓口に行く度に提出書類の書き直しを命じられ、冷や汗をかくことが多い。NPO法人として非課税の団体なのだが、そのための手続きも簡単とはいえない。田口は副理事長という肩書だが、会計担当であり庶務担当である。会員が立替えてくれた費用を振り込むために、頻繁に銀行に出向くことがある。NPOのホームページの管理をやり、記事を書き、できるだけ頻繁に新しいニュースを掲載するようにしている。そうでないと、HPは誰も見てくれないものになってしまう。2016年4月3日にはNPO法人設立一周年記念の公開シンポジウムを神奈川県民ホール大会議室で開催した。蓑原敬先生(都市プランナー)と市役所OBの廣瀬良一さんを講師に、200名ほどの多数の参加者が集まってくれた。この開催の成功は、ある会員が企画運営の大役を担ってくれたことがおおきい、感謝している。

ただし一方、事件もあった。このシンポジウムに向けて準備してきた「研究論文」の発表に異論が理事メンバーから強く出されたのである。ついには、理事辞任まで至った。それは、田口が執筆していた「みなとみらい事業の経緯研究」の発表を差し止め、会員全

22

員が納得できる結論を得ることが必要との主張がされたのである。NPOが一体として研究をし、その成果を一致したものとして発表すべき、との意見であった。NPO会員個人の勝手な発表は許されない、という学術分野の研究者常識では理解できないものであった。学術研究とは、それぞれの研究者が個人の責任で研究し、その成果を発表する。そして、それに対する「異論」は同様に学会の場で発表し、意見を闘わせる。それが建設的な研究活動とされる。NPOはそのような研究者と研究活動を支援する立場にある、と信じて発足したと理解していた。これで、NPO発足メンバー理事5名中、2名が辞任した。この件で、長年の友人を失うことになった。

その後、4名の新たな理事に加わっていただき、NPOの運営が軌道に乗った。理事会メンバーは7名となり、それに監事1名で全役員となる。そして、2019年度終了とともに、大学の教員をされている理事2名が多忙のため交代となり、新たに2名の理事が加わった。それまで、不定期で開催していた理事会を、毎月定期的に開催することとなり、理事相互の意思疎通を図るようにした。ところが、コロナ禍となり、対面での理事会が難しくなり、スカイプによるリモート会議形式に移行している。結果として、2020年度は対面形式での毎月定期的に開催していた公開研究会をできず、リモートでの研究会もない。

一方、前述のように田村さんの英訳本の発行(有償での出版でなく)プロジェクトと、NPO設立五周年記念の記念本の発行を進めている。記念本でまさにこの原稿が、その一部となる。わずか20名ほどの会員数(正会員と賛助会員で)しかいないが、それぞれの会員たちの「思い出」や「思い入れ」を書いてもらう試みである。一つの節目と考えている。

#### 3. 田村明を客観的かつ科学的に研究するということ

#### 3-1. なぜ学術論文か

24

田村明が偉大な都市プランナーであった、ことは誰も否定しない。 ただし、田村以外の研究者が、田村についての研究論文を書いてこ なかったのも事実である。田村は自身で多くの著書を残した、しかし、 それは「主観的なもの」であり、学術的に評価される客観的なもの ではない。確かに、田村は都市づくりの実践家として初の大賞(「都 市づくりの理論及び手法の構築とその実践」)を、2000年日本建築 学会から受賞している。それをして、田村の客観的な評価は固まっ た、という見方もある。

田村は都市づくりと都市経営の実践家であるから、その実践面で評価されればよく、研究論文で評価される必要はない、という意見もある。ただし、その「実践面」は時と共に風化していく…人々の記憶から失われていく。なぜ、みなとみらい地区はそこにあるのか…高速道路はなぜ部分的に地下化されたのか…横浜の地域中核病院は民間経営なのか…いまも続く調査季報はなんのためにあるのか…現場の市職員たちがその「理由」や「背景」を説明できなくなっている。まだ、目の前にあるものはよい…ないものを説明することは極めて難しい。田村が頑張って開発させてなかったことで残って緑の森や農地が、そこにある意義などである。

学術論文とは、著者以外の第三者が論文中で著者が展開した主張を、著者と同じ資料を使って検証できることを前提としている。その資料とは基本的に公開資料である。秘密資料であっても、当該論文公表に際して公開されれば問題ない。つまり、自分の経験や自分がそう思ったから…という主張は受け入れらない。かつ、先人たちの研究成果を尊重することが求められる。ただし、それらの研究成果も正しく検証されたものであることが前提となる。因みに、この

田口の雑感は「随筆」で、学術論文ではない。

田村については、第三者による学術論文がまったく存在しなかった、田口が日本建築学会の論文集(審査員付きの査読論文)に書き始めるまでは。唯一あるのは、田村自身の学位論文(博士論文)で、『宅地開発と指導要綱一成立過程と効果一』(1980年10月東京大学工学部都市工学科)である。そのため、田村の日本の都市計画史における位置づけはまだ定まっていない。偉かったことは誰も否定しないが、どう偉かったのか、その業績は歴史的にみてどうなのか…分析がまったく足りない。そもそも、田村がいう「企画調整機能」を学術的に解説したものがない。田村がいう縦割り組織を横につなぐ、という概念は分かる。田村が「プロジェクト方式」を多用した、という意見もある。確かにそうだろうが、実際の場面が想像できない。因みに、学術的とは、客観的かつ科学的なものを指す。

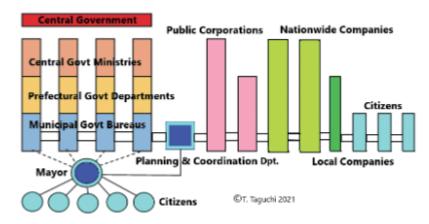


Fig. 3 田村による企画調整機能の説明図、出典:田村明『宅地開発と指導要綱一成立過程と効果一』(1980年10月東京大学工学部都市工学科)、英訳と作図は田口による

#### 3-2. 後世の人のために

後世の人が理解するためには、その理論と実践が「再現」できな いといけない。それがないものは「神話」となってしまう。なぜ出 来たのか分からないが、出来たらしい…では話にならない。田口は 研究の資料を得るために、よく横浜市役所を含め国や公的団体に情 報開示請求をする。市役所のある部署で、50年前の方針決裁書(稟 議書)の開示請求をしたときに、担当の職員が「なぜこのようなこ とをしているのか」と強く興味を示された。それは、次世代の人が 学べるように昔の経緯を整理しているのだ、と説明した。研究論文 をまとめるのはえらく時間がかかる。田口は学会で採択された時に は、そのコピーを常にお世話になった役所の部署の方々にお届けす るようにしている。つい最近、カナダのバンクバーから早朝に電話 を頂いた、田村が関わったイラクのバグダッド都市改造計画の日本 人コンサルタント団の責任者(85歳)の方からであった。NPOの HPを見て、自分が田村と共に関わったプロジェクトの正確な情報 提供を申し出てくれた。情報発信をしていると、このような出会い もあるものである。

最後に、横浜の都市づくりは、田村だから出来たのであって、田村以外では出来ない、と主張するならば、それは継承されないものとなる。若干不十分でも誰でも努力すれば、限りなく田村の発想と力量に近づくことができるはず、と考えたい。そのような発想をもって、NPO会員や田口はいまも学術研究に勤しんでいる。今後も、NPO内外を含め多くの方々のご支援をお願いしたい。



▲福島県にあったブリティシュヒルズでの「まち研合宿」田村ご夫妻と共に1990年代、 田口は左端

#### 田口俊夫(たぐちとしお)

工学博士(都市計画、早稲田大学)、1952年埼玉県生まれで、現在68歳で横浜市在住。大学建築学科を卒業した22歳の時の英国マンチェスター大学大学院留学でアーバンデザインを学び、帰国後田村明たちによる横浜市での活動を知る。都市づくりに新たな「デザインコントロール制度づくり」を構想しつつ、1978年横浜市役所に入り企画調整局都市デザイン担当に配属される。わずか数か月間、田村局長の下で働き、その後13年半横浜市で都市計画局・区役所・新本牧開発室・みなとみらい会社等に勤務し退職、民間会社や私立中高に勤務する。2015年よりNPO法人田村明記念・まちづくり研究会副理事長を務める。

#### NPO発足後における横浜田村明研究に関する田口論文

- ・ニューヨーク都市内高速道路ロアーマンハッタンエクスプレスウェイ計画でのリンゼイ市政による複合開発の試み、日本建築学会計画系論文集、第780号、2021年2月
- ・大阪地下鉄御堂筋線と横浜みなとみらい線建設に係る受益者負担制度にみる自治体の主体性、日本建築学会学術講演梗概集、 2020年9月
- ・横浜市都心部における高速道路地下化事案にみる自治体企画調整室の役割、日本建築学会計画系論文集、第769号、2020年3月
- ・都市計画史人物アーカイブの試みとしての田村明研究、日本建築学会学術講演梗概集、2019年9月
- Capture land value for building infrastructure: Comparing China and Japan, Toshio Taguchi (Japanese case), Nannan Xu (Chinese case), Conference of Comparative Urbanism:

Global Perspectives, the Urban Studies Institute, Georgian State University, 2019年3月

- ・横浜市における宅地開発要綱制定と改訂の経緯分析、日本建築 学会計画系論文集、第753号、2018年11月
- The Adoption and Abolition of the Local Development Exaction
   System by the City of Yokohama, The 18th International
   Planning History Society Conference Yokohama, 2018年7月
- ・横浜みなとみらい21中央地区における開発方式の時系列的分析, 日本建築学会計画系論文集、第735号, 2017年5月

## Five years since the inception of our NPO

#### TOSHIO TAGUCHI

#### 1. SUDDEN INTEREST FROM A TOP PUBLISHER

#### 1-1. Completion of the English translation of the book

The purpose of our non-profit organization (NPO) is to objectively and scientifically study the achievements of urban planner Akira Tamura (born 1926/deceased 2010) and his colleagues in municipal management and town planning and to disseminate the results of these studies both at home and abroad. Tamura was awarded the Grand Prize of the Architectural Institute of Japan in 2000. He was a great expert on urban planning and wrote many books, but until now he was thought to be too great to study. This is why we decided to set up this NPO, which will not make any profit from its activities—on the contrary, it will spend money.

I would like to tell you the story of how this NPO suddenly decided to climb the pinnacle of the global planning community like Mount Everest, unprepared. I will never forget the excitement of seeing for a moment "the height of the world." Tamura was a great man, but not everyone knows of him. He is as new to the world as he is to the young people of Japan. I felt a strong challenge to introduce him to the world.

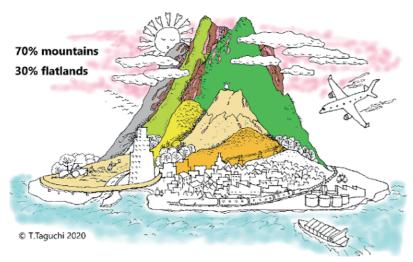


Fig.1 An illustration to depict "Japan" intended for publication in the UK, by Taguchi ©T. Taguchi

After more than a year's work, the English translation of Akira Tamura's "Creating the City Yokohama" (Chuko Shinsho 1983) was completed. The translation was done by Ms. Kazuko Sakamoto, a piano pupil of Mrs. Kumiko Tamura, wife of Yoshiya Tamura (the second of four siblings in the Tamura family, Akira being the third). Sakamoto is a translator who studied architecture at Musashino Art University, where Yoshiya taught, and also at Columbia University in New York. She has done a wonderful job of making the English flow like a brook. The overall level of English is far above Taguchi's. The book was finally completed in early September, 2020. Thanks to the magnificent book design by Atsuhiro Aoki, a member of the NPO, the book, entitled "YOKOHAMA: THE MAKING OF A CITY," is now ready to be presented to people around the world. Incidentally, I had many discussions with Sakamoto during the editing of the English

text such as selection of suitable expressions. To avoid copyright issues, I reworked the photographs and drawings. Although there were many opinions and ideas among members of the NPO that might have caused a delay, it was necessary to produce the finished product quickly to show it to the world. Our first priority was to deliver the book to Makiko Tamura, wife of Akira Tamura, who had been eagerly awaiting the completion of the English translation. After the book was completed, we continued to supplement it with spine stickers and a table of contents page we had forgotten to include. From the beginning, we did not intend to make our book by professional publishing company, on the contrary do it on our own, not for sale.

We donated 20 copies to the Yokohama City Library Network's central library and ward branches. The National Diet Library also accepted a donation. Some university libraries did not accept our

offered donation, saying they would consider it and no response, and some prestigious private university in Tokyo declined not to accept books without ISBN codes that were not sold on the market. We printed 100 copies and gave them to NPO members and the researchers who helped us; they were gone soon.

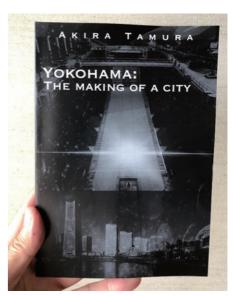


Fig.2 The completed English translation of "YOKOHAMA: THE MAKING OF A CITY" ©T. Taguchi

1-2. Invitation to the international publishing world and frustration In the midst of all this, a book that we presented to Professor Shunichi Watanabe (Professor Emeritus of Tokyo University of Science), an eminent researcher of town planning who had helped us at the International Planning History Society (IPHS) Yokohama Conference 2018, triggered a major movement. According to Dr. Watanabe's advice, we also presented the book to his friends, overseas researchers in the field of Japanese planning history, but Tamura's existence was completely unknown to them. It is a wonder to us that they are able to study Japanese cities and publish excellent books without knowledge of Tamura.

It is pointed out from an overseas friend of mine that if we want an academic evaluation over Tamura, it is essential to describe the social institutional background of Japan surrounding Tamura's work and to provide detailed annotations. Tamura's book has no annotations at all. This is what we have to keep in mind. The book was also presented to an acquaintance of Kumiko's, a prominent Japanese economist living in New York, but due to the COVID-19 pandemic the postal service was suspended. Therefore, I asked an acquaintance who was temporarily back in Japan from the US to carry the book there in his hand luggage like a courier. A lot happened.

Then, there was an immediate response from a top publishing firm. In mid-September, I heard from Ann Rudkin, editor-in-chief of the "Planning, History and Environment Series" of Routledge, one of the UK's leading publishers specializing in the humanities and social sciences. It all started when Professor John Gold (introduced to me by Dr. Watanabe, to whom I had given the

book) introduced me to Rudkin as a better editor than himself. Rudkin appreciated the contents of the English translation but thought the book should contain a high-level academic article as an introduction for readers who were not familiar with Japan. She also felt that detailed annotations should be included in the text. Taguchi was deemed "inadequate" (as expressed in English, "too close to Akira Tamura") to meet the challenge, and the publication was abandoned.

During our two months of communication, I was able to feel the sincerity of Rudkin's character. The Routledge series is of extremely high quality, written by some of the world's leading figures, and can be regarded as a "pinnacle" in the publishing world. We would like to thank Dr. Watanabe and Professor Gold for providing us with a glimpse of such an unparalleled venue. Now that we know Tamura is acknowledged as world-class, and we have seen a glimpse of this publishing world, we will be able to develop our next strategy. We need to compile academic papers on Tamura's place in the history of Japanese town planning as soon as possible. We will do our best.

The website for their series can be found here:

https://www.routledge.com/Planning-History-and-Environment-Series/book-series/PHE?pd=published,forthcoming&pg=1&pp=12 &so=pub&view= list

#### 2. NEW NPO ESTABLISHED IN APRIL 2015

#### 2-1. The days of the voluntary study group

On December 18, 2013, before becoming an NPO, we held our first public workshop in a historical building, the Yokohama City Kaiko Kinen Kaikan (Yokohama Port Opening Memorial Hall). About 60 people attended; we were a little surprised by this response. The lectures given at that time were "Tamura's Family Members" by Chihiro Tamura (the youngest of the four Tamura brothers) and "The Organizational Structure Leading to the Undergrounding of Expressways in the City Centre by Akira Tamura" by Toshio Taguchi.

Since there was more than a year of preparation before the beginning of this voluntary study group, we have been conducting Akira Tamura research activities for eight years in total now. It all started with an inquiry from Chihiro Tamura to Taguchi: "What should we do with the huge number of slides of Akira?" I had been a close friend of Chihiro's for many years at the Tamura School in Yokohama. I said, "Why don't you throw them away..." and then I thought again, wait, "It's time to start some Akira Tamura research." So Chihiro and I decided to recruit fellow members for our research activities.

Friends from the City Administration and people with a connection to Tamura showed interest, but only a few people understood "what research is." I remember that when the first founding meeting was held, we were scolded severely by a retired senior member of the city administration: "Why do you need to study Tamura now... I've done all the city planning after Tamura

by myself, and I've already summed up everything," he said. We were just astonished at his comment and stance.

#### 2-2. A diverse group of members

After setting up the group, I went around to the universities and colleges in the city and the surrounding area looking for people who would be willing to do Akira Tamura's research with us. No one was interested, except at one college; I visited Naoto Nakajima, then Associate Professor at Keio University SFC (Fujisawa), who introduced me to a student who had been interested in Tamura since his high school days. He is still a member of the NPO today. Nakajima has moved to the Department of Urban Engineering at the University of Tokyo and we are still in touch with him. Incidentally, Professor Nobuharu Suzuki of Yokohama City University has supported us from the beginning, but for some reason he is not a member of the NPO. Professor Suzuki has published a book entitled "Reading Akira" Tamura Now: Selected Works of Akira Tamura" (Shunpusha 2016). We also asked an honorary professor who retired from the university to act as a representative of the NPO, but he did not accept because he wanted to be treated "in a respected way." Since there are no full-time clerks or office space: members have to do everything voluntarily, we cannot provide any special treatment to anybody.

There was a happy moment when an unusually young person joined us. He was a high school student from a private school in the city who had read Tamura's "Creating the City of Yokohama" in the school library with great interest. In addition, a group of

scholars from an international environmental research institute in the neighboring city became members: when they were briefed on the history of urban planning by a current Yokohama City official, he only gave them a superficial overview, not the background and history. That's when they came across our NPO. They said that this was what they wanted to see. A young Korean researcher and his Japanese husband once visited us to study Tamura's book "Theory of A Citizen' s Government" (2006) in-depth. In Korea, Iwanami Shinsho's Machizukuri trilogy ("Machizukuri no Hassou" 1987, "Machizukuri no Jissen" 1999, "Machizukuri to Keikan" 2005) and "Toshi Yokohama wo Tsukuru" (Creating the City Yokohama) have been translated and published. They were not pirated as they had been issued permission from Iwanami Shoten, prestigious publisher, and Tamura.

After retiring from the City of Yokohama, Tamura worked as a professor at Hosei University, one of the oldest private universities in Tokyo. He traveled around the country as a "town making evangelist" at the request of various town making groups and local authorities. I am sure that there are still connections Tamura made during this time, but I have not been able to track them down. In a limited number of cases, I have tried my hand at local reporting and have visited people in Shimane. However, it was a lot of work to prepare to interview the people in the area. It is not easy to find out where Tamura visited, what he talked about, and what he contributed to the area. Even today, I often hear people from regions say they are indebted to Tamura. There also seems to be a deep connection to the Japan Society of Local Governmental Studies, which was founded by Tamura and his colleagues in

1986 after a gathering held in Kanagawa Prefecture of local government officials and scholars. On one occasion, we invited some of his former students from Hosei University to join us. The students did not specialize in urban planning, but they were brought up as good citizens in a free way as Tamura believed.

#### 2-3. Establishment and management of the NPO

As far as the establishment of the NPO is concerned, the financial requirement of its activities is to be met by the donations of Makiko Tamura, widow of Tamura. Although we are not an organization that needs to rent an office or hire administrative staff, we will still incur expenses. In particular, the NPO aims to research and disseminate Tamura's work both in Japan and abroad. We have to pay for the publication of papers in research conferences in Japan and the translation or proofreading of papers presented at overseas conferences. This is because the original translation, though completed by the author, needs to be checked by a native speaker. We also have to pay for business trips to investigate Tamura's activities in Japan and compare Tamura's activities with those in other countries. The annual membership fee of 3,000 yen is not enough to cover these expenses. We can only be grateful to Mrs. Tamura.

During the time we were consulting with the municipal office on the establishment of an NPO, we were told that we could not have a "personal name" on the name of the organization. The reason seemed to be that it was not in the public interest. I persisted, saying that this would not suit the purpose of our activities. After this, the official in charge moved and a new person came. As a

result, the view changed and it turned out to be a good thing. On April 1, 2015, we were accredited by Yokohama City. Immediately afterward, we received advice from a senior NPO and quickly decided to change our articles of association formula to create a supporting member quota besides regular membership. The idea was to limit the number of regular members who would contribute to maintain its operation of the organization and attend the annual "general meeting of members" as a voting body. There were many things that we did not understand until we tried them.

As an NPO, we are tax-exempt, but the process is not easy. Taguchi's title is vice-chairman, but I am in charge of accounting and general affairs. I manage the NPO's website, write articles, and post news as often as possible. On April 3, 2016, we held a public symposium in the big conference room of the Kanagawa Prefectural Hall to celebrate the first anniversary of our NPO. Lectures by Dr. Kei Minohara (urban planner), Mr. Ryoichi Hirose (City Government ex-official), and Professor Suzuki attracted a large number of participants, around 200. The success of this event was largely due to a member who played a major role in organizing it backstage, for which we are grateful.

On the other hand, there was an incident. Some members of the Board of Directors strongly objected to the presentation of the "research paper" which had been prepared for this symposium by Taguchi. They argued that the NPO should work together and present their findings as a united body. The common sense among researchers in the academic field does not reflect that idea — in academic research, each researcher is responsible for his or her own research results, and the results are to be published and

available to everybody. If there are any "objections" to the results, they are also presented at the conference and the opinions are discussed. I understood that the NPO was set up with the belief that it would be in a position to support such researchers and their research activities. Eventually, two of the five founding members of the NPO resigned. We have lost long-time friends in this matter.

Since then, four new board members have joined us and the management of the NPO is back on track. The total number of board members is now seven, plus one auditor, making it a full board. At the end of the 2019 academic year, two members of the board who are also university professors were replaced due to their busy schedules, and two new members joined the board. The Board of Directors' meetings, which had been held irregularly. will now be held regularly every month to facilitate communication between the directors. However, as a result of the COVID 19 pandemic, it has become difficult to hold in-person and face-toface board meetings and we have moved to a remote meeting format via Skype. As a result, in 2020 we did not hold regular monthly public study meetings. On the other hand, some scholars together with members of our NPO started to study through remote networks Tamura's concept of Planning and Coordination Departmental work.

This manuscript will be part of the commemorative book for the fifth anniversary of the NPO. We have only about 20 members (regular and supporting) and are trying to get each of them to write about their memories and feelings about Tamura and NPO. We consider this a milestone.

## 3. TO STUDY AKIRA TAMURA OBJECTIVELY AND SCIENTIFICALLY

#### 3-1. Why an academic paper?

No one can deny that Tamura was a great urban planner. However, it is also true that no other researcher has written an academic research paper on Tamura. Tamura wrote many books himself, but they are "subjective," not objective in the sense of academic evaluation. Indeed, as mentioned above, Tamura was the first practitioner of town planning to be awarded the Grand Prize (the title of which is "Construction of theories and methods of town planning and their practice") by the Architectural Institute of Japan, in 2000. Tamura's reputation as a practitioner of town planning was solidified by this achievement.

Some say that Tamura was a practitioner of town planning and management and therefore should be evaluated based on his practice rather than academic research papers. However, this "practical aspect" will fade with time. Why is the Minato Mirai development area there? Why was the motorway partially undergrounded? What is the purpose of the Yokohama Research Quarterly, Chosakiho, publication? How are the operations of those regional core hospitals privatized? City officials on the ground can no longer explain the "reasons" or the "background." What is visible in front of us may be possible to explain. However, what is not in front of us can be challenging to explain. We can see the significance of the green forests and farmland left behind due to Tamura's efforts against their development pressure.

An academic paper is based on the assumption that a third

party (other than the author) can verify the arguments developed by the author using the same materials. These materials are essentially public documents. Confidential material can become a source of information as long as it is made public when the paper is published. In other words, we do not accept claims based on our own experience or because we think it is true. It is also expected that the research results of our predecessors are respected. It is assumed that the results of these prior studies have been properly verified. Incidentally, this writing by Taguchi is an "essay," not an academic paper.

There were no academic papers written by third parties on Tamura until Taguchi started writing for the Architectural Institute of Japan's collection of peer-reviewed papers. The only such paper that exists is Tamura's own dissertation (doctoral thesis), entitled "Residential Land Development Control Guidelines -Establishment Process and Effects" (October 1980, Department of Urban Engineering, Faculty of Engineering, University of Tokyo). Tamura's place in the history of town planning in Japan is therefore still unfixed. No one denies that he was a great man, but there is a complete lack of analysis as to how great he was and what his achievements were from a historical perspective. In the first place, there is no academic explanation of what Tamura calls the "planning and coordination function." I myself understand Tamura's concept of connecting vertically divided organizations horizontally. Some people say that Tamura used the "project method" a lot. This may be true, but I can't justify it academically vet. By the way, "academic" means objective and scientific.

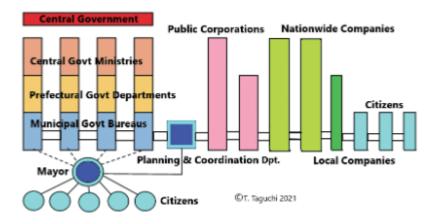


Fig.3 Tamura's illustration of the planning and coordination function. English translation and re-drawing by Taguchi ©T. Taguchi

#### 3-2. For the benefit of future generations

In order for future generations to understand predecessors the theory and practice of studies must be able to be "reproduced." Without this, they become "myths." People don't know how they were created, although they are there. I often make requests for information disclosure from the local government and public bodies, including Yokohama City Government, to obtain data for my research. When I requested disclosure of a policy decision paper (circular) from 50 years ago at city administration, the official in charge showed a strong interest in why I was doing it. I explained to him that I was putting together a history of the past so that the next generation could learn from it. It takes a long time and energy to compile a research paper. I always send copies of the paper to governmental departments that have helped me.

Just recently, I received an early morning phone call from Vancouver, Canada. It was the 85-year-old retired head of the old Japanese consultant team for the urban renewal project in Baghdad, Iraq, which Tamura initiated and in due course was involved with, who had seen the NPO's website and offered to provide accurate information about the project. This is the kind of encounter we will continue to experience as long as we disseminate information globally.

Finally, if we insist that Yokohama's innovative town planning was only possible because of Tamura, and not because of anyone else, then it will not be inherited. I would like to think that anyone who makes an effort, even a slightly inadequate one, can come as close as possible to Tamura's ideas and competence. It is with this in mind that the NPO members and I continue to work hard on our academic research. We would like to ask for the continued support of many people, both inside and outside the NPO.



Fig.4 Taguchi is on the far left with Mr. and Mrs. Tamura in the 1990s at the "Town Research Camp" at British Hills in Fukushima Prefecture. ©T. Taguchi

# Toshio Taguchi, vice president, Akira Tamura Memorial-A Town Planning Research Initiative NPO.

Toshio Taguchi has a Ph.D. in Town Planning (Waseda

University) . He was born in Saitama Prefecture in 1952, and is now 68 years old and living in Yokohama. At the age of 22, after graduating from the university's architecture department, he studied urban design at the graduate school of Manchester University in the U.K. After returning to Japan, he learned about the activities in Yokohama City by Akira Tamura and his colleagues. In 1978, while envisioning a new "design control system" for urban development, he joined Yokohama City Government and was assigned to the Urban Design Division of the Planning and Coordination Department. Taguchi worked in the city government for 13 and a half years.

Taguchi's papers on Akira Tamura's research in Yokohama after the establishment of the NPO:

- An examination of the Joint Development Concept by the Lindsay Administration regarding its Lower Manhattan Expressway as an urban highway planning in New York, Journal of Architecture and Planning, Architectural Institute of Japan, No. 780, February 2021
- 2. The autonomy of local governments in the beneficiary-pay system for the construction of the Osaka Midosuji Subway Line and the Yokohama Minato Mirai Line, Collective papers published at the annual conference of the Architectural Institute of Japan, September 2020
- 3. The Role of the Local Government Planning and Coordination

Section in an unprecedented move to underground the motorway in the middle of Yokohama City, Journal of Architecture and Planning, Architectural Institute of Japan, No.769, March 2020

- 4. Akira Tamura's research as an attempt of the archive of the person of the town planning history, Collective papers published at the annual conference of Architectural Institute of Japan, September, 2019
- Capture land value for building infrastructure: Comparing China and Japan, Toshio Taguchi (Japanese case), Nannan Xu (Chinese case), Conference of Comparative Urbanism: Global Perspectives, the Urban Studies Institute, Georgian State University, March 2019
- The Adoption and Abolition of the Local Development Exaction System by the City of Yokohama, Journal of Architecture and Planning, Architectural Institute of Japan, No. 753, November 2018
- 7. The Adoption and Abolition of the Local Development Exaction System by the City of Yokohama, The 18th International Planning History Society Conference - Yokohama, July 2018
- 8. A Chronological Study regarding the Planning Processes of the Central District of Minato Mirai 21, A Waterfront Redevelopment Project in Yokohama, at its Inception Stage, Journal of Architecture and Planning, Architectural Institute of Japan, No. 735, May 2017

## NPO記念誌原稿「田村明さんと私」

#### 関根龍太郎

田村明さんに初めてお目にかかったのは、2005年10月11日のことである。その頃、住宅を設計するかたわら、住宅を取り巻く都市についてもう少し考えてみたいと思い、人伝てに知った渋谷のまちづくりの会に出席していた。渋谷にハーバード大学と慶應義塾大学の教授・学生がくる催しがあり、そこに伊藤滋氏と田村明氏が出席するという。「君もくれば」と声をかけて頂き参加した。

田村さんの名前は以前から存じ上げていた。会ってみたい人だっ た。そこで井上正良さんにお願いしてご紹介頂いた。武基雄先生が 亡くなられたすぐ後で、武先生が大学院の授業で「君たちは、集落 の美しさというものをどう考えるか と質問された、といったら、 間髪を入れずに、「君はその問題をどう考えるの」という質問が飛 んできた。「大きく見れば材料や屋根の勾配など共通ですが、細か く見ると微妙な違いがある。その共通性と違いがつくるものだと思 います。| というようなことを答えたら、それにはふれず、「まちづ くり塾というのをやっているから、いらっしゃい といって下さった。 初対面でもいきなり核心に切り込んでくる話術は田村さんらしい。 まちづくり塾にはその月から参加して、先生ご存命中は一度も休ま ず出席した。田村明さんは、私が出会うべくして出会った方だった。 田口俊夫さんと私を引き合わせてくれたのは、田村千尋さんだっ た。「田村明の実績を、客観的かつ科学的に検証し発信したい」と いう田口さんの考えに、私は即座に賛同した。田口さんは、大学院 で武基雄研究室に所属していたという。私の研究室はその隣の隣だっ

2019年7月、田口さんが、西山夘三記念すまい・まちづくり文庫

た。不思議なご縁である。

を訪ねると聞いて、「私も行きます」と手を挙げた。西山夘三は、住宅の設計者・研究者にとって巨大な存在である。私も遠くから仰ぎ見ていたが、慌ててにわか勉強をした。西山は、生涯を通じて住宅を考え続けたこの国では珍しい人である。戦前の庶民住宅の実践的研究から寝食分離の住戸プランに通じる業績は、日本住宅公団の団地に引き継がれた。本人がメモ魔だったこと、京都が爆撃で焼けなかったこと、家族の涙ぐましい協力等々により、蔵書やメモなどが一括して保管されている。西山が生前批判していた積水ハウスが、NPOに場所と資金を提供しているという。現地を訪れ、膨大な資料に圧倒された。

私自身、大学の研究室から住宅中心の設計事務所に就職して社会 人としてのスタートを切った。その後、ゼネコンに行き、設計と関係ない業務をやらされるなどしたが、今日まで、住宅の設計は細々 と続けている。西山を身近に感じ、改めて住宅は私の出発点である ことを確認し、それを根っこに生きて行こうと思った。

前後して現代まちづくり塾で、「住まいとシゴトの分離」「集まって住む住み方」という住宅・コミュニティ関連の講義を担当し、田村の著作を読み直した。住宅を「人間の生活のうえで基本的に必要なもの」「都市は住居という生活拠点の集合体であると見ることもできる」とした上で、「住宅は一戸だけで成り立っているわけではない」という。住宅を、都市やコミュニティの基盤としてとらえていることを再確認した。日本の都市計画は国家主導で、田村さんはそれに抗して、自治体や市民が主導する「まちづくり」を唱えた。日本の都市計画では、人々の暮らしという大元が軽視されてきた。「道路・橋梁及河川ハ本ナリ、水道・家屋・下水ハ末ナリ。」(東京府副知事芳川顕正)という言葉がある。都市計画家・石川栄耀がレイモンド・アンウィンに名古屋市の都市計画図面を見せたら、「あなた方の都市計画には生活がない」といわれたという話もある。これは、

日本の近代に通底する問題でもある。田村と西山は、普通の人々の くらしから住宅や都市を考えたという点で共通している。

私は都市計画の専門家でもないが、田村さんの横浜市におけるまちづくりは、日本近代史上に決定的な意味をもつと考える。田村さんは、人生前半、いかに生きるか、何を仕事に生きるか、ということで大変悩んだ人である。その人が、横浜市のまちづくりにかかわることになるのには多くの偶然が作用している。戦災で中心市街を焼失ししかも進駐軍により占拠されたために復興が遅れていた、そこに飛鳥田一雄という革新市長がいた。田村は、横浜市のまちづくりの指針として都市の骨格をつくる「六大事業」を提案した。経済成長、人口増の活力ある時代、横浜市は、田村の指揮の下「遅れてきた戦災復興」を進めることになる。中央官庁を避けて日本生命で不動産の実務を学んだ田村は、あたかも巨大な不動産会社と化した横浜市で、不動産事業の裏側を熟知した公共の主体として辣腕をふるった。

田村明のまちづくりの何が優れていたのか。中長期的な見通しを 誤らなかったことだと思う。どうしてそういうことが可能だったの か。それは今後の田村明研究の中心的課題になるだろう。

田村明のまちづくりの特長は何か。

一つは時代の動向に対する読みである。現在と違って、先行事例は世界各地にあったから、勉強すればある程度可能であったと思う。 だが、田村は人類の歴史と文明について深く学んでいた。

二つ目は、都市の本質についての理解である。都市計画法施行に 当たり、容積率を少なめに設定したのは、都市が長い時間の中で成 長し衰退することを知っていたからだろう。港北ニュータウンでは、 業務地域を設定し農地を都市農業と位置づけて残している。ニュー タウンは、20世紀前半にヨーロッパで巨大都市対策として議論され、 実際には第二次世界大戦後、大口ンドン計画として初めて実現、以 後世界中で建設された。だが、イギリスのニュータウンが業務機能と一体なのに、日本の多くが「ベッドタウン」として計画されたことの将来的な危険性を田村は指摘していた。

三つ目は、横浜という地域に密着して、地域が自立する筋書きを 考え抜いたことである。本来、地域に立脚した都市計画と国家の視 点による国土計画は拮抗し、互いの視点を生かしつつ総合的に止揚 されるべきものである。そうならなかったのは、余裕がなかったた め国優先で進めざるを得ず、人材も国に偏在していたからだろう。

四つ目は、都市を、普通の人々のくらしという視点から考えたことである。現代まちづくり塾に遺した170項目のプログラムには、「都市に住むこと」という章がある。さらに、人間とはどういうものか、ということを考察する章もある。

五つ目は、都市を市民の視点から考えたこと。だが、田村のいう市民は、単純ではない。ただ市民の主張を政策に盛り込む、ということではない。「未来の市民」をも対象にしている、という。ジャン=ジャック・ルソーの唱えた「一般意志」という概念とつながっているのではないか。

六つ目は、自治体ができること、やらなければならないことを考え抜き、意図的計画的に自治体職員を育てたことである。地域のヴィジョンを描き、そこに至る道筋を考え、それを基に企業や住民を巻き込んだ。しっかりと考え抜いたヴィジョンがあるから人は従う。前提条件が変われば変えられるし、そのプロセスが公開されていれば、検証も変更も可能である。

七つ目は、田村という人間を貫き律していた、何ものかである。 新しい知見、異なる意見につねに開かれていて、自分のものの見方 に固執したり権力をもって押し通したりするのではなく、ただ最善 のものを求め続けた。

以上は私の個人的な考えであり、これから田口さんたちと検証さ

れなければならないことである。田村明のまちづくりが内包するものはそれまでのものとは本質的に異なるもので、それは私たちに、これまでとは全く違う都市、地域、社会のあり方を提示しているように思えてならない。

横浜市でのまちづくりは1981年に終わったが、田村の一生はそれで終わったわけではない。『まちづくり』三部作、『江戸東京まちづくり物語』に加えて、『「市民の政府」論』など多くの著作を残した。最晩年の田村は、横浜と東京に二つのまちづくり塾をつくり、専門家というより素人の市民を相手に、都市やまちづくりについて語り続けた。東京の塾では、170項目のプログラムを立て、毎月の講義のために10冊ほどの本を読んで準備していた。東京で生まれ育ち、子供のときから都市に深い理解と関心をもち続けた田村にとって、80歳をすぎてなお、都市とは永遠に変わり続ける運動体であり、全てを解明しえたわけではない謎であり、田村の都市への関心は衰えることがなかった。まちづくり塾では、一人一人が発言を求められた。一方的に自分の話を聞かせるのではなく、共に考えたかったのだと思う。そこに立ち会うことができたことは、この上もない幸せだった。

田村さんに出会えたおかげで私はまちづくりという活動を知り、 多くの友人を得た。

## 田村明記念・まちづくり研究会に参加して・・・

#### 寺澤 成介

今の僕は小学校の作文の授業で、原稿用紙を前に書くことが何も 浮かばず途方に暮れている気分に似ている。何が書けるのか、改めて、 田村さんとの出会いを思い出してみた。

大学時代に読んだ雑誌で、住民自治のもと都市計画の計画主体は 自治体であると論じている田村さんの文章に出会ったのが、最初で あった。この時まで計画主体については漫然と国などの行政かなと 思っていて、明確な論に衝撃を受けたことを覚えている。ただこの時、 僕は自治体と共に市民も計画主体と受け取っていた。当時の学生運 動・住民運動の影響を受けていたのかもしれない。改めて当時の幾 つかの文章を読むと、田村さんは市民参加については語っておられ るが、市民が計画主体とは言っておられないことに気が付いた。

また、市民の政府論の中でも市民は計画主体として登場してこない。市民には、街づくりに主体的に関わり、自らが街づくりを実践していくことを期待しておられた。

だから、大学で教え、私塾を開講し、各地の街づくりの人々との 交流を重ねることにより、田村さんの考える市民が一人でも多く生 まれることを望んでおられたと思っている。当研究会の今後の活動 が、主体的に街づくり関わる市民を一人でも多く生み出すことを願 うばかりである。

因みに現在の都市計画法では、都市計画に関わる主体として、行政、民間、住民・市民、専門家を挙げ、これらの主体が互いに協力し合って計画を進めることとしている。

また、6大事業などの横浜市の事業も紹介されていて、横浜は面白い仕事をしていると感じ、この出会いが無ければ、僕が横浜市に就職することも無かった。

入庁して初めて田村さんにお会いしたのは、係長への昇任試験の 集団面接の時だった。受験者が4名、面接官は6~7名で、企画調 整局長の田村さんの名前もあったが、面接会場に田村さんの姿はな かった。お忙しいのだろう、会えないのは残念と思った。

面接が始まって半分も過ぎた頃に、悠然と田村さんが会場に入ってこられた。流石、大物と言う感じである。そして、我々の面接時間が過ぎようとした時、やっと終わると思った瞬間に、田村さんから僕に環境アセスメントについての質問が飛んできた。残念ながら新聞記事を斜め読みした程度で、ほとんど理解していなかった。しかし、何か答えなければと思うも、的確に答えることが出来るはずもない。田村さんからの質問が僕一人に延々と30分程続き、ゴニョゴニョと答えた結果、田村さんからの「君は技術屋ではない」の一言で面接は終了した。次にお会いしたのは、20数年後、面接の時のことをお聞きしたが、田村さんの記憶にはなかった。あの時ゴニョゴニョ言わずに、分かりませんと素直に答えたらどうだったのかとふと思った。

僕が当研究会と関わりを持ったのは、田口さんからの一通の手紙だった。「今、田村明さんの関係で、首都高速横羽線の関内地区の地下化について勉強している。そこで当時仕事に関わっていたTさんにお話を聞きたいが、面識がないので紹介をして欲しい」との依頼であった。その後、NPO法人発足時に会員への誘いがあり、暇をやや持て余していた僕にとっては、老後の暇潰しにでもなるかと軽い気持ちで参加することにした。

今、田村さんにお会いできるなら是非お聞きしたいことがある。

それは都市部における「空き地(明き地)」についてである。当研究会で田村さんの教え子の方々と話し合う機会があり、「空き地について、田村さんは何か言っておられたか?」と聞いてみたが、反応は特に無かった。田村さんが横浜市におられた時代は、市街化調整区域が大きな空き地だったかもしれない。

なぜ空き地なのか。空き地を考える切っ掛けの一つは、区に勤務 していた時の話である。市営住宅の予定地を、少年野球や少年サッ カー等が使っていた。急遽市営住宅が建つことになり代わりの場所 の相談を受けるも、市街化している中では見つからなかった。

二つ目は、2005年頃のMM21地区で、未利用地に大きなテントを張ってイベントが行われており、長蛇の列で賑わっていた。この街が完成してビルが建ち並んだ時、この様なイベントは開催できないんだなと思った。

これらの事から、街に空き地が必要ではないかと思い始めた。空き地は使われていない土地であり、一定期間自由に利用できる土地である。そこで、必要な時期に必要な使い方ができる土地=空き地を確保することは、街づくりにとって有効であると思われる。

その例として、江戸が江戸として、また東京へと成長する中で空 き地がどのように関わっていたかを見てみたいと思う。

明暦の大火の後、防火対策として江戸市中に日除け地(明き地) を設定し、両国橋のたもとや寛永寺の参道などの道路の幅員を拡げ て広小路を設置するなどした。此処には直ぐに撤去できる建物は許 可されたので、仮設の見世物小屋や露店が建ち並び、盛り場として 発展し、現在の繁華街に成長している。

また、明治の新政府が京都から首都機能を移転するにあたって、 東京は7割を占める武家地(空き家状態の大名屋敷や幕臣屋敷は「明 き地」と言える)があり、首都機能に必要な各種施設用地として自 由に利用出来る点が考慮された。 しかしこの例は明き地を有効に使いはしたが使い切りであり、新たな明き地を生み出してはいない。サスティナブルな都市の成長を考えると、例えば、橋の架け替えのための仮橋用地としてあらかじめ確保している橋詰広場の様に、都市の中に交換用地や仮設用地として幾つかの明き地を用意することが、次の発展の準備になるのではないか。

少子化による人口減、コロナ渦によるリモート勤務等により、東京都の人口流出や都心部における床需要の変化を見ると、今後は住宅地だけではなく都心部でも明き地が増える可能性があり、明き地を街づくりに取り込む好機が来ていると言える。

これからの街づくりにおいて明き地を、道路、上下水道、公共的な交通機関、電力・通信施設等と同様に、都市全体にとっての「社会的共通資本」として位置づけ、街づくりの道具としていかに使い、いかに生み出すかが重要なテーマになると考えている。

田村さんが「明き地」に対してどの様な発言をされるのか、是非ともお聞きしたい。一笑に付されるか、少しは興味を持って頂けるか。

【付録】 明き地の効用について少し考えました。宜しければ御笑覧下さい。

接合部における適度な"遊び"が、しなやかで安定した構造を作るように、都市空間の中に"遊びの空間"=明き地を創ることが、街をしなやかで持続可能な構造にする。

明き地を活用した持続可能な街づくり

・転貸活用…ビルの建て替え等、施設の機能更新時に、リプレイス 用地又仮移転用地として活用出来る。リプレイス後の元の用地は 新たな明き地にする。

- ・新規活用…次の時代の街づくりのために、新しい機能や施設を明 き地で先行的に整備することが出来る。旧機能の用地は新たな明 き地にする。
- ・仮設活用…都市の成熟に伴い必要とされる施設が変化するため、 需要に合わせて仮設による早期対応が可能となる。役割が済めば 明き地に戻す。

明き地による都市型地域コミュニティの醸成

#### ・祝祭的空間の復活

寺や神社の境内は、市や見世物小屋がたつ等イベントを開催し、 街の人々の交流の場、コミュニティの醸成の場にもなった。 現代では、特に新市街地において境内のような空間が無く、明き 地が祭りなど街の様々な行事の提供の場となり、都市型コミュニ ティを創出できる可能性がある。

#### ・子供たちの遊び場の復権

僕の子供の頃は、明き地(原っぱ)は大切な遊び場だった。高度 経済成長以降、明き地に住宅やビルが建ち、子供達の遊びもテレ ビやゲーム等室内での遊びに変わり、外で遊ぶことが無くなって いった。そのような子供たちに遊び場を提供できる。

#### 災害時の仮設対応用地

災害時には避難場所となり、その後は仮設住宅や瓦礫置き場など 緊急避難的に必要な施設の設置が可能となる。今回のコロナ禍では、 都市内の明き地にコロナ専用の仮設病棟を速やかに建設することが 出来る。

## 企画調整室「特別な時間」からの出発

#### 遠藤 包嗣

私の父、遠藤包義の話から始める。父は1920年(T9)生まれで、 海軍から復員後、横浜市土木局に就職し、設立された労働組合の役 員を引き受け、1949年のレッドパージで処分された一人だった。 その後交通局に入り、飛鳥田市政の時は交通局運輸部自動車課長だっ た。1967年(S42)に建築局指導部に宅地指導課が置かれ、父は 交通局から呼ばれ初代の課長になった。

田村明さんが横浜市に入った1968年(S43)に企画調整室ができ、8月に「横浜市宅地開発要綱」が成立し、宅開要綱の窓口が建築局指導部宅地指導課に置かれた。当時の宅地造成工事の申請件数は441件で、330件の工事許可が出されている。台風や豪雨の度に開発区域周辺の市街地に崖崩れや河川氾濫などの被害を出すことが多く、指導・検査体制の強化が問われ、大変なポストだったと思われる。宅地指導行政にしがらみが無く、また関係局に土木局時代の知人がいたことも期待された理由かもしれない。市民生活を守る防災問題は土木職の基本領域で、また開発利益の還元の立場からの民間業者の指導は激務になることは覚悟していたと思うが、誠意をもって務めたようだ。大規模開発問題など総合調整機能は企画調整室に置かれたため、田村明室長との関係も深かったと聞く。1970年1月に事故で死亡、私が大学3年の冬だった。

私は、1971年(S46年)に企画調整室に入った。東京都立大学で土木工学科(衛生工学)を卒業したが、都市計画・都市再開発に関わりたかった。当時、横浜市では下水道整備を急いでいたため人材として期待されていたらしかったが、面接の場面で私は計画局を強く希望した。結果は、企画調整室(企画課)への配属だった。

企画調整室は、発足して4年目の組織だった。企画課は宮腰課長 (下水道局)以下、30代の若手係長3人、田代係長(港湾・道路局)、 若竹係長(建築局)、清水主査(道路局)と、職員は池田さん(都市工)、 長谷川さん(土木)、佐藤さん(土木)、水嶋さん(事務)の4人で、 そこに私と地曵さん(都立大建築院卒)が加わった。水嶋さんを除いて、職員は企画調整室が初めての職場だった。総勢10人で、6大 事業に関係する企画・調査・事業推進調整と、総合交通計画関係を 担当した。私は、金沢地先埋立事業の推進・調整を担当する田代係 長の下で、埋立事業局を中心とするハード分野に係わり、仕事をお ぼえた。経済局を中心とする工場移転関係のソフト分野は、水嶋さ んが中心に動いていた。隣の作業室に嘱託で、アーバンデザイン担 当の岩崎さんと国吉さんがいて、企画課として一緒に活動した。

企画調整室は、不思議な職場だった。自由な時間があり、勉強を しながら、議論をしながら仕事をする職場だった。都市・建築・環 境問題が、個人的なテーマで、同期の仲間との勉強会もやっていた。 他都市の都市づくりにも注目していた。東京と神戸は、特に意識し ていた。

田村明室長は、「非定形流動」と「大テーブル主義」を良く語っていた。市に関わる課題については、相談を持ち込まれたら、関係すると思えば踏み込んで検討、調整する。新しい問題は、各局で受け止められなくても、企画調整室が受ける。検討の場面では、肩書にこだわらず、職員も積極的に発言して良いという姿勢だった。行政の継続性を強く意識する保守的な発想にたいし、市民の側から問題に取り組み、調整案や新しい提案を打ち出し、効率的に推進するタスクホースだった。特に、6大事業の関係では、プロジェクト作業が効果を発揮した。

「下位上動の原則」は、田代係長が使っていた言葉だが、局の枠

57

を超えた課題の解決のためのプロジェクト作業では、頭の固い担当 局の上司(局の枠で考えている)に対しては、双方の係長・職員が 事前に十分詰めて、企画調整室を利用して、合同会議の中で上司の 方針を変えさせるという意味で、プロジェクト作業の基本だった。 金沢地先埋立事業では、多くのプロジェクト作業が行われたが、目 標スケジュールの中で成果は上がった。

「ただでコーヒーを飲んでくるな」という言葉もあった。企画調整室の一員として会議に出た場合は、課長会議でも黙ってメモを取るだけでなく、説明でも質問でもいいからしっかりと発言をする。 発言すれば、後で相手が相談に来やすい。当時は、来客にはコーヒーを出していた。様々な課題に係わり、頻繁に調整会議に呼ばれた若竹係長が、私たち職員に常に語った言葉だった。

「生意気な職員」「しゃべるのは上手いが実務を知らない」が他局から見る企画調整室育ちの職員イメージだった。田村さんは当時40代で、30代の若手係長の教育に力を入れ、積極的に議論し、企画調整室の運動を各局に広げる目的意識で活動された。20代の若い職員には、元気の良さと、自由な職場環境の中で自ら目標を選ぶことを期待された。私は田代係長と3年、若竹係長と1年、高橋正宏係長と1年チームを組み、企画課の中で街づくりについての仕事の幅を広げた。

企画調整室の企画課は、6大事業に関係する新しい課題に向かって調整をしているため、都市活動に関する理解や横浜市の課題の理解と視野は広いが、企画課育ちの職員には市民・事業者・国県に対する行政実務の経験はほとんどない。4年目の時に、このまま企画調整室に残り係長になり新人職員を指導するのは無理と感じた。同期の土木職員は、各局で設計や検査、業者の指導など、法や条例、技術基準等を基にした行政実務を経験し実力を付けてきている。私も、都市計画や再開発を担当するための実務の勉強をしたいが、ど

うするか迷った。6大事業には関わりたかったので、計画局の港北 ニュータウン建設部に異動していた田代さん(港北ニュータウン建 設部建設課長)に相談したが、意外なことに日本住宅公団と横浜市 の関係があまりうまく動かず、組織内部も縦割りで難しい状態と聞く。

翌年、港北ニュータウン建設部長に小林弘親さんが呼ばれ、立て直しが始まった時、公団と市の間でタウンセンター設計問題が起こり、企画調整局で短期間に調整することになった。広大な斜面地に、鉄道駅を中心に、バスターミナル、商業・業務、公共施設などの配置計画が提案され、模型がつくられた。岩崎さんを中心とするアーバンデザインチームの精度の高い仕事だった。設計問題は企画調整局案で合意されたが、これから造成されて街になっていくには大変な時間とエネルギーがいるが、大丈夫なのか正直不安を感じた。都市問題の顧問会議のあと、田村さんと小林さんが港北ニュータウン事業について懇談している場で、港北ニュータウン建設部で街づくりに取り組みたいという思いをぶつけた。小林さんは快諾してくれ、田村さんも驚きながらも応援してくれた。5年目だった。

新しい課題は、宅造協議をレールに乗せ、造成工事を着実に推進する仕事だった。現場の基本として土と水と擁壁の防災問題や、開発事業者の指導、道路・下水・公園等の施設管理のルールを勉強して、その後、事業計画に取り組みたかった。

1976年4月、企画調整局から行政の開発事業分野へ飛び出した。 工事の大幅な遅れで地元から抗議の陳情がでるなど、港北ニュータウン事業は大変な場面にあったが、新たな職場は、日本住宅公団の川手昭二さんや港北ニュータウン建設課の高井労さん、地元の方々と、目標を高く掲げ問題を克服する意識を持つ多くの人々との、素晴らしい出会いを用意してくれた。

その後、横浜市職員として、新横浜地区のまちづくり調整、上大

岡駅前再開発事業、港湾局のみなとみらい21担当、企画局プロジェクト推進室、(株)横浜みなとみらい21(出向)等、都市開発部門を中心に仕事をしてきたが、最後に港北区長を3年半務めた。人口30万人、新幹線新横浜駅をもち、過去水害を繰り返した鶴見川を抱える港北区では、「福祉と防災のまちづくり」が課題だった。ふるさとサポート事業等の自主事業を使い、地域を愛する区民の方々の盛んな地域活動を支援して、共にまちづくりを進めていた。

一度、菊名に住む田村さん御夫妻が国政選挙の期日前投票のついでに、区長室に寄ってくれた。「あのやんちゃな遠藤君が区長になるとはねー、がんばってね」と激励された。若かった企画調整室の時代が、懐かしく思い出された。いまでも忘れられない言葉だった。

## 自治体都市計画の矜持

#### 星卓志

北海道大学大学院で都市計画を専攻する学生の時、どういった仕事をしていくべきか考えあぐねている中、田村明氏の講演会を小樽へ聞きに行った。1984年のことだった。

小樽では、1970年代から80年代に、小樽運河を埋め立て6車線の道路とする計画に対する反対運動が、「小樽運河を守る会」を中心に大きく展開されていた。田村氏は、恐らくこの運動の当事者に依頼されて講演をされたのではないかと想像している。話の内容は、横浜市のまちづくりについてであった。

それまで、私は行政職員になることを選択肢として持っていなかった。全くの無知によることではあるが、かつての公務員への否定的なイメージを信じていた。すなわち、「でもしか公務員」という言葉があったように、「公務員にでもなろうか。」、「公務員にしかなれない。」という対象。ろくな仕事をしない人々、新しいチャレンジなどとは程遠い仕事、と馬鹿にしていた。全く恥ずかしい限りだ。

田村氏の話を聞き、目の覚める思いだったことを鮮明に覚えている。細部は忘れてしまったが、6大事業を中心に、さまざまな闘いを経て画期的な事業を成し遂げていることに感激した。

この田村氏の講演を聞き、自治体都市計画の仕事に就くことが憧れになり、翌年、札幌市に就職した。入ってすぐに、企画調整局という組織があることを知り、横浜市の影響を強く感じた。

有り難いことに、28年間の札幌市勤務の大半で、都市計画、企画、都心のまちづくりなどの仕事に携わった。その中で常に、田村氏の行政への態度、それは矜持とも言える姿勢を、たった一度の講演で強烈に示してくださったことが頭から離れなかった。札幌市勤務時

に2度ほどお目にかかった中でこの話を申し上げたら、嬉しそうに 励まして頂いた。

小樽で行なわれた田村明氏の講演を聞き、それまで無知が故に馬鹿にしていた自治体の仕事が、いかに重要で誇りを持って取り組む価値のあるものかを知る事ができた。その後の私の人生に計り知れない影響を与えて下さった。

## 横浜で田村明と出会う

遠藤博

#### 1.こどもの頃の横浜

朝鮮戦争が休戦した1952年に生まれた私は、ベビーブームのピークの後の世代。三渓園は、市電の4番を使い家族で行った初めての海水浴だったのだ。しかし時代は急激な開発が横浜を変えていった。横浜市への人口の大量流入は「二部授業」なんて若い方にはわからないだろうなあ。私が横浜の小学校低学年だった頃、多くの学校は生徒があふれ、午前と午後に子供たちを二つに分け授業を行っていた。プレハブ校舎はザラにあった。そして遠足の定番はあの「三渓園」。根岸の埋め立てが進み煙突が無粋に立っていた。一方「公害問題」が騒がれていたそのころ、東京の親戚が住む葛飾へ行っても水道の水は薬臭くまずく、空はいつも薄暗く、多摩川を渡り帰って来ると子供ながらホッとしたことを覚えている。

小田和正の唄のとおり、開通したばかりの根岸線で関内へ行けば、 運河の廃油の混ざった匂いが鼻についた。周辺の景色はごく平凡な 雑居ビルしか記憶にない。いまは高速2号線が関内駅の脇を走って いるあたりだ。こどもの頃横浜は沈んだまちだった。

## 2. じっちゃんの名に懸けて

私の父方の祖父は埼玉県美里町、祖母は栃木県佐野市の農家の生まれ育ちで明治生まれに珍しく女学校で学びテニスを楽しんだことが御自慢だった。横浜の住人の多くと同じで、浜っ子とは呼べない市民である。祖父はみなとみらい21の前身三菱ドッグ(旧三菱重工

業横浜造船所)に勤めていて、借家は野毛山動物園近くにあった。 父は旧横浜市立老松中学の出身である。母は東京生まれだが、その 父親は親に勘当!され一旗揚げるために横浜にたどり着き、縁あっ てハンコ職人になった。私はその血を引いたのか版画の下絵を描く と、いやに教師に褒められたことがある。教師に褒められたのはそ れきりだが。職人気質に親しみを感じるのはじっちゃん達の影響か。 いずれにしても横浜は不思議と人を引き付けるまちだった。

#### 3.まちづくり研究会での出会い

64

社会人になりたての頃まで、横浜市の中心西区久保山近くに住んでいた。市営墓地が近く、家の周辺は雑然とした古い住宅密集地だったが、こどもの頃の私にとっては、墓地で遊んだり、遠く南区永田町までザリガニ採りに遠征したり、南区の旧高商(現横浜国大)敷地の土器を掘り出して遊んだりと楽しいまちだった。家の老朽化により不動産会社と処分のやり取りをすることになったが、素人のため知識がない。そこで西区建築事務所へ訪ね相談してみると、意外に親切な対応で、しかも職員のおじさんたちが自信をもって仕事をしているように見えた。どうせ仕事をするならこれだと横浜市の一員になった。家も中古ながら横浜市郊外の旭区希望が丘近くに引っ越した。家は中規模の開発住宅地にあり駅からの道脇に雑木林が残る静かなまちだった。何しろ日中も車の音が聞こえなかった。それもすぐににぎやかになっていったのだが。

新人はどんな世界も夢多く希望に満ちているものだ。横浜市に入 庁して新人研修のとき勉強会への誘いを受け、参加することになり、 1年が経過しようとしていたころ横浜まちづくり研究会に誘われ参 加することになった。そこで初めて田村明と出会った。まだ企画調 整局にいらしていま考えると新人が気やすく言葉を交わせる関係じゃ ないだろうが、田村さんは大勢の新人職員一人一人に「名前はなん ていうの。どんな仕事をしているの」と聞き続けていた。そんな田 村さんと時間を共有することで、ビールの飲み方から後輩への接し方、 質問の仕方など教えられた気がする。

後日局に異動した後上司に、「まち研は中国の梁山泊みたいだね」 とからかわれたが、野心という名の向上心と上昇志向はあふれてい たかもしれない。

#### 4. 横浜まちづくり研究会から横浜田村塾へ

横浜市長だった飛鳥田一雄が市長を辞任し旧社会党の委員長に転身したことにより、田村さんが企画調整局のラインから外されたのをきっかけに当時の若手職員を中心に始まったのが「横浜まちづくり研究会」というところで概ね良いだろう。若手技術職を集めた総務局研修所の田村明を講師にした研修参加者がその中心になったとか、某大学の同窓会のつながりが動いたとかはあるようだが、田村明の「まちづくり」はごく小さくはあったが流れ始めた。

研究会はとても緩い組織で、月1回の例会を横浜市の様々な事業についてその直接の担当係長や担当者がその事業を1時間余りかけ説明する。その後質疑応答があり、そして田村の厳しいコメントが待っている。ただまち研は横浜市の最先端の事業を取上げていたのは確かなようで、まち研が始まって2年後横浜市の管理職試験を締め切り日当日庶務の職員に言われ、申し込みをしたような私が、ほとんど勉強もせずパスしたのは、まち研と田村さんのお蔭と思っている。何しろ何人もの人から驚きの声をかけられたくらいだった。実はそんなまち研も横浜市の有力な人たちに異端視されていると気が付くのはずっと後だった。

まち研の活動が下火になってから普通の市民を対象にした「まち

づくり塾」「横浜田村塾」などが始まり、私も参加させてもらうようになった。直近の話題や田村さんの関わっていた諸事業の現状の概要など担当者の話もあったが、田村さんの講義?形式の「都市論」的なものも多かったように思う。

#### 5. 夢に田村明登場

こどもの頃夢遊病(いやただ寝ぼけていただけ)の行動をしたことがあるくらいで、今でもよく夢を見る。

半年位前ある晩なんと田村さんが夢に現れた。「いま何をやっているの?」と質問されたのだ。まち研以来田村さんとの質疑応答は緊張してしまう。どう答えたらいいのだろう。

いつも田村さんってどんな人と聞かれたら、田村さんは、好奇心が強く、粘り強い、何より実践の人と答える。だから、「何をやっているの?」というのは、あなたは何を実践し、どんなことをいまやろうとしているのかを聞いていられるように思った。

田村さんは天国へ行かれても田村さんを囲んだ我々が何を実践しようとしているのかを見られているように思う。

## 「田村ism」をどう学び、どう生かしたか

漆原 順一(NPO正会員:横浜市職員)

### 1.田村さんと出会ったきっかけ

私が横浜市役所を受験したのは、田村明さんが作った都市デザイン室があったからだった。しかし、その時点では「田村さんが作った」ということは知らなかった。学生の時、建築雑誌でデザイン室の取組の特集を見て、市役所の仕事には、こういうものもあるのだということを知った。前年度の建築職の採用数が2人だったので、これは受かる訳ないと思いながらも、民間企業の就職試験の模擬試験のつもりで受験した。運よく合格し、内定をいただいていた民間企業といずれを選ぶか悩んでいた時、港北ニュータウンを担当していた佐藤孝昭部長から話を伺う機会があった。

港北ニュータウンは区画整理事業中だったが、具体的にどのような仕事をしているのか質問したところ、「今日は担当者が昆虫採集に行っている」とのこと。「昆虫採集?」。造成工事ぐらいのイメージしかなかったので、「どういうことだ?」と思った。昆虫採集は、環境への影響を調べるためと聞いて、「そんなこともやるのか。市役所の仕事は面白そうだ」と感じた。お話は、興味深いことばかりだった。後から知ったのだが、佐藤氏は、田村企画調整局長のもとでプロジェクト室の副主幹をされていた方であった。

横浜市の場合、技術職の新採用職員は、研修期間が2週間ある。 その中で「市政を知ろう」という第一線の係長から仕事の実際を聞く授業があった。その講師が、本NPOの副理事長でもある田口俊夫氏だった。当時、新本牧開発室の主査であった同氏が、都市デザイン室のある都市計画局の所属だったことから、興味深く講義を聞

F.

いたが、時間外にチラシを配って紹介されたのが「まち研」だった。 まち研は、田村さんが横浜市役所の現役だった1980年に、仲原 正治氏と南学氏が設立した横浜市職員の自主研究会である。正式名 称「横浜まちづくり研究会」。他都市の方や民間企業からの参加も あり、200人以上の会員がいて、田村さんが顧問だった。月に1回 程度の定例会の他、国内外の視察旅行、田村さんの執筆協力も行っ ていた。田村さんも毎回参加し、コメントをいただいていた。

#### 2.何をどのように学んだか

#### (1) 横浜まちづくり研究会

研修が終わって、都市計画局都市計画課に配属となり、改めて田口氏から誘われて参加したのが、1987年5月に開催された、まち研の定例会「今、自治体が面白い!地方の目で見る四全総」。田村さんが講師であった。

司会者による講師紹介で、田村さんが元横浜市企画調整局長であったこと、当時、「田村天皇」と呼ぶ人がいたことを聞いて驚き、学歴・経歴を聞いて驚き、そして都市デザイン室を作ったと知って驚いた。講演では、田村さんが打ち出した横浜市の6大事業の話などもあり、事業が有機的に関連しあっていることや、そのスケールの大きさに驚いた。二次会と称する飲み会に参加し、直接、田村さんと話をしたのが、初めての会話であった。これが私と田村さんとの出会いである。

その後、田口氏からまち研の事務局をやらないかと誘われ、事務 局会議に参加。そのメンバーが、仲原氏、南氏、田口氏、内藤恒平 氏、飯島悦郎氏、遠藤博氏、安島馨氏、大蔭直子氏であった。まち 研の定例会では、「田村学校の生徒(元企画調整局)」の面々や「田 村ism」を受け継いだ最前線の人たちから話を聞くことが多かった。 皆、まちづくりに対する哲学を持って、生き生きと活躍している姿 を見ることができた。

事務局では、定例会のテーマ探し、講師の依頼、田村さんとの日程調整、会報作成と発送作業を行った。事務局会議の場所は、今はない外国人船員専用バーの「The Mission to Seamen」など。かつては横浜の老舗ホテルであるホテルニューグランドの通称「マッカーサールーム」を使ったこともあったようだ。

中国返還前の1990年1月の香港視察には、田村さんも私も参加し、 当時再開発予定地で「九龍城砦」と呼ばれた巨大なスラム街にも入 り込むなど、精力的に歩き回るとともに、香港政庁の方や進出して いる日本企業の方と意見交換をした。上海視察では、開発が始まっ たばかりの浦東地区から黄浦江クルーズ、郊外の蘇州まで幅広く見 学した。

まち研の定例会や二次会で、田村さんに単純にアドバイスをいただこうとすると、必ず「あなたはどう考えるの?」と聞き返された。横浜のみなとみらい21事業は、分断されていた都心部の横浜駅周辺地区と関内地区を、都市の規模に相応しいものとするため、稼働していた造船所を移転させ、分断されていた横浜駅周辺地区と関内地区を繋げて強化するものであり、廃れた工場跡地をリニューアルしたのではない。それを「造船所の跡地開発」などと言おうものなら、「そうじゃないんですよ!」と、その言葉に続けて、その間違えについて、そして、都市計画、まちづくりとは、といったことに話が広がった。

まち研では、田村さんの執筆協力もさせていただいた。その一つが、集英社が毎年発行していた現代用語辞典「情報・知識imidas」だ。まちづくりのプロとして書いてほしいとの指示のもと、割り振られた項目の資料を収集した。各項目300文字ぐらいにまとめるの

は、長い文章を書くのと違って大変だった。ようやく書いた文章も、 田村さんから指摘を受けてボロボロだった。私の文章が「・・・と いうことではなく・・・」という否定形から入ってしまったり、長 文になったりしていると「辞典なんだから、初めに短い文章で言い きらないとダメなんだよね。」などの指摘があって、最終的には、 元の文章が跡形もなくなっていた。何年か重ねて、微修正で済むよ うになり、自信がついてきた。

その頃、田村さんから「現代都市読本」という、大学の教養の教科書にも使える本を執筆するという話があり、いくつかの項目を、まち研で書いてみないかという話をいただいた。1項目7000文字程度。私は「ウォーターフロントと再開発」という項目を担当。編集会議で、田村さんから「市民にわかるように。自治体的観点で。国との関係も記載する。」などの考え方が示された。「imidas」の執筆協力で少し自信をもっていたのだが、第1稿を田村さんに見ていただいたら、これがまたボロボロだった。「海辺のウォーターフロントに広がる空間は、人に限りない開放感を与え、ノスタルジーを感じさせてくれる。人類がかつて海で生まれてきたことへの遠い記憶による郷愁の念から来るのだといわれる。」というフレーズは、田村さんにも気に入っていただいたが、それ以外は、ほとんど自分の文章ではなくなってしまった。執筆協力というよりも、ただの勉強になってしまった。

#### (2) 平仮名の"まちづくり"

定例会で田村さんからいただいたコメントで印象に残っているのは「平仮名の"まちづくり"」「地方公共団体ではなく自治体」「金がなくても知恵があれば」「共同ではなく協働」などである。

田村さんの講演の中でも必ずでてくるのが、平仮名の"まちづくり"についてだ。今でこそ平仮名の"まちづくり"は普通に使われている。

しかし、田村さんが使い始めるまでは"まちづくり"は、国等の「総合計画」や「都市計画」であり、市民からは遠い存在だった。そこで、飛鳥田市政では「都市(まち)づくり」という用語を意識的に使ったとのことだ。それが1965年に発表された「横浜の都市づくりについての将来構想」。横浜市の6大事業を掲げた計画である。その後、道路整備や区画整理事業などのハードだけでなく、福祉や文化、生活、それを支える仕組みや人々の活動などのソフトを含む包括的な意味の市民用語とすることを意識して、平仮名の"まちづくり"を使ったとおっしゃっていた。

#### (3) 地方公共団体と自治体

横浜市役所は、地方自治法では地方公共団体という位置づけにある。国の役人も、市町村のことを「地方公共団体」と呼ぶ。法的には確かに正しい呼び方だが、田村さんは、この呼び方が特に嫌いだった。「横浜市は地方公共団体なんかではない。自治体である。」。国の一部地域という物理的な意味では、地方公共団体かもしれないが、国の機能の一部を担う地方ではなく、横浜市は、自ら考え統治する組織、自治体なのだと繰り返し言っていた。その後、地方分権が叫ばれ、地方の時代とかを主張する首長などがでてきて、国の政策としても地方重視がうたわれるようになったが、田村さんはその魁だったのである。

#### (4) 金がなくても知恵があれば

自治体は、それぞれ人口規模も違えば、財政規模も大きく違う。 東京のベッドタウンの色合いが強かった横浜市は、企業の数が少な く、人口規模に比べて財政力が脆弱である。これを是正する目的も あって企業誘致や特別自治市の実現に取り組んでいるが、一朝一夕 に進むわけがない。田村さんの頃は、その状況がさらに悪かった。

そのため、民間資金の活用などに知恵をしぼって、みなとみらい21 事業などを進めてきた。

一方、企業城下町といわれる自治体は、財政が裕福である。このことについて、田村さんは、次のように語っていた。自治体に「金がないけど知恵もない」のは仕方がない。最悪なのは「金はあるけど知恵がない」状況。無駄なこと、余計なこと、取り返しがつかないことをしてしまう。金がなくても知恵があれば、色々な工夫によって、まちづくりを進めることができるのである。

#### (5) 共同ではなく協働

72

田村さんは「協働」という単語をよく使われた。当時は、ワープロで変換しても、この文字は出てこなかったが、今では、普通に使われるようになっている。まちづくりを進めるため、市民や行政、民間企業などが「協力」して「働く」という意味を込めた言葉である。田村さんの著書で、まちづくり3部作と呼ばれ、各地のまちづくりに関する取組や、これから取り組む際のヒント、田村さんの考えが書かれている岩波新書の『まちづくりの発想』『まちづくりの実践』『まちづくりと景観』は、「協働」の実践例がたくさん取り上げられていて感動を覚えた。『都市ヨコハマをつくる:実践的まちづくり手法』や『自治体の政策形成』は、仕事を進める上で常に参考にした。また、『都市プランナー 田村明の闘い〜横浜〈市民の政府〉をめざして』は、田村さんの横浜での取組の集大成として、まち研の定例会や二次会などで伺ってきた裏話なども書かれていた。しかし、これらにも書かれないことや、取り留めのない話も、色々と記憶に残っている。

私が書店で見つけて購入した写真集『英国のカントリーサイド』 (増田正<写真・文>、集英社、1990年)の話を、田村さんにさせていただいたことがある。「イングランドやウェールズの古民家のかやぶき屋根が設計図では描けないような何とも言えないカーブに なっていて、とても素晴らしいんです。こういうのが豊かさのあるまちづくりというものですかね。」と私の思いを伝えた。その際、「かやぶき屋根を葺く職人をサッチャーというが、職業が名前になることが多いので、英国のサッチャー元首相の祖先は、かやぶき屋根職人だったのではないか」と話していた。このことと、因果関係があるかわからないが、田村さんが、その後、1992年に英国のロンドン大学に留学され、イギリス2部作『イギリスは豊かなり』『イギリスは奥が深い』を書かれている。

田村さんとは、自宅が近かったこともあって、まち研二次会のあとは、いつも一緒に帰った。私が自身の結婚の報告をし、披露宴でのお言葉をいただけないかお願いしたのも二次会の帰りだった。我が事のように喜んでいただき、二人でもう一軒飲みにいった。また、ある時、家族とニュージーランドのクライストチャーチへ行って、街が美しかったことを話すと、田村さんも既に訪れていて、著書にも「こうした都市では人も優しい。信号のない横断歩道に立っていると、大きなトラックが黙って止まり、歩行者を優先させる」と書いている。クライストチャーチは、ガーデンシティと呼ばれるほど美しい街で、その美しい景観は、人の心も豊かにするということだが、まさに「豊かさのある街」だった。

こうした他愛のない話を、時には企画調整局の酒と呼ばれるアクアビットなどを飲みながら、直接うかがうことができたのは、私にとってとても大きい経験であった。田村さんの著書を読み、同時に裏話を聞いたり、さらには「田村学校の生徒」から多くを学んだりしてきたが、今の私の仕事のスタイル、まちづくりに対する考え方の多くは、これらがベースになっている。



ガーデンシティと呼ばれるクライストチャーチ市内 (ニュージーランド)



クライストチャーチのシンボルだった大聖堂(2011 年の地震で倒壊)

#### 3. どのように生かしたのか

#### (1) もうひとつワンランクアップ講座~若手を育てる

まち研の活動は、必ずしも順調であったわけではない。まち研のような組織やサークル活動は、年月の経過とともにメンバーが固定化してきてしまう。会の中で話す言葉もコアメンバーに通じる単語が多くなってしまう。そうすると、新しい人が入りづらい雰囲気を生み出してしまう。そこで、まち研の創設者の一人である南氏に相談して、1991年5月から、若手を獲得するため、入庁1~2年目の人をターゲットに8回連続の基礎講座「もうひとつワンランクアップ講座」を開催した。もちろん田村さんにも「自治体とは何か」というテーマでお話しいただいた。

こうした定例会や、記念講演、特別講座などでの田村さんのお話 や著書の中で、田村さんが繰り返し述べられていることで、私が仕 事を進めるうえで心がけているのが「横浜方式」「非定型流動型・ 非定型創造型」「都市デザイン」「複数の事業が有機的に結びついて いる」「将来そこに住む人にとっても良い街」である。

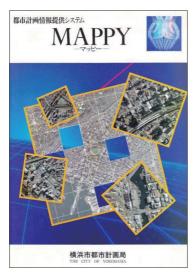
#### (2) MAPPY、中高層条例~横浜方式

田村さんを中心とする企画調整局が横浜で実践してきたのは、6 大事業だけではない。それを実現する仕組みや制度を作っている。 近隣の日照紛争を防ぐための日照指導要綱、開発業者の事業利益を 公共施設整備の負担に充てられるようにした宅地開発要綱の制定、 市街地環境設計制度の制定などなど、さまざまな制度をつくり実践 してきた。これらは、横浜の社会問題や地域課題に国の制度が追い 付いておらず、やがて全国的に顕在化する問題に取り組んできたも のである。

宅地開発要綱は、西宮市が先行していたが、権限をもつ政令指定

都市が、要綱を使って指導調整してきたことの意義は大きい。当時、わずか17年間で100万人も人口が増加する中で、必要となる学校建設やインフラ整備ができたのは、その成果であるといって過言ではない。これらの他都市に先駆けた制度や仕組みを田村さんは「横浜方式」と呼んでいた。単に、目新しいことをすることが「横浜方式」ではない。他都市の範となるような制度、仕組みを、先駆けて作り、実践することが「横浜方式」なのである。

私の初めての職場、都市計画局都市計画課では、用途地域図や都市計画道路などの都市計画決定線の指導や縦覧を担当していた。これらの図面は、コピーをとることを許しておらず、担当者が都市計画制限を口頭で説明しながら、謄写台で書き写してもらっていた。当然コピーを持ち帰りたいというニーズはあったので、これをシステム化し、地図をスクロールしながら調べたいところを探して、その場所の都市計画制限とともに印刷できるようにした。まだ、カーナビのような地図のスクロールなどなかった時代である。この都市計画情報提供システム「MAPPY」の構築は、その後、全国に普



MAPPY (都市計画情報提供システム) のリーフレット (1988年)

及したことを見れば、私が横浜市で取り組んだ「横浜方式」の一つ 目だったのかもしれない。

#### (3) みなとみらい21事業~都市デザイン

1990年に異動した二番目の職場は、株式会社横浜みなとみらい21だった。この会社は、横浜市の6大事業の一つ、都心部強化事業の一部である「みなとみらい21事業」の企画調整を担うために設立した第3セクターであり、まちづくりに関する調査企画の他、街づくり協議会を通じた開発調整、デザイン調整の他、イベント企画、広報紙の発行などを行っていて、私は24街区事業コンペ(現クィーンズ・スクエア)に携わった。みなとみらい21事業を所管する当時の都市計画局長は小澤恵一氏であった。小澤氏は田村企画調整局長時代の始めから終わりまで企画課長を務めていた方であり、事業コンペの審査の過程など様々な機会に、みなとみらい21事業に対する熱い思い聞き、まちづくりの哲学を学んだ。小澤氏は、「田村学校の生徒」というよりも、田村さんとともに企画調整局を作ったメンバーと言ったほうがいいのかもしれない。

事業コンペ以外にも、地区内の車両系案内サインやペデストリアンデッキなどの公共施設のデザイン調整、リサイクル事業の創設、高層ビルの足元の賑わいづくり計画などを担当した。また、実現していないが、みなとみらい21地区と東京ディズニーリゾートを結ぶクルーズ船の就航調整など、様々な取組について「都市デザイン」とは何かを考えながら取り組んでいた。

#### (4) 企画調整室~非定型流動型、有機的つながり

「非定型流動型」は、企画調整局の合言葉だったようだ。『都市ヨコハマをつくる』の中で、田村さんは、「都市づくりは新しくつねに動いている仕事である。総合的に創り出す仕事である。こうした

ものには前例もマニュアルもない。状況を十分冷静に調べたうえで、なにがポイントかをつかみ、それに対し、どういう方向をとるべきか、現在なにができるかを考え、可能性を見つけ実行してゆくことである。実態にぶつかって、一歩でも二歩でも現状を変え、動かしてゆくことが、「非定型流動型」である。「流動型」とは、物に制約されず、あらゆる可能性に挑戦する考えで、「いいかげん」とか「その場当たり」ということではない。理想をもち、これにもとづいた目標を目ざしたなかで、現実に対応して新しい発想を打ち出し、作り上げてゆく仕事である。それは「非定型創造型」と呼ぶべきかもしれない。」と書いている。

1993年4月に企画財政局企画調整室に異動した。田村さんがいらしたころの企画調整室とは、その位置づけが必ずしも同じではないが、「企画調整室」の名を冠し、市の総合計画を策定する担当セクションで、翌年に機構再編により、企画局企画調整部に変わったので、「企画調整室」としては、最後のメンバーの一人になった。

企画調整室では、高秀市政の初めての総合計画「ゆめはま2010 プラン」や土地利用計画の策定を担当した。局を越えた基幹的事業 の企画、調整を担当したのだが、その際は、田村さんの著書『自治 体の政策形成』の中でも書かれている企画調整部門の業務の進め方・ スタッフの資質・陥りがちな問題点を意識して仕事をしていた。当 時の上司は、田村企画調整局長のもとで総合土地調整課に在籍して いた牧野和敏課長であった。

1995年に阪神・淡路大震災が発生し、1年間、神戸市役所に応援派遣となった。神戸市都市計画局長田南部再開発事務所の主査として、最も被害の大きかった地域の一つである新長田駅南地区の震災復興再開発事業を担当した。当時、田村さんも全国的な復興支援活動をしていたが、その際、再開発事務所の私を訪ねていただき、神戸市内をご案内した。

1年後に係長として企画局総合土地調整課に戻り、当時、懸念されていた重厚長大産業の衰退にともなう京浜工業地帯の再編整備のため、これからの産業の中核となりうるライフサイエンスや関連産業の裾野が広い宇宙開発の研究機関の誘致を担当した。

ところが、為替レートの関係で、想定していた工場の土地が、空かなくなってしまった。そこで、隣接する県有地や鉄道用地などを活用することで、理化学研究所の研究施設を誘致することができた。ライバル都市もある中で、色々な課題も発生し「非定型流動型」の対応を余儀なくされた。これらは、金近忠彦理事を中心に進められたものだ。金近氏は田村さんの退職後の最後の企画調整局にいた方である。市立大学や市立高校再編に合わせた研究施設との連携、鉄道計画や地域のまちづくりとのつながりなど、田村さんの6大事業でも意識されていた、事業間の「有機的なつながり」を強く意識していた。

# (5) 2002FIFA ワールドカップ~協働、非定型流動型

2002年に日韓で共催したFIFAワールドカップサッカー大会では、現場で施設整備を担当した。仮設施設の他に、大会を契機にした雨対策のための稼働庇の設置や、和式トイレの洋式化、大量のVIP動線の確保に取り組んだ。一方でコストの低廉化も必要だったが、試合直前でのVVIP用のセキュリティ対策や、試合中に仮設空調設備のドレン水の逆流で水浸しになったVIPラウンジの対応など様々な課題に直面した。大きなイベントでは、かならずハプニングが起きる。こうした課題に様々な要望、要請を受けながらも、チームワークよく、工夫して楽しみながら仕事をした。

紙幅の関係で詳しく書くことはできないが、職場の仲間はもちろんのこと、途中まで費用負担区分でぎくしゃくしていたJAWOC(W杯日本組織委員会)とも「協働」して成功に導くことができた。プレッ

シャーの連続だったが、ドイツ対ブラジルの決勝戦が終了し、会場となった横浜国際総合競技場の大屋根から舞い降りた271万羽の折り鶴「夢の翼プロジェクト」を眺めた時は、その苦労が成し遂げた満足感に変わっていた。振り返ってみれば、「非定型創造型」で楽しく仕事ができたと思う。

#### (6) 違反建築対策~横浜方式

2004年4月、建築局監察指導課(2年目から違反対策課)に異動となった。違反建築を取り締まる担当で、それまでは「建築職の墓場」と呼ぶ人もいたようだ。建築確認事務が民間の指定確認検査機関に開放され、自治体から民間に移行し始めた時期だった。今では、98%が民間の指定確認検査機関で確認事務が行われている。

それを見越して、これからは違反に力を入れていくと言ったのが、 当時の地曳良夫建築局長だった。田村企画調整局長のもとで企画課 に5年間在籍していた方である。

違反対策に力を入れれば、反発も大きくなり、行政対象暴力が懸念されていた。そこで、防刃チョッキや電話の録音装置を購入した。また、県警のOBを違反対策官として招き入れ、アドバイスをいただくとともに、違反指導の立会をお願いするケースもった。実際、職場に脅迫状が届いたことや、「お前の家族ぐらいすぐに調べられるぞ」と言われ、指輪を外して仕事をしていたこともあった。同時に、違反指導の公平性と、行政代執行を躊躇なく決定するため、処分判定委員会を設け、処分判定基準も作った。さらに、第三者保護のために、是正命令を行った案件については、WEBで公表することとした。

これらの取組を思い切って、全国に先駆けてできたのは、地曳局 長から辞令をいただいた時に「これからは違反対策に力を入れてい くので、自由にやって欲しい」と言っていただいたからである。図 らずも、この年は全国的に問題となった「構造計算書の偽装による 建築基準法違反」や「ビジネスホテルのハートビル法違反」で、違 反対策が注目された。

#### (7) アフリカ開発会議~協働、非定型流動型、非定型創造型

2007年2月、G8サミットの誘致担当課長となった。首脳会議は 北海道になってしまったが、関連会合として第4回アフリカ開発会 議が2008年に横浜で初めて開催された。

今でこそ、アフリカはかなり身近な存在になった。テレビの旅番組やバラエティ番組でタレントがアフリカの各地を訪れているが、ほんの数年前までは、映像素材すら少なく、某公共放送の関連会社から、この機会に一緒にアフリカ諸国の映像アーカイブを作らないかと持ち掛けられた。大手広告代理店からも「アフリカに着目するなんて横浜市はすごいですね」と言われた。実際は、初めからアフリカをターゲットにしていたわけでなく、結果的にという感じで始まったので、市役所内外とも「なんでアフリカ?」という声が大多数だった。私自身、初めは「アフリカ=動物」という感じだった。外務省もいかにアフリカの多様性を国民・市民の身近な存在にするかということが課題だった。横浜市としても、初めての横浜開催であったことから、「横浜とアフリカが出会う3日間」と称して、市民にアフリカを「知る」「おもてなしする」そして「貢献する」ことをテーマに、色々な事業を組み立てた。

アフリカを「知る」という取組の中で、その大がかりなものに「一校一国運動」と「一駅一国運動」がある。一校一国運動は、アフリカ53か国(当時)の内、大使館のある35か国について、その国のことを学びたい小学校を募集。55の小学校を各国の大使等が訪問し、子どもたちと交流した。多くのメディアも取り上げ、大使館は祖国のPRにつながった。この取組のコーディネートは、外務省の

当該国担当職員やJICA、青年海外協力協会にも協力していただいた。 また、一駅一国運動は、市営地下鉄の駅に、アフリカ53か国を割 り当て、PR展示の場とした。本国からアーティストを招聘して壁 画を描いたり、ダンスや音楽パフォーマンスを披露していただいた りした国もあり、一校一国運動に取り組んだ学校の近隣の駅を同じ 国に割り振ったことで、交流に相乗効果も生まれた。

この他にも、支援学校や中学校で、セネガルの「人間国宝」といわれるドゥドゥ・ニジェ・ローズ氏によるアフリカ太鼓ワークショップ、ベナン出身のタレントでオフィシャルサポーターのアドゴニー氏による中学校の保護者を対象としたアフリカ料理教室、(株)オリエンタルランドによる保育園でのアフリカ太鼓作り、高校生によるアフリカミュージカル、写真家の高倉常寿氏や親善大使を務めた俳優の鶴田真由氏による写真展、アフリカ支援活動をしている歌手のMISIA氏によるコンサート、映画祭等々、様々な世代が参加できるようにした。また、ガーナのクフォー大統領による市会本会議場での市民に向けた演説も実現した。

同時に横浜で開催された第1回野口英世アフリカ賞の授賞式では、野口英世博士が横浜市金沢区にある横浜検疫所で活躍したことに焦点をあて、受賞者に記念館を訪れてもらうようにした。そこで記念式典を開催し、一校一国運動でガーナ(野口英世博士が研究中に亡くなった国)について学んだ小学校の児童にも参加してもらうとともに、受賞者には、名前の入ったプレートを記念碑にはめ込んでもらうようにした。この記念碑は、経済局の協力のもと、地元金沢区の企業集団「技もの王国」に依頼し、最先端技術で製作されたものである。これがあることで、授賞式が横浜で開催されなくても、ここを訪れてもらえるきっかけとなるようにした。会議が近づくにつれて、盛り上がってきて、外務省の会議運営とともに、その雰囲気づくりを「横浜の奇跡」と言わしめた。決して横浜市だけで盛り上



第1回野口英世アフリカ賞の受賞者と記念碑(2008年)

げたわけではないが、外務省、国際機関、NGO、NPO、そして 市民と「協働」して盛り上げることができた。

## (8) アフリカ学生交流プロジェクト~非定型創造型

翌2009年に開催した、アフリカ20か国28人の高校生が参加した「アフリカ学生交流プロジェクト」も前代未聞の取組だった。このきっかけは、中田市長、野田副市長であるが、実現性についてJICAや国際機関に聞いてみたところ、それだけの国から学生を招いた経験はなく、「横浜市は勇気がありますね」と言われた。高校生の人選、アフリカでの移動、VISAの発給、ホームステイ先・通訳ボランティアの募集、食事等の課題も指摘されたが、副市長の判断はGO。トラブルはもちろんあったが、市役所内では、国際室を中心に教育委員会事務局も連携し、VISAの発給では外務省、ホームステイ時以外の宿泊ではJICA横浜の協力も得ながら何とか実現。市民の家庭でのホームステイ、市内の高校生や小学生との交流、市内視察など多彩なプログラムをこなして、ホームステイ先やフェアウェルパーティでのエピソードは涙なくしては語れなかった。

その後、横浜で開催された第5回、第7回のアフリカ開発会議では、 第4回で取り組んだ事業が続けられ、さらに会議とは関係なく、現 在でもアフリカとの交流が続いている学校もあり、水道局などでの アフリカへの技術支援・交流は今でも続いている。アフリカ学生交 流プロジェクトのように、1回で終わってしまっている取組もあるが、 未来への仕掛けも作った。副市長も含め、様々な取り組みを有機的



フェアウエルパーティに浴衣で登場したアフリカ学生交流プロジェ クトの参加者(2009年)

に繋げてストーリーを作ることを意識した。まさに「非定型流動型」 「非定型創造型」の事業であった。

#### (9) APEC首脳会議横浜PR展示~金がなくても工夫で

84

2010年に横浜で開催されたAPECでは横浜のPR展示を担当し た。横浜を訪れる21か国地域の首脳やメディアに対して横浜市を PRするのが目的である。「JAPAN EXPERIENCE」と名付けられた 政府展示では、当時、奇跡的にサンプルを持ち帰ってきた小惑星探 査機「はやぶさ」の模型や、新幹線、人型ロボット、癒しロボット、 植物工場、伝統工芸など日本の最先端の技術や伝統文化をくまなく 紹介していた。そのような中で、海外からの来場者の注目を集めら れる展示、それは自動車販売などの展示会を数多く経験している林 市長の期待にも応えられる展示であることを意味する。政府からも 「世界に通用する、キラリと光るようなものを展示してほしい」と 言われた。展示会では、動物が関心を引くと聞き、APECには太平 洋沿岸の国や地域が参加するので、太平洋の魚に協力してもらうこ とにした。当初は、生きている魚と共に、魚口ボットを水槽の中で 泳がせるというアイディアも出た。魚口ボットは、横浜に技術開発 拠点がある三菱重工が研究していたが、今はやってないとのことで 断念。しかし、深海探査船「しんかい6500」による研究で知られ、 横浜に研究所がある(財)海洋研究開発機構に技術協力している横 浜市金沢区の企業(株)キュー・アイが開発した水中テレビロボッ トを見つけ出し、これを借りることができた。テレビゲームのコン トローラーで、来場者にも簡単に操作できるようになっている。魚は、 横浜八景島シーパラダイスに協力を依頼した。当初、水槽も一緒に 借りられないかと目論んでいたが、水中テレビロボットが動き回れ るような大きなものはないとのことだった。

そのような中で、たまたま読んでいた新聞に、夏の銀座の風物詩 となっていたソニーアクアリウムの記事を見つけた。移動できる水 槽では国内最大のものである。これなら見栄えもするし、水中テレ ビロボットも動き回れる。ところがこの水槽を提供していた荏原製 作所にお願いに上がったところ「他への貸し出しは想定していないし、 水中テレビロボットで水槽に傷がついても困る」との返事だった。 当然のことである。どうしたら了解が得られるか。水槽を傷つけず、 ロボットも傷つけない。色々と対策を考えて、実際に水槽を製作し た会社からお墨付きをもらって再度お願いに上がり、ようやく了解 が得られた。こうして太平洋の100匹の魚たちの間を水中テレビロ ボットが動き回って、その迫力ある映像がスクリーンに映し出された。 また、日産自動車と進めているスマートシティの取組や元町家具、

市内企業の銘菓や先端技術等で来場者の注目を集めることができた。

限られた予算ではあったが、市内企業159社の協働と工夫により、 政府展示に引けを取らない内容で横浜を売込むことができた。

#### (10) 中高層調整条例~横浜方式

2012年に異動した建築局では、日照指導要綱の後継である中高 層調整条例(中高層建築物等の調整に関する条例)を担当した。日 本の制度や仕組みが諸外国などからわかりにくいといった圧力など を受けて定められた行政手続法の制定とともに、要綱行政を改める 必要が生じて条例化されたものだが、近隣の紛争は相変わらずであっ た。「突然となりの工場が壊されて、高層マンションの計画が示され、 日が当たらなくなってしまう」「工事車両が危険なので何とかして ほしい」といった苦情が、日々寄せられる状況である。土地所有者 や開発業者にしてみれば、「法律の制限の範囲内で利益を得るため に必要な行為 ということであるが、突然の計画に不安を抱える周 辺住民にとっては、寝耳に水の話である。こうした苦情は、事前に 知ることで、理解がある程度進むことから、条例で、説明の仕方な どを規定している。しかし、当該地には、元々、工場などの建物が建っ ていて、その解体の際に、近隣に騒音被害を及ぼしていて、次の建 設計画が出るころには、怒りが頂点に達しているといったケースが 多く見られた。特にRC構造の建築物は解体時の騒音振動が大きく、 昭和40年代ぐらいから増えてきたRC建築物も解体の時期を迎えつ つあることから、これから騒音振動問題が増えてゆくと考えた。そ こで、解体前に説明義務を加えることで、その理解を図るようにし た。事業者も、後の建築計画の説明にプラスになれば、その手間の 必要性は理解を得られる。この条例改正も「横浜方式」の一つと言っ ていいのではないだろうか。

## 4.NPOの活動~未来に向けて~

まち研から派生し、まちづくり活動の全国組織となった「赤煉瓦ネットワーク」は、仲原氏、内藤氏、そして舞鶴市の馬場英男氏を中心に、現在も活動が継続しているが、まち研の本体の活動は休止状態である。事務局メンバーの高齢化が進んで目の前の仕事や家庭生活に忙しくなったこともあるが、田村さんが亡くなり、当初メンバーも退職して求心力が失われた。特に個性的だったコアメンバーの面々は、元来、ぶつかり合いそうなところを、田村さんがいたことでまとまっていた。求心力がなくなると、はじけ飛んでしまう。

まち研15周年記念誌で、田村さんはこう書いている。「まち研には、いろいろな人々が共存していてよい。ただ、せっかく一緒にやってきた人々が、最低限の原則で一致していてほしい。それが、まち研は、マチ社会であって、ムラ社会ではないところだろう」。また、こうも書いている。「まち研は、皆さんの若さを維持してゆく会としてお勧めしたい。人間とは、ほっておくと年齢よりも気持ちが退化し硬直化してゆく。それを防止するには"まちづくり"研究は、一生楽しめる課題だ。」と。

これらのことは、田村さん自身が実践していた。まち研では、海外視察旅行の他、当時は流行の最先端の人気エリアであったウォーターフロント開発(横浜ベイサイドクラブ、横浜八景島シーパラダイス)や、市街化調整区域のレジャー施設開発などをテーマに取り上げた。これらは事務局でテーマ選定したものだが、田村さんが興味津々だったのは言うまでもない。

後輩にまち研の事務局を任せると、興味の対象も様々で、取り上 げるテーマも変わってくる。それゆえ、私も定例会に参加するたび に刺激を受けた。普段の仕事のなかで、いかに自分が目の前の仕事 に没頭しているかを思い知らされた。

最近市役所に入った職員の中には、田村さんのことを知らない者

もいる。しかし、市役所の中で田村さんのことを意識していなくても、横浜のまちづくりには、田村さんが実践してきた「横浜方式」「非定型流動型」といった精神「田村ism」は生き続けている。

今回、田村さんとの関わりを振り返りながら自分の仕事を振り返る機会になった。これまで書いてきたことは、いずれも一人でやってきたことではない。自分が若手の頃は、示された方針を実現するために1つの駒として取り組んできた。自分が方向性を示す立場になっても、そこには、ともに悩み、一緒に乗り越えてきた仲間や、支えてくれる仲間がいた。今後も、さまざまな壁を乗り越えていく必要があるだろう。

まちづくりは積み重ねによって成立している。そのためには、田村さんが横浜市において、どのような困難の中でまちづくりを進め、どのような知恵と工夫で乗り越えてきたのかを知り、それを新しいまちづくりに生かしてゆく必要がある。田村さんは著書『美しい都市景観をつくるアーバンデザイン』の中で、「アーバンデザインに終わりはない。成功した後でも努力が続けられれば、さらに良くなるだろうし、その意識や努力が途切れてしまえば、つまらない都市になってゆくしかない。」と書いている。2015年にNPO法人「田村明記念・まちづくり研究会」が設立されたが、その活動は、田村さんの実績を顕彰し、「田村ism」を次の時代にどう生かすかということを常に意識して活動している。

まち研で田村さんと訪れた中国返還前の香港で、私の質問「How do you think about Big Wave?」に対して、香港政庁の方は、「そこに人々が住み続ける限り、我々の仕事に終わりはない。」と語っていた。我々、自治体の仕事も、そこに市民が住み続ける限り、終わりはない。それは、単に仕事があるということではない。「豊かさのあるまちづくり」のため、「市民のためにどうあるべきか、将来の市民のために何をすべきか。」を判断軸にして、終わりのない努力を続けなければならないということなのである。

# <参考文献>

- ・『横浜一都市計画の実践的手法 その都市づくりのあゆみ』 鹿島出版会、1980年
- ・田村明『都市ヨコハマをつくる: 実践的まちづくり手法』中公新書、1983年
- ・田村明「自治体における企画調整機能のあり方」「政策主体としての自治体」 田村明編『自治体の政策形成』学陽書房、1989年
- ・小澤恵一『生きている都市つくる都市:ヨコハマからの実践的都市論』 ぎょうせい、1991年
- ・田村明『現代都市読本』東洋経済新報社、1994年
- ・田村明『まちづくりの発想』岩波新書、1987年
- ・田村明『まちづくりの実践』 岩波新書、1999年
- ・田村明『まちづくりと景観』岩波新書、2005年
- ・田村明『美しい都市景観をつくるアーバンデザイン』朝日選書、1997年
- ・『横浜まちづくり研究会発足10周年記念:まちづくり』横浜まちづくり研究会、1990年
- ・『横浜まちづくり研究会15周年記念誌』横浜まちづくり研究会、1995年
- ・馬場英男、内藤恒平、仲原生、水野信太郎『赤煉瓦ネットワーク【舞鶴・ 横浜】物語』公職研、2000年
- ・田村明「都市と景観」 『CEL57号』 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所、 2001年
- ・田村明「飛鳥田横浜市政がまちづくりに残したもの」地方自治職員研修、 2002年
- ・『第4回アフリカ開発会議 横浜開催の記録〜横浜とアフリカが出会った日〜 撮浜市、2009年
- ・『2010年日本 APEC 横浜開催の記録〜横浜が世界の中心になる1週間〜』 横浜市、2011年

# 田村明さんを慕う方々との出会いより

#### 川﨑洋子

私は、幼少期を横浜市で過ごし、家庭の事情で一時期横浜市を離れていました。5年ほど母親の実家のある宮崎県に住んでいたのですが、いつしか横浜に戻りたいという気持ちを持ち続けていました。私の中では、横浜が自分の故郷だという意識があったのだと思います。大学を卒業し、中堅どころのゼネコンの建築設計部に就職し、都心の独身寮に移り住みました。それから8年余り経った頃、新たな世界に挑戦すべく、最初に就職した会社を辞める際に、横浜に戻ってきました。子どものころに住んでいた年数を合わせて、今年で横浜市民歴30年目となりました。人生の折り返し地点を過ぎてしまいましたが、できる限り横浜に住み、横浜と関わっていきたいと思っています。

これだけ横浜好きな私ですが、田村明さんのことを知ったのはつい最近のことです。子どものころ、飛鳥田市長の名を伝え聞いていましたが、その飛鳥田市長を支えていた影の存在、都市プランナーの田村明さんのことを知る機会はありませんでした。今から7年くらい前に、田村明さんを慕う方々にお会いし、田村明さんの立ち上げた私塾、『現代まちづくり塾』に参加することで、田村明さんの存在を知ることとなったのです。すでに田村明さんの亡き後でしたので、残念ながら田村明さんにお目にかかることはできませんでしたが、田村明さんが道半ばで残された170のプログラムを引き継ぎ、手探りながらも塾生が交代で講師を引き受けている活動に賛同し、田村明さんの考えてこられたこと、まちづくりについての理論を通じて、まちづくりについて、塾生の仲間と一緒に勉強してまいりました。

現代まちづくり塾との出合いは偶然の積み重ねからはじまりまし た。友人の誘いで、2013年の秋に、景観と住環境を考える全国ネッ トワーク(以下、景住ネット)という団体のシンポジウムに参加し ました。その景住ネットのシンポジウムの懇親会で、NPO法人まち づくり研究会顧問の三橋重昭さんにお会いし、名刺交換をしました。 仕事で多忙を極めていて、睡眠時間3時間の意識もうろう状態で参 加したせいか、残念ながら、シンポジウムの内容や懇親会での会話 はあまり覚えていませんでした。ところが、次の日より、まちづく り研究会のメーリングリスト(以下ML)より頻繁に配信メールが 送られてくるようになり、驚いたのを覚えています。ずいぶん活発 に活動されているのだな、と思いながらメールを時々拝読していま したが、その中に、現代まちづくり塾主催の、港北ニュータウン(以 下港北NT)のまちあるきの案内があることに気づきました。私は 横浜市青葉区在住で、港北NTは比較的近所であるにも関わらず、 自分自身の活動圏内から微妙に外れています。車で通過することは あっても、利用することがほとんどなかったように思います。近所 のまちを知る良い機会だという軽い気持ちで、まちあるきの参加の 申し込みを致しました。このまちあるきの企画で現代まちづくり塾 と出合うことになります。

2014年5月17日(土)、横浜市営地下鉄センター南駅に集合し、都筑区役所内の活動支援センターで、講師の川手昭二さんに、港北NTについての概要や、まちあるきのコースについての説明を受けました。その後、都筑区役所からセンター南駅に向かい、地下鉄で都筑ふれあいの丘駅より牛ケ谷公園、荏田南小学校、鴨池公園、ささぶねの道を抜け、都筑区役所に抜ける約4kmのコースでした。『自然に親しみ、ふるさとを育むまち』・『歩くことが楽しいまち』という設計条件のもと、グリーンマトリックスに守られた歩行動線を歩きながら、里山のようなのどかさを感じました。車で通過していた

時の港北NTは、そっけないまちという印象だったのですが、歩車 分離方式を採用することで、ニュータウンに住む住民や働いている 市民を守っている成功例だと感じました。

川手昭二さんは、住宅公団在職時に港北NTの開発所長として尽力され、ご自身も港北に居を構えておられるとのことでした。そのような方にご案内いただいたことで、港北NTのまちづくりの面白さに気づいたように思います。

港北NTは、横浜市六大事業の一つであり、民間会社の乱開発を 抑止する目的で、区画整理方式をとりながら、地元の住民と共に開 発を進めていった経緯があります。

早渕川を軸とした2つの丘は、駅前地区と農業専用地区と分けられ、既存の緑をつないだ緑道と地下鉄の駅から放射線状に作られる歩行者専用道路、中学校区コミュニティ通路が織りなすエリアは、格好の散歩道であり、子どもの遊び場であり、家族のいこいの場として機能していました。

その後、秋にも港北NTのまちあるきの企画があり(講師は同じく川手昭二さん)、農業専用地区を中心に歩きました。そのあとの懇親会で、田村明さんの弟であり、本NPO理事長である田村千尋さんと、現代まちづくり塾の古株、Tさんの勧めで現代まちづくり塾に参加することになりました。

都筑区役所のウェブサイトに、『都筑おすすめ15コース』として、まちあるきのコースが商会されていますので、下記にご紹介いたします。都会にいながら、のどかな里山の風景を体験することができるので、おすすめ致します。ちなみに私の体験した前半のコースは、Nコースの短縮版で、オール下りで歩けるコースでした。

https://www.city.yokohama.lg.jp/tsuzuki/kurashi/machizukuri

kankyo/midori\_eco/pr/20141023173539.files/0003\_20181107. pdf

ほどなくして、当時の現代まちづくり塾の運営委員で、本NPO の理事の関根龍太郎さんにお声かけをいただき、新米ながら運営委 員を引き受けることになりました。月に1回の運営委員会では、前 回の考察、次回分の定例会についての内容確認、講師の依頼や年に 2回のまちあるきの企画を検討し、MLやウェブサイトのトップペー ジで次回の定例会の案内や、開催した定例会の様子を掲載するとい うことを行っていました。定例会の後は、塾の講義の番外編として、 なじみの居酒屋で懇親会を開いていました。私より少し上の世代の 先輩方の話は、知識や経験が豊富で、まちづくりに対する熱意にあ ふれていました。また、戦後の高度成長経済を生きてきた経験、そ して田村明さんとの関わりが深い、という共通項があり、私は、た だ先輩方の話を伺うことが多かったように思います。それが楽しく て、塾に参加していたのだと思います。そのような先輩方を惹きつ けた田村明さんとはどのような方だったのだろう、と、私は時折そ のような思いを巡らせていました。私の想像する田村明さん像を申 し上げますと、分け隔てなく人と付き合うことのできる、時には頑 固でお酒が大好き、著書から垣間見える平易な文体は、より多くの 人に思いを届けたい気持ちを持つ、熱意のある方の表れだった、と 思っています。

田村明さんの熱意が、多くの方に伝わっていた、そして田村明さんが多くの方に慕われていたことを実感したエピソードがあります。それは、2016年4月3日に開催された、NPO法人田村明記念・まちづくり研究会のシンポジウムで受け付けのお手伝いをしていた(まだそのころはNPOの会員ではありませんでした)ときのことです。予定されていた100名の参加者をはるかに超える方が会場に押し寄

せ、瞬く間に参加資料や記念品がなくなってしまったのです。実行委員長をされていたエムジー・アーツの仲原正治さんが、2,3度、ご自身の事務所に予備の資料を取りに戻るほどで、最終的には約190名の方がシンポジウムに参加してくださったのです。何度か、セミナーなどの受付を経験しましたが、このようなことは初めてのことでした。それほど、田村明さんを慕う方は多くいらっしゃったのだと理解しました。

ある日、ウェブサイトを編集がてら閲覧していた時に、とても驚 いたことがありました。田村明さんの著書の中に、どこかで見たこ とのある本に出合ったのです。その本は、『アンダーグラウンド』 といい、英国で出版された、都市計画についての絵本で、田村明さ んが初めて手掛けた訳本でした。今となっては時効と思われるので、 正確に申し上げますと、英語の堪能な奥様の田村眞生子さんが、初 めてゴーストライターとして関わられた本とのことです。著者は、 イラストレーターで作家のデビット・マコーレイです。私の大学受 験当時、埼玉大学の土木系のクラスには公募の推薦入試があり、担 任の勧めで受験することになりました。その1次試験が小論文で(2 次試験は面接)、『アンダーグラウンド』は、小論文試験対策の参考 書として出合ったのでした。高校1年の時の国語の教科担当の先生 が、地元の大学の図書館より借り受けてきて下さったのです。大変 ありがたいことでした。『アンダーグラウンド』は、専門用語がそ れなりに出てくるのですが、判りやすいイラストのおかげで知識や 理解を深めることができました。1か月弱の試験対策期間だったに も関わらず、私なりの都市計画についてのイメージをつかむことが でき、無事合格することができました。田村明さんに会わずして、 25年以上前にお世話になっていたと思うと、何等かのご縁を感じず にはいられません。

運営委員の仕事は、時には自分の仕事を後回しにしつつ調整等を しなければならないこともあり、大変な思いをしましたが、運営委 員を辞めて2年経つ今となっては良い思い出となりました。とくに 私が力を入れたイベントは、年2回のまちあるきでした。渋谷や丸 の内・八重洲界隈の再開発、関東初の高級別荘分譲用地として開発 された桜新町や、江戸時代からの黒目川の水運で栄えた東久留米市 の再開発地など、その地に詳しい方に案内役を依頼し、どの回も充 実した内容をお届けすることができました。港北NTのまちあるき に感銘し、現代まちづくり塾に参加した私ですが、在任中、田村明 メモリアルウォークとして、横浜六大事業のまちあるきを2回企画 することができました。2015年10月に、みなとみらい21地区〜関 内のまちあるきを企画、もう一つは、2016年11月に、金沢地先の 再開発のまちあるきを企画しました。この2つのまちあるきは、当 時桜木町にあった三菱重工業の工場を金沢市先に移転させ、鉄道の ターミナル駅として発展しつつある横浜駅と旧都心の関内の谷間に ある土地である桜木町を再編成させ、新たな未来の都心として計画 したみなとみらい21地区をつくる一連の再開発をたどることのでき る企画でした。みなとみらい21地区〜関内のまちあるきの案内役 を、本NPO副理事長の田口俊夫さんに案内いただきました。そして、 金沢地先のまちあるきの案内役として、本NPOの理事の遠藤包嗣 さんと建築家の中村勉さんにお願いしました。遠藤さんは発注側の 横浜市の役人の立場として、中村勉さんは、槇文彦さんの事務所に 在籍し、建築家としての立場として金沢地先の再開発に携わってい ました。立場の違う方の案内を同時に伺うことのできた、盛沢山の 企画でした。この2つのまちあるきは、田村明さんの著書である「都 市ヨコハマを作る | 「都市プランナー田村明の闘い | の軌跡をたどる、 意義深いものとなりました。

本NPOでの活動については、日々の生活との折り合いがつかず、

正直あまり参加出来ていませんでした。その中で、2018年の世界都市計画史学会IPHS横浜大会では、受付とプレゼン補佐で参加することができました。英語がほとんどできない中での外国人の参加者とのふれあいは、語学力と広い視点を持つことの重要性を痛感いたしました。

2020年は、COVID-19 が全世界に蔓延し、東京オリンピック開催が翌年である2021年に延期となりました。医療の現場は疲弊し、緊急事態宣言が発令し、経済の流れが大幅に変動してしまいました。Stay Home、Keep Distance と、人との関わりが希薄になってしまい、不安に駆られることも少なくありませんでした。でも、悪いことばかりではありませんでした。私自身は、地元のまちで日々の買い物をし、人との距離を保ちながらも地元の飲食店を利用し、その中で新たな人との出会いを築きつつあります。都心への日々の通勤時間は、地元で生活する時間や気持ちのゆとりを奪っていたのだ、と今更ながら気づきました。まだまだコロナ禍は続きますが、2021年をどのように過ごしていくのか、少しでも前を見ながら明日へつないで行きたい。その先に、NPO法人田村明記念・まちづくり研究会や現代まちづくり塾との新しいかかわり方が見えてくるのではないか、ひいては、それらの活動を通して、新しいまちづくりの糧として貢献できれば、と思っています。

#### (プロフィール)

川﨑洋子(かわさき ひろこ) / マーブル建築事務所代表、一級 建築士

埼玉大学建設工学科卒業後、日産建設株式会社(現在のりんかい 日産建設株式会社)に入社。その後、業務用冷蔵庫会社で厨房機器 のコーディネーター、GRCパネルの設計、医療機器メーカーでの プロジェクトマネジメント等を経験し、リーマンショックのあった 2008年に建築業界に戻る。フリーランスを経験後、2013年より現職。病院・福祉系の設計をメインに活動中。

# 田村明さんに会ってみたい

青木 淳弘

ふと想像してみたくなる。

もし田村明さんになんらかの形で会ったとしたら、果たして、どんなふうに声をかけたらいいだろう?いや、逆に、田村明さんは僕にどんな声をかけるのだろう?

# 1. 研究対象 「田村明」 との出会い

私と田村明さんとの最初の出会いは、あくまでも研究対象としての「田村明」だった。まずはそのときのことから書いてみようと思う。それは2015年の夏くらいだっただろうか、「都市は誰が作っているのか」という漠然とした、しかし都市社会学の根幹に関わる問題関心を持っていながら、それをどう論じていいのかまったくわからないままに、悶々とした日々が続いていた。大学院の同期たちは、次々に修士論文のテーマを決めて、着実に調査と執筆を行なっているなかで、出来ない自分に対する焦りが募るばかりであった。

誰かが都市をつくっている…社会学者はしばしば作られた都市の中の出来事に関心を持ちがちな気がする、むしろ社会学の外に目を向けるべきではないか。そのように指導教員から指摘されて、自然と足が向くようになったのが、自分の研究室からほど近い、工学部の建築学図書館だった。製図室を通った先にある、天窓から光が差し込み、名だたる建築家の肖像がかけられているこの図書館は、なんだかとても居心地良く感じたものだった。その蔵書の中でふと手に取ったのが、「田村明」の『環境計画論』だった。横浜市の具体

的な話題を中心にしていながら、なんだか哲学的な話もしている。 雄弁な建築家というのは、これまでにもいたけれど、当時の私の知 識の中では、都市計画についてこんなにあれこれと語っている人は まったく知らなかったために、新鮮な驚きがあった。

横浜は私にとって、いわば、ちょうどよい距離のある都市であっ た。誕生日となると、当時ホテルニューグランドに勤めていて、か つての飛鳥田市長によくしてもらったといつも話す大叔父が、バター クリームケーキとラムボールを毎年のように家に届けてくれた。家 族でみなとみらいのホテルに泊まりに行ったこともある。鉄道好き な少年として、東横線に乗って桜木町までやって来て、京浜急行や 東海道線で帰るという「乗り比べ」などもよくしていた。そんなに 生活圏から遠くない場所にありながら、しかしどこか「よそ行き」 の場所でもあったのだ。そうそう、いつか彼女ができたら、この街 を散歩してみたいな、という淡い期待を寄せていたのも横浜だった。 このまちと、この面白いことを書いている都市プランナーの関係 を研究してみたい。そういう思いをこのとき持ったのだった。しか しその道のりはそう簡単ではなかったし、いまだって、うまくいっ ているかどうかはよくわからない。指導教員に「田村明を研究したい」 ということを言ったら、否定はされなかったけれど、肯定もされな かった。ただ、自分に力量がなかったこともあり、その年の冬になっ てもまったく執筆は進まなかった。そもそも資料はどのようなもの を使えばいいのかわからないし、さらにそれをどのように論述して いくのかということも見当がつかなかった。

# 2. NPO法人田村明記念・まちづくり研究会とのはじめての接点

そうしたなかで2016年の3月くらいに、住宅問題の研究者であり

社会運動の活動家でもある研究室の先輩から「田村明に関するシンポジウムがある」という話を聞いた。以前に研究会で私が自分の研究の方向性について話したことを覚えていてくれて、何かで知らせをみて、私に教えてくれたのだった。私はさっそくインターネットで検索して、NPO法人田村明記念・まちづくり研究会のページにたどり着いた。そしてシンポジウムへの参加を申し込むことにした。

当日はとても緊張しながら神奈川県民ホールに向かったことを覚えている。まったく分野が違うような人間が参加していいのだろうか。本で読んだことのある錚々たるメンバーが顔を揃えている。シンポジウムが終わるまで、ずっとその緊張感が解けなかった。前に読んだ本に載っていた写真の「田村明」の面影を感じさせながら、壇上で話をしている田村千尋理事長や、みなとみらいの開発の経緯を話している田口俊夫副理事長が、とても遠いところにいる人物に思えた。

しかしこのとき、シンポジウムのあとに懇親会が開かれていたのは、いま思い返せば、私が「田村明」研究を継続する大きな契機だったとも思える。というのもこのときに、その壇上で話していた人たちと話す機会が持てたからだ。そのときはまだ本格的にNPOの活動に参加するようなことはなかったけれど、少なくとも、「田村明」という都市プランナーとその活動について研究することは、決して不可能ではないという希望を持てたのだった。

# 3. M3——修士論文の失敗と留年

100

大学院の修士課程の修了年限は、一般的に2年間である。修士論 文を提出して、口頭試問を突破できたら、晴れて修士号を獲得でき る。しかし当然のことながら、その基準に満たない場合は、退学か 留年をすることになる。我々は留年した人のことをM3と呼ぶ。そ して何を隠そうこの私も、修士論文が審査基準に満たなくてM3になった。思い返せば色々な要因がある。祖父から託された家業をなんとかしなければならない。恋愛に絡んだ人間関係の不和にも苛まれたりした。口頭試問のあとで、指導教員からひどく叱られた。淡々と理詰めで叱られることほど怖いものはない、そんなことを思わされた。師曰く、「どんな状況にあっても、病的なまでに、研究を遂行するのがプロの研究者」「アマチュア的に楽しく「勉強」したいならば、それでもいい。しかしそういう人は知の生産者である必要はない。」「研究がしたいのか、それともただ単に勉強が好きなだけなのか、もう一度考えてみなさい。」…まったくもって腹立たしいほどに、正論すぎるほどの正論で、私は何も言い返せなかった。しかし、あれこれと考えたけれど、情けないことに、自分が研究者以外の道を見つけることもできなかった。それはじつに消極的な選択なのだけれども、私はもう一度、修士論文を書くことに決めたのだった。2017年の春のことである。

しかしそうは言ったものの、どのように研究を進めていったらいいのだろう。どうすれば説得的な論文が書けるようになるのだろう。私はよくわからなかった。そこで思い出したのが、昨年の「田村明」に関するシンポジウムであった。私は久々にインターネットからNPOのページを開いてみた、そして公開研究会が近いうちに開かれるということを知り、参加することに決めたのだった。

# 4. NPOの研究活動に参加する

2017年3月のまだ肌寒い日の午後だった。「飛鳥田市政の財政事情」が講演のテーマになっていた。横浜市民活動支援センターにたどり着いたときには、また心拍数が上がっているのを感じていた。なにしろシンポジウムで会って、ちょっと話をしただけで、それ以

降は特に連絡も取っていない人間が、いきなり参加してもいいのだろうか…そんなことを考えながらやや狭いエレベーターに乗って4階に着いた。

セミナールームに入ると、参加者の人たちに挨拶をした。理事長と副理事長は、私がシンポジウムのときに話をしたことを覚えていてくれて、あたたかく研究会に迎え入れてくれたのだった。また研究会の参加者の人たちもとても気さくで、個性が強く、そしてなにより優しい人たちだった。研究についても、また、ちょっと大袈裟かもしれないけれど、自分の生きていく道筋にも自信を失いかけていた私にとって、研究会の人たちのあたたかさがなによりも嬉しかった。そしてもちろん、これまで本に書かれていること以外にはほとんど知らなかった「田村明」と彼に関係する人間とその営みについて、より深く理解できるような予感がした。またここに来たい。そう思った。

4月にはNPO総会があるけれど、その前に、理事長と副理事長から、個別に研究の話をしながらの会食に誘われた。私にとっては願ってもいない嬉しい話であり、即座に喜んで返事をした。田園調布のイタリア料理店。ここでこれまでの自分の研究の経緯について色々な話をしつつ、NPO活動の話や、研究対象としての「田村明」の話などができた。でも、じつは最も嬉しかったのは、田村明という接点から、もっとずっとパーソナルな話を色々と交わすことができたことであった。このとき、私のなかで、理事長と副理事長は、千尋さんと田口さんになったのだ。そして私はこの研究会の正会員となった。

# 5. 田村明さんに会ってみたい

102

さて、ここまでは、いかにして、自分がNPOの研究活動に参加

するようになったのかを書いてきた。思い返せば、それは偶然の糸と糸が幾重にも結び合うことで、導かれたような気持ちがしてくる。 NPO の活動に参加するようになってから、幸運にも海外に向けた発信を行う機会を与えてもらうこともできた。IPHSへの参加や英訳本の出版。ひとりで研究を続けていたら、こういう機会に恵まれることはなかっただろう。また、パンフレットの作成を機会に、ポスターや英訳本のデザインを担当させてもらえたことは、さりげなくもとても光栄で嬉しかった。

こうした活動に参加するなかで、私が思ったのは、田村明さんに会ってみたい、ということだった。はじめは研究対象としての「田村明」だったのが、この研究会では明さん、とか田村先生とか、そんな呼ばれ方をしている。つまり、それは本の中の人物ではなくて、生きた人間としての、括弧のつかない田村明さんであったのだ

研究対象としての「田村明」に対して、そのわずかな知見を都市 社会学の理論に結びつけた修士論文を執筆したし、いまも「企画調 整」の研究などを通じて、理解を深めようとしている。私が社会学 の研究者であろうとする以上は、おそらく、この卓越した都市プラ ンナーとその周囲の人との関係について学術的に論じることは、ラ イフワークと言っていいのではないかと思っている。しかし田村明 さんはどのような人だったのだろうか。

歴史を反実仮想で語ることはできない、ということはよく言われることである。しかし想像力は広く遠くに広がっていく。もし田村明さんに出会っていたら、果たして私はどんな挨拶をして、どんな会話を交わすことができたのだろう。天に召された後ではじめて田村明さんを知った私にとって、その本当の姿を知ることはできないけれど、その広がる想像力の中で彼と対話をすることができる。その想像力の源泉になっているのは、じつはNPOに参加している人たちをはじめとした、田村明さんと直接会ったことのある人たちの

なにげなく発する言葉の断片である。また、あるいは、こうしたオープンな研究活動それ自体も田村明さんの生きた面影を伝えるものであるのかもしれないとさえ思う。

もちろん最初は田村明さんのことをよく知らない状態だったから、 実際に会ったことのある人たちに話を聞いて回った。そこで見聞き したことがすべて論文の形になったわけではなかったけれど、それ はある意味で、論文以上に豊かなものであったと思っている。

## 6. 私にとっての田村明さん

104

直接会ったことがなくても、話を聞くことで膨らむ人間像というものがある。私にとって田村明さんはまさにそれである。考えると滑稽に思えることもある。なにしろ直接会ったこともないのに、毎日のように田村明さんのことや、彼が横浜やまちづくりについて残したものについて考えているのであるのだから。田村明さんだったら、どういうふうに語るのだろうか。直接会ったことのある人たちの語られた声を集め、想像してみる…

田村明さんは月に2回の勉強会を開いている。テーマは都市について全般的な話をすると謳っているのだけれど、ときどき大きく脱線して、もっとスケールの大きな話をする。しかしその脱線がまたとても面白くて、私は密かにその話を聞くのが楽しみだ。勉強会が終わった後に懇親会があり、はじめて参加した私に田村さんはこう話しかけてきた。「青木さんは、どこのご出身なの?」と。埼玉県の川口は鋳物産業のまちで、伊奈氏の居城があって…そうそう東北本線といえば…自分自身も知らなかったような我が街の話や、鉄道や旅の話をしてくれる。そして二度目に会ったときには、もうすっかり昔馴染みのような表情を浮かべながら親しげに話しかけてくれ

る。しかし研究の話となると、途端に建設的ながらも厳しいコメントをする。最初に私が話題提供をして、参加者の皆さんからコメントを受けながら応対して、そのなかで考えていると、瞬時に議論を整理して、最後にこう言う。「僕はこう考えたのだけれど、君ならどう考える?」…そのように言われると、難しいけれど、決してその言い方は威圧的であったりはしない。難しい課題を与えられたということと同時になんだか自分でもできるように鼓舞された気分になる。厳しさもあるけれど、フレンドリーで好奇心旺盛な人だ…

想像上の田村明さんは、自分の研究を進めれば進めるほどに、その研究とは別の文脈で作り上げられていくような気がする。それは誰かの記憶のなかにとどめ置かれた彼の精神に触れるようなもので、直接会うことはできないけれど、たしかにそこに「ある」という感覚である。人は誰かの心のうちに生きるとき、決して死ぬことはないのだ。

# 7. 2020年の横浜で

ちょうど良い距離のある都市であった横浜の街の距離感はより近くなった。以前よりもこの街に愛着を持って、歩き、ときに走り、調べ、語り、飲食し、泊まるために、たくさん訪れるようになった。それは田村明さんが私をこの街に結びつけてくれたと言っても過言ではない。そしてなによりもNPOに参加する人たちの声を聞きに、そして横浜の街のもつ空気を識るために、積極的に足を運ぶようになったのである。あのときのようなよそよそしい心拍数の上昇ではなくて、交歓や発見の喜びに胸が高鳴ることが増えた。

雄弁な都市計画家、あるいはまちづくりのパイオニア…田村明さんのことを彼の著作から知って、2020年で5年目になる。実弟の千

尋さんや眞生子夫人といった人たちに直接会えるなんてそのときは 思ってもみなかった。さらに、一緒に仕事をした人たちや、一緒に 学んだ人たちにも会えた。研究対象である人に深く関係する人に会っ て、様々なかたちで交流が持てること…こんなに幸せなことはない と思う。

NPOで行っている活動(それは研究もそうだし、広報もそうだ)は田村明さんの直接語らない声に再び音を与えるようなものだと思う。それはまた、このNPOに参加する人たちが抱いている想いや考え、もっと敷衍して言えば人生を引き継ぎながら、未来に結びつけていくことでもあると私は思う。参加者ひとりひとりが都市について、あるいは人生について語り出すとき、そこにはその人の生きた想いが宿り、ときどき田村明さんが顔を出す。私も微力ながらこの活動を伝えていく力になれたらと願っている。そして、田村明さんや彼を通じて結びついた人たちの「生きた」姿を伝えられるならば望外の喜びである。

今年もまた混乱した世の中だった。おそらくこれからもきっと混乱は続いていくだろうと思われる。資本主義の行く末がどうなっていくのか。少子化問題やジェンダーフリーの問題はどうなるのか。地球環境はどうなるのか。薔薇色の未来とはいえない現実を前に、価値観はますます多様化してきて問題はより複雑になっている。そこでどのように考えて決断するのかは極めて難しい問題だ。そんなときには、心の中で、田村明さんに会いにいく。そのときに帰ってくる答えはひとつだろう…自分がその問題を左右できる責任者だと思ってみなさい。さあ、君ならどう考える?

# 宅地開発要綱ーアジアの大都市で蘇るか

#### 淺川賢司

## 1. 田村明との出会い

私が田村明を知るようになったのは、業務の一環で、新興国へ紹介できるような日本の都市計画のグッドプラクティスを探すために、横浜市の都市計画の歴史を調べていた時だった。都市計画のグッドプラクティスはその実践主体である地方自治体にこそ存在すると考え、大都市「横浜」であれば、なにか見つかるだろうと思い、横浜市の発行している資料を中心に調べてみたが、意外とそれらしいものが見当たらない。海外向けに横浜市の発展の歴史を紹介した英文





【写真】 よりによって高速道路のランプ付近に住宅団地が接続している例(Baan Klang Muang Sathorn-Taksin 2)。左:航空写真(2020年)。右:住宅団地の入口付近(セキュリティのため門番が設置されている。つまり、団地内のセキュリティを確保するために外界とのアクセスはなるべく制限したいのである。)

パンフレットなどもあたってみたが、6大プロジェクトを実現した ことなどを表面的に列挙するのみであった。これでは読み手はどの ような背景、経緯でこれらは実現しえたのかが分からず、何も得る ものがないばかりか、肝心な部分が隠されたままで横浜の自慢話を 聞かされるばかりでは、さぞやストレスを感じることだろう。

そんな時に、ふと書籍検索で出会ったのが「都市プランナー田村明の闘い」であった。これには、六大事業はもちろんのこと、私が田村明の最高傑作と考える宅地開発要綱(ちなみに、行政法においても宅地開発要綱は「戦後自治体行政の最高傑作」と呼ばれている)などの業績がその背景、理念、経緯などが詳細にかつドラマチックに紹介されていた。私は、これこそいままで探していた情報であり、都市計画のグッドプラクティスに違いないとその発見を喜ぶとともに、学生時代に都市計画を学習していたにもかかわらず、これらの業績のひとつも知らなかったことを不思議に感じ、まさに目から鱗が落ちた心境だった。

## 2. 新興国における字地開発

108

大学院で都市環境工学を選択し、発展途上国の環境問題に最前線で関わっていくため、修士課程修了後、日本から発展途上国に対する政府開発援助(ODA)のプロジェクトを現場で実施するコンサルタント会社に就職した。入社時の希望通り、プロジェクト形成の上流を扱う開発計画部門に所属し、入社早々タイのバンコクに長期出張することになり、その後もバンコクには幾度となく訪問することになった。

バンコクの空港に着陸する直前、眼前に空港周辺の広大な田園地帯が広がる。1990年代後半の当時、バンコク国際空港であったドンムアン空港付近は都心の北側でやや離れて位置しているので、ま

だ都市化の波はそこまで強くなかった。その一方で田畑を貫く幹線 道路沿いにはカラフルな低層の商業ビルが立ち並び、その背後には、 くすんだトタン屋根の平屋の家が集まっていると思うと、見るから に高級そうな邸宅があざやかな緑の芝生に囲まれて建っている。こ のアンバランスさは日本ではなかなか見ることができないだろう。

このような日本ではあまり見かけない都市の構造に興味津々になっていると、ほかにも奇妙な状景を見つけた。なんと、高速道路に住宅団地が接続しているのである。

いまでこそバンコク周辺は宅地開発が面的に進んでいるが1990年代後半の当時は、こういった住宅団地開発や戸建宅地開発が、あざやかな田園地帯に突如として現れることが多かった。そして、そのほとんどが、主要幹線道路に、周囲の閑散さとはアンバランスなほど建物がせせこましく立て込んだ街区が、たった1本の生活道路で生命線のように結ばれているだけなのである。開発規模は大小さまざまではあるが、これらはまるで大木に寄生するヤドリギのようだ。たしかに、このような住宅地の住人はどこへ行くにも大木である幹線道路を利用することになるため、住人が自動車で出入りするたびにこの幹線道路は渋滞し、さぞ本来の機能が阻害されてきたことだろう。

このような宅地開発事例は、最も安上りに高く売れそうな宅地を開発する究極の姿の一類型であると思うが、典型的な悪い事例として、都市計画のルールが不十分な多くの新興国で見かけることがあった。幸いにしてこのような宅地開発スタイルは日本にはほとんど見かけないが、それは広い意味で都市計画というまちづくりのルールが、これらの国と比較して日本ではよく機能していると言えるからであるう。私は東南アジアを中心に多くの新興国を訪問することがある

が、このような開発事例を空の上から見るたびに、心痛めるとともに、 まちづくりのルールというのは難しいものだと痛感している。

#### 3. 宅地開発要綱

私が新興国を訪問していた時代でも都市計画は地方自治体の仕事であったため、まちづくりのルールが不十分というのは地方自治体の能力の問題ということになるが、その難しさを感じていた私には、田村明の宅地開発要綱はまさに彼らへの理想的な処方箋のように見えた。田村明が主幹していた横浜市の企画調整室でこの宅地開発要綱が誕生した1968年、日本は高度成長期の真っただ中であり、大都市を中心に全国的に宅地開発需要がピークであった時代である。ここで私が思い浮かべる「行け行けどんどん」といった当時の雰囲気が、現代の東南アジアを中心とする新興国の大都市のそれにぴったりと重なるのである。

残念ながら、私はもうODAのプロジェクトから離れてはいるが、これをどうにかして新興国の自治体職員に紹介できないか、これが彼らによって新しい宅地開発要綱として蘇り、別な形で実践できればどんなに素晴らしいことだろう、と「都市プランナー田村明の闘い」を読んだときに即座にそう思ったのだった。

# 4. 田村明研究会

これをきっかけに田村明のことを調べてみると、御本人はすでに他界されているものの、(NPO法人)田村明記念・まちづくり研究会という団体があって田村明研究を継続されていることを知った。さっそく連絡をとり入会させて頂くとともに、図々しくも田村明研究のメンバーとして学会の田村明セッションで発表させて頂くこと

になった。入会させて頂いた翌年2018年に、国際都市計画史学会 (IPHS) の大会が横浜で開催されることになって、田村明ゆかりの 記念すべき横浜大会ということで、同研究会が田村明研究で1つの セッションを企画しており、田村明にまつわる研究報告を集めていたというタイミングだったらしい。なんというご縁か、これを機に、この宅地開発要綱を題材とした論考を作らなければいけなくなったのだ。

# 5. 宅地開発要綱の研究

誠に僭越ながら、田村明と私は建築と法律を学んだという点が似ている。もっとも、何を学んだかという比較はつらい気持ちになるだけなのでしないことにしているが、なんとなく田村明の建築的センス、法的センスは想像できる気でいる。田村明は宅地開発要綱の研究を東京大学(工学部都市工学科)に提出し博士号を授与された。そうであれば、そのような田村明の研究テーマは慎重に扱わなければならないが、二番煎じであってはならない。少しでも新しい切り口で扱わなければ、建築と法律を学んできた者としては田村明に面目がたたない。建築・都市的な課題を法規範論で解決しようとした宅地開発要綱について、表面的には見えてこない田村明の意図した本質を探究しなければならないと思った。

とはいえ、宅地開発要綱を含め「要綱」とは法律ではない。分野としては行政法で扱うものではあるが、地方自治体内部のルールにすぎず対外的な拘束力はないものの、あたかも法律に準ずるもののように運用され、悪用された時代があったと説明されるのがせいぜいである。さらに、悪用した張本人として市長が刑事裁判にかけられて有罪になるなど、法律論で見るかぎり要綱は悪者扱いで、これを応援してくれそうなものは何も見当たらなかった。では、そんな

要綱がなぜ最高傑作と評されるのだろうか。高度成長期の開発コントロールに悩む地方自治体から絶大な支持を得、地方自治体側の開発抑制力が過剰になったとして、当時の建設省から要綱の運用を控えよという通達が地方自治体向けに出されるほど大活躍したからか。要綱の本質とは一体何であろうか。

このように、法律ではない宅地開発要綱について法律論を展開するのには無理がある。そもそも要綱とは「法律の外」にあるものであり、それこそ宅地開発要綱が大活躍できた最大の理由であり存在価値だったのではないか。法律と同様にルールを規定をしている要綱があえて「法律の外」にいるとはどういうことか。法律とは基本的に強制力を伴うルールが規定されているものであるが、法律ではないルールというのであれば、それは強制力が伴わないルールと言える。そんなものに意味があるのだろうか――じつは「ある」のである。すなわち、法律などをハードローと呼ぶのに対し、強制力のないルールはソフトローと呼ばれ、会計基準などの業界ルールをはじめとして、じつは世の中にはソフトローが数多く存在している。強制力がなく任意にしか守られることがないルールにも存在意義はあるのだ。なぜなら、ルールの適用対象者において、なんらかの統一ルールを守った方が個別または全体にとってメリットがある場合にはそういったルールが必要だからである。

これを宅地開発要綱に置き換え、これをソフトローの一種だと考えると、宅地開発要綱が誕生し、開発業者からの抵抗も表立ってなく運用されていた時代では、それに従った方が開発業者にとってもメリットがありそうだと考えられていたかもしれず、そんなメリットをもたらしそうなルールが宅地開発要綱として明文化され、地方自治体と開発業者の間における合意形成の基礎として機能していたのではないだろうか。

# 6. 新興国の大都市と宅地開発要綱

開発業者とのせめぎあいが激しい都市開発という分野において、強制力のないルールを誕生させ、機能させてきたという実績は貴重なものである。特に、冒頭で述べたようなアジアを中心とした都市の成長が著しい新興国では、開発業者などの強力なロビー活動により都市開発を抑制するハードローを成立させることはほとんど期待できない。むしろ、民主的な手続を必要としないソフトローの方が現実的な選択肢であり、これが機能するのであればその利用価値は限りなく高いはずである。ソフトローの考え方にのっとれば、都市開発を抑制するものであっても開発業者がそれに応じるインセンティブを明示的に用意できれば、ソフトローが機能する場面が実現できるはずである。開発業者に対しどのようなインセンティブを作りだすことに成功したのかについて、横浜市の宅地開発要綱を検証することにより、新興国の大都市が都市開発抑制にソフトローが活かせるヒントが得られるかもしれない。

もっとも、高度成長期の横浜市と現代の新興国の大都市とでは、 モータリゼーションといった都市構造に影響を与える因子や、グロー バル化に伴う開発業者の多国籍化といったソフトローの適用対象者 の性質も大きく異なるため、合意形成できる「落としどころ」や効 果のあるインセンティブも大きく異なるかもしれない。さらには、 市場変化のスピードも当時に比べれば現代は格段に早くなっている だろう。しかし、だからこそソフトローはハードローにはない柔軟 性を活かしきめ細かな対応ができるとともに、対象者の属性に合わ せて臨機応変に変化していくことが期待されるのである。

このような宅地開発要綱のソフトロー的再評価について前述した IPHSの横浜大会で発表した後、国連人間居住計画(UN-Habitat) の主催するシンポジウムで新興国の都市開発部門の職員に対して発

表する機会を得た。大胆にも、宅地開発要綱にストップをかけた側である日本の国土交通省の職員を前に、「要綱万歳!」を主張することになったのだが、幸いにして新興国の職員からの反応はよかった。おそらく宅地開発要綱が英語で紹介されたのは初めてだったのだろう。ソフトローという言葉も聞いたことはなかったかもしれない。ほとんどの参加者は都市開発圧力が強すぎるため法律・条例の策定が追い付いていないといった課題に悩んでいた。「自分の国でも実現できるか」といった個別相談をもちかけてきた参加者も数人おり、休憩時間はその対応に終始するほどだった。

このように、ソフトローは地方分権が不十分で条例制定が簡単ではない新興国の都市には有効な方法の1つだとは思うが、その運用には条例にはない注意を要する。ソフトローはハードローのように強制力に頼ることができないため、その適用にあたっては適用対象者との協議・交渉などが不可欠であり、地方自治体側に高度な人的能力を必要とする。そのため、地方自治体側では各専門部局との連携が必要であり、総力を結集しなければならない。

すると、宅地開発要綱の運用が成功した背景には、担当部局である企画調整室の全庁調整力が高かったからではないかという仮説も成り立ちそうである。こうなると、宅地開発要綱の研究をするためは、地方自治体の企画調整機能の研究が必要となり、前者は後者を基礎として派生した政策手法の1つにすぎないということにもなる。なんと奥深いテーマであろう。やはり田村明研究の本丸は企画調整機能にあるのかもしれない。宅地開発要綱の研究を通じて、やっと田村明研究の端緒に着いた、今はそんな気持ちである。

# 都市ヨコハマの演出家・田村明さん

#### 奥津憲聖

# 1. 横浜っ子の原風景―私の個人史から

私は横浜が好きだ。日々の忙しない日常のなかで、その気持ちを 忘れそうになることもある。だが、例えば横浜ランドマークタワー の展望フロアに上り、眼下に広がる横浜の景色を眺めた時、その気 持ちを思い出す。

今日は大さん橋に飛鳥IIが停泊している。ベイブリッジの橋桁をロイヤルウイングがくぐり抜けていく。ぷかりさん橋からはシーバスが出航したところだ……。北西に目を向ければ案外近くに新横浜プリンスホテルが見える。その奥には日産スタジアムも顔を覗かせている。横浜駅から出発した列車を目で追うと保土ケ谷の横浜ビジネスパークが見えてくる。上大岡にある「ゆめおおおか」のオフィスタワーもよく目立つ。本牧が海に突き出した岬になっていることもこの高さからならよく分かる。南本牧ふ頭のガントリークレーンの先には根岸の製油所が、さらにその先には八景島シーパラダイスも見える……。

ランドマークタワーの展望フロアから見える景色こそが、私にとっての横浜の原風景だ。そして、こうしたアイキャッチャーの建造物を挙げていくと、その多くが平成の時代に建設されたものだと気づく。

私は1992(平成4)年、横浜に生まれ、現在に至るまで四半世紀 以上横浜で暮らしてきた。幼少期、パシフィコ横浜の隣には横浜博 覧会のパビリオンの名残である「みなとみらい21横浜館」という 施設があって、近未来の横浜の風景を再現したジオラマに胸をとき めかせたことをよく覚えている。横浜市が六大事業を発表したのは

1965 (昭和40) 年のことだったが、私が生まれ育った平成という時代は、みなとみらい21、横浜ベイブリッジ、港北ニュータウンといった六大事業の構想が目に見える形で実現していった時代であった。

本NPOの会員でもある南学さんが書かれた『カラー版 横浜 交流 と発展のまちガイド』(岩波ジュニア新書、2004年)は、飛鳥田市 政期に田村明さんが蒔いた都市づくりの種が実を結び、花開いた美しい横浜の姿を記した貴重な記録である。2002(平成14)年には田村さんが保存活用に尽力した新港ふ頭の赤レンガ倉庫が文化・商業施設「横浜赤レンガ倉庫」としてオープンした。大さん橋の改修工事により、新しい大さん橋国際客船ターミナルが開業したのもこの年のことである。さらに2004(平成16)年には東急東横線直通のみなとみらい線が開通し、東京都心から横浜の中心市街地へのアクセスが格段に高まった。今振り返ると、細郷・高秀市政期を経て、中田市政の第1期に差し掛かったこの頃、飛鳥田市政期から続いてきた横浜の都市づくりの壮大なプロジェクトがクライマックスを迎えていたように感じる。

横浜開港150周年の節目の年である2009(平成21)年、未来への「出航」をテーマにした記念イベント「開国博Y150」が開催された。高校2年生だった私は、会場運営ボランティアとしてこのイベントに参加した。当時のパンフレットには「今、『開国博Y150』という名の船があなたを乗せて『出航』します」と書かれている。横浜で生まれ育ったことを誇りに思っていた私は、一市民として「開国博Y150」という名の船に、喜び勇んで乗船したのである。しかし、会期中に中田市長が2期目の任期途中での辞職を表明。未来へと「出航」した横浜の舵取りを担うべき船長がイベントの途中で突然船を降りてしまった。開港150周年は、市民と行政が力を合わせて新しい横浜の都市づくりについて考え、実行に移していく最大の好機だった。しかしこの時の市長の突然の辞任が、現在まで続く市民と行政

の分断のきっかけを作ってしまったと私は感じている。

2012 (平成24) 年、大学生になっていた私は、横浜市都市美対 策審議会の景観審査部会を傍聴した。この部会では、みなとみらい 21新港地区に建設される結婚式場をめぐり、委員から結婚式場の外 観が地区の景観と調和しないとの異議が出され、事業者との景観協 議が不調に終わった。1965(昭和40)年から続いてきた都市美対 策審議会の歴史の中で、協議が不調となったのはこの時が初めてだっ た。結婚式場は外観のデザイン修正を経て2014(平成26)年に開 業したが、この景観論争以降、景観との調和が十分議論されないま ま都心臨海部の開発が進められる事例が増えてきたように感じる。 例えば2019(令和元)年には、北仲通地区に高さ135メートルの 高層ホテルが開業した。これにより象の鼻パークや山下公園から見 えていたランドマークタワーはこのホテルの建物にほとんど覆い隠 されてしまった。都心臨海部の開発が進み、高いビルが建設される ことは仕方がないが、みなとみらい21中央地区では内陸部から海に 向けて建物の高さを徐々に低くすることで、特徴的なスカイライン の形成が図られてきた。このような横浜らしい景観が新しいビルの 建設によって失われてしまったことはとても残念である。

これはIR(統合型リゾート)の誘致によって進められようとしている山下ふ頭の開発にも言えることだが、近年の横浜の都心臨海部の開発では、開発を進める事業者の意向が最優先され、横浜で暮らす市民の思いがどこかに置き去りにされてしまっている感じがする。それは例えて言うなら、市民が大切に守り育ててきた公園が、知らないうちに観光客のためのテーマパークに作り替えられてしまっているような感覚である。この50年間の横浜の都市づくりによって、一般市民が立ち入ることができなかった横浜の都心臨海部が、市民のためのオープンな公共空間へと生まれ変わった。これからの横浜の都市づくりは、田村明さんが蒔いた都市づくりの種、そして行政

と市民によって守り育てられた実と花を生かしつづける形で進めていってほしいと私は思う。

#### 2. 田村明さんの引力

118

私が田村明さんのことを知ったのは2010(平成22)年4月のことだった。当時、北仲通地区にある旧帝蚕倉庫事務所の建物が神奈川県内7大学のサテライトスクール「北仲スクール」として活用されていた。その存在を知った私は、同年4月から6月にかけて同スクールで、横浜市立大学の国吉直行先生が担当する「都市デザイン論A」の授業を受講させていただいたのである。この時、課題図書に指定されたのが田村さんの「都市ヨコハマをつくる実践的まちづくり手法」(中公新書、1983年)だった。田村さんとともに横浜市でアーバンデザインの仕事に取り組まれてきた国吉先生のお話を伺って、田村さんと横浜市職員の方々の尽力があったからこそ今の横浜の姿があることを知ることができた。

田村さんはすでにこの年の1月25日に逝去されていたが、前年の12月10日にはこの北仲スクールで特別講義を行っている。実は私が初めて北仲スクールに足を運んだのがその前日の12月9日のことなので、もう少し早く田村さんのことを知っていたらこの講義を受講して田村さんの話を直接伺うことができた。田村さんご本人にお会いするチャンスを逃してしまったのは残念だったが、私が北仲スクールに通うことになったのも田村さんの強い引力に引き付けられたからかもしれない。

その後縁あって、2013 (平成25) 年の10月から本NPOの前身である「まちづくりの総合化と田村明ー研究会」に参加させていただくことになった。研究会の活動を通じて、生前の田村さんとご交流のあった方々のお話を沢山お伺いし、田村さんの菊名のご自宅や

熱川の別荘にもお伺いすることができた。田村さんの「明」という名前は、お父様の田村幸太郎さんの宇宙への関心から「日」と「月」に因んで名づけられたという。私は、田村明さんは故人となってもなお人を引き付ける引力を持ち続けていると思う。田村明さんの逝去という超新星爆発の後に生まれた「NPO法人 田村明記念・まちづくり研究会」は少しずつ形を整え始めた星間雲のようだ。すでにその引力圏にいる私も、当事者の1人として新しい星の誕生を見届ける責務があると思っている。

# 3. 総合的な仕事がしたい―田村明さんの「二十歳の原点」

私にとって単位制の高校に進学したことは人生の大きな転機であった。自分で取りたい授業を選んで時間割をつくる自由な校風の高校に進学したからこそ、学外のボランティアに参加したり、大学の授業を聴講したりすることができた。そして、田村明さんにとっても旧制静岡高校への進学は大きな人生の転機となったのではないのだろうか。

旧制静岡高校は1922(大正11)年に創立された旧制高校で、第一高校から第八高校までのナンバースクールに対して地名スクールとも呼ばれる。「不二寮」「穆寮」「映寮」「慰寮」「悟寮」という5つの自治寮があり、全体には「仰秀寮」という雅称がつけられていた。なお、悟寮は1945(昭和20)年6月の空襲で焼失した。戦時中の映寮で発行された回覧雑誌「映想」に田村さんが寄せた詩や小説、戯曲はこの頃の田村さんの心境を考える上で重要な資料となるはずだ。ただ、今回は戦後に田村さんが入居した不二寮の寮祭劇に注目し、この時の経験が都市プランナーとしての仕事にどのようにつながるのかを考えてみたい。

1946 (昭和21) 年9月、旧制静岡高校3年生となっていた田村さ

んは不二寮に入学した。定員40名のうち5名が3年生、残りは2年生 と1年生が半々だったという。そして、その秋に開催された寮祭で 田村さんは寮祭劇の演出を任された。これは4つの寮がそれぞれ演 劇を披露し、最後に観客の投票で優勝を決めるというものであった。 田村さんは不二寮の演劇の脚本に山本有三の戯曲「生命の冠」を選 んだ。これは樺太で缶詰工場を営む家族が、仲介業者からの理不尽 な妨害を受けながらも、正義を貫き、倒産という結果を受け入れる という物語である。1920 (大正9) 年に発表されてからは毎年舞台 にかかり、1936(昭和11)年には内田吐夢監督によって映画化さ れた人気作であった。配役は参加者の間で自主的に決まり、田村さ んは総合的な演出と細部の演技指導を行った。その結果、この年の 寮祭劇は不二寮が優勝し、田村さんは寮の中庭で皆に胴上げをして もらったという。その後、田村さんは文学座や俳優座の新劇を見に 行くようになり、演劇の世界にも興味を持つようになった。田村さ んはこの時のことを振り返って、「ずっと後になって都市プランナー という仕事をするのだが、総合的に一つの仕事を纏めてゆくのは、 演劇の演出やプロデュースにも共通するものがある。総合的な仕事 がしたいと漠然と思ったのはこの時の経験が大きかっただろう。| ※ 1と述べている。

劇作家・演出家の平田オリザさんは「演出家の仕事は、大きく分けて、演劇作品を構成し、観客に届けることと、その構成に沿って、俳優の演技を指導することの二つに大別される」とし、「世界観、構成、戦略なしに、ただ闇雲に方法論だけをかざして、俳優の演技力を指導していたのでは、俳優はなんのための演技なのか、全く理解できません。しかし、一方で構成や戦略だけを話されて、実際にそれをどう演じればいいのかという方法論や、それを説明する言葉がなければ、俳優は荒野に放たれた羊のように戸惑ってしまうでしょう」と述べている。※2

目標を整理して提示する構成力と、それを実現するための方法を伝える指導力。田村さんはその2つの力をバランスよく併せ持った、優れた「演出家」だったと私は考える。横浜市立大学の鈴木伸治先生は1965 (昭和40) 年に横浜市が発表した六大事業について、個々の事業にはそれ以前の都市計画の構想やアイデアが含まれているとし、数多くあった計画のなかから骨格的なプロジェクトに重み付けを行った点にその意義があると指摘している。※3また「六大事業という都市づくりの骨格となる事業を選び出したこと以上に、それを推進するプランナーを中心とした組織をつくり、自治体主導の都市計画を体系化・総合化して牽引したことを評価すべき」とも述べている。※4

都市計画家の功績について考えるとき、その人物がいかに素晴らしい計画を立てたかという、その人の「劇作家」としての側面に注目しがちだが、田村明さんについて考えるときには目標をどう整理し、どのような方法でそれを実現していったのかという「演出家」としての側面に注目することが重要である。企画調整局における大テーブル主義など田村さんが横浜市で実践した組織づくりの方法論は「演出」という視点からとらえ直すことでその意義を検討することができるのではないのだろうか。

本NPOには企画調整局やまちづくり研究会、現代まちづくり塾などで、田村さんの「演出」に直に触れた方々がいらっしゃるので、ぜひ「演出家・田村明」という視点から田村さんのことを語り合ってみたい。そして、旧制静岡高校での経験は田村さんの演出を支えた構成力や指導力の1つの原点となったはずだ。新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着いたら、ぜひ静岡に足を運んで、在学中の田村明さんの活動について調査研究を進めてみたいと考えている。

#### 注

- ※1 田村明『東京っ子の原風景 柿の実る家の昭和史』公人社、 2009年、194-195頁。
- ※2 平田オリザ『演技と演出』講談社現代新書、2004年、216頁。
- ※3 鈴木伸治「都市デザインの前史―飛鳥田市政の誕生から六大事業まで―」『都市デザインの現場から 横浜都市デザイン40年の軌跡』横浜市立大学、2011年、24頁。
- ※4 鈴木伸治『「田村明とその時代」今、田村明を読む 田村明著作 選集』春風社、2016年、19頁

#### 〈参考文献〉

- ・鈴木伸治編『都市デザインの現場から 横浜都市デザイン40年の軌跡』横 浜市立大学、2011年
- ・鈴木伸治編『今、田村明を読む 田村明著作選集』春風社、2016年
- ・田村明『都市ヨコハマをつくる 実践的まちづくり手法』中公新書、1983年
- ・田村明『東京っ子の原風景 柿の実る家の昭和史』 公人社、2009年
- ・田村千尋「田村 明の思想に影響を及ぼした家族、そして、」2016年 (NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会の Web サイトで公開中)
- ・平田オリザ『演技と演出』講談社現代新書、2004年
- ・南学『カラー版 横浜 交流と発展のまちガイド』岩波ジュニア新書、2004年
- ・山本有三『山本有三全集第一巻』新潮社、1977年
- ・三鷹市山本有三記念館編『みんなで読もう山本有三』笠間書院、2006 年
- ・『青春奏つへし 官立静岡高等学校六十周年記念編纂』 旧制静岡高校同窓 会、1982年

# 田村さんとの出会いとまちづくり研究会

南学

# 1.田村さんとの出会い

田村明さんと出会ったのは、1977年7月12日であった(当時の手帳が残っていたので確認した)。それは、この年の3月に大学を卒業し、4月から横浜市役所に新人職員として勤務することになって、1ヶ月間の新職員研修を経てから、職場(環境事業局産業廃棄物指導課)に配属されてから2ヶ月ほど経た時であった。

出会いは、横浜市役所に勤務する東京大学の出身者の懇親会(「銀杏会」と言われていた)で、田村さんが、学閥形成ということではなく、異なった年齢と職場の職員の懇親の場としてはじめた会合であると、後に聞いた。

田村さんの存在は、横浜市に就職し、新入職員研修で横浜のまちづくりの事例を学習するまでは、全く知らなかった。しかし、研修での横浜市の六大事業というものを初めて耳にして、その実践は企画調整局を中心にコーディネートされて、田村さんはその中心にいて、職場での先輩職員からは、市政に大きな影響力を持ち「田村天皇」と呼ばれることもあると知らされたのである。

新入職員研修で、横浜市の六大事業をはじめ、高速道路の地下化、宅地開発要綱などのさまざまな実践を学習したことは、横浜市の職員として、それまで持っていた地方公務員のイメージを越える契機となった。そして、企画調整局という部局がまちづくりの専門家集団であり、自分もいつかは、その一員として、まちづくりの実践に関わることができるのではないか、という淡い期待を持つことになった。このような1ヶ月に及ぶ研修の最終日に、当時、大学卒で採用

され入庁した120人を前に、職員研修所の職員にマイクを借りて、「この研修で、横浜市におけるさまざまな先進的な実践を学んだが、都市問題は広く大きな課題となっているので、引き続き勉強する必要性を感じた。なので、これからも継続的に自主勉強会を開催したいので、賛同する方はこの場に残って欲しい」と呼びかけた。そのときは、参加していた120人の半数近くが残り、意欲を示してくれたのだが、最初の会合を1ヶ月後としてしまったために、初回に参加したのは10数名(約1割)にとどまった。しかし、その後は毎月の勉強会(「都市問題を考える会」)を開催することとなり、毎回10名程度の同期の職員が集まり、懇親を深めて、後の「まちづくり研究会」に発展する母体となった。

このような背景の中で、職場に「銀杏会」の案内が届き、参加することになったのが、田村さんと話した最初の機会となり、それは、今でも鮮明な記憶として残っている。

# 2. 参加者全員と話し、その内容を覚えていた

124

当時、この懇親会には40名ほどの参加があったが、後に助役(現在の副市長)となる下水道局長、市民局長をはじめ、水道局長など幹部職員も多く参加していた。新人として参加したのは4,5名であったが、その中には、後に都市デザイン室長を務め、東京大学助教授(後に教授)として転職し、田村さんの亡くなる1年前に病死した北沢猛氏もいた。

今でも鮮明に覚えているのは、やや遅れて登場した田村さんに対して、参加者一同が拍手で迎えた情景である(やはり、「田村天皇」だったのだ)。そして、宴が進み始めると、田村さんは、私をはじめとする新人の席をつぎつぎと訪ねて話し始めた。私の目の前に座った田村さんは、「名前は?」と聞き、私が「南学です」と答えると、「ナ

ンガク君か、は、は、は」と言いながら、横浜市に就職した理由などを尋ねたような記憶がある。話の内容は覚えていないが、場面として覚えているのは、田村さんは数十名の参加者全てと話しをし、二次会にも参加したのだが、誘われて参加した新人たちとも、気楽に話してくれた。驚いたのは、私に対して、「確か、ナンガク君だったね。さっき話したように・・・」と、内容は覚えていないが、名前と最初に話した内容を覚えていたことであった。

二次会での短い会話を経たことによって、私自身にとっての田村 さんの存在は、「田村天皇」ではなく、「親しみのもてる良き先輩」 となった。そして、その後の「付き合い」につながったと考えている。

# 3. 「都市問題を考える会」の創設

新入職員研修で同期の仲間に呼びかけた勉強会は、「都市問題を考える会」という名称で、1977年5月から活動を開始した。どのように始めるかと思いを巡らせているときに、二つの幸運が重なった。一つは、当時の職員研修所の係長が、私の勉強会の呼びかけに対して、「職員の自主研究活動を支援するために、職務時間中の研修を「職免」という時間保証を月に半日程度認め、若干の書籍購入などの費用を補助する」という「行政問題自主研修」という制度の創設情報とそれへの応募を促してくれたことであった。この制度への応募第1号として、「都市問題を考える会」は、職員研修所を通じて、一定の便宜供与をうけることとなった。

最初の「恩恵」は、当時、総合計画における実施計画(タイトルは「新5カ年指標」)の説明を聞きたいと要望したら、企画調整局プロジェクト室主査である(当時)高橋敏美氏を紹介してくれたことであった。東京大学の出身であったこの方との出会いが、田村さんとの関係を密接にする契機であった。高橋さんは、スーツが全く

似合わない風貌と、豊富な役所外の人脈、皮肉に満ちたコメントの連発で、大きな刺激を受けた方だった。自主研修会での説明は、当時の限られた記憶をたどれば、「総合計画なんて、最も関心を持っているのは不動産屋と建設業だ。」「(市街化調整地域の)線引きって知っているか。これが解除されれば、土地代が上がる。どこに、どのような計画が、いつ頃あるのかということを読み取るためのもの」というものであった。

このような、ある意味での「本音」を展開する説明は、「計画に基づいてまちづくりをすすめる」のが役所の役割と考えていた新入職員には、理解を超えたものであり、「ヤクザみたいな職員もいありまるのだ」という感想をもったメンバーもいたほどであった。

非常に興味をもった私は、「いつでもきていいよ」という言葉にしたがって、仕事の合間にプロジェクト室を訪ねて、高橋氏にさまざまな話しを聞くことになった。そして、自主研究のまとめ(最終日)に田村さんを呼ぶことができないだろうか、と相談したところ、直接局長である田村さんに話してくれ、実現することとなった。

田村さんは、気楽に参加してくれたが、新人職員の自主研修に参加することは、当時としては「おおごと」だったようだ。高橋氏ともう一人の係長も同行して、局長だった田村さんとの「鼎談」は、非常に興味深かったが、田村さんがやや感情的に反応した質問があった。データ分析を得意としながら皮肉な視点を持ったメンバーの一人が、「宅地開発要綱で計画的な駅前開発ができたと言うが、土地を原価で提供したデベロッパーは、当然、その分を分譲価格に上乗せするので、結果的に、土地を購入する市民の負担が増えるのではないか」という主旨の質問をしたときであった。当時は、家賃や分譲価格が高騰し、若手職員には家を確保するのが大変な時代であり、宅地開発要綱によって、住宅価格がさらに上昇するのではないか、という疑問である。この質問に対して、田村さんが、「価格上昇は

経済状況によるもので、宅地開発要綱によって、快適な住宅環境が整備されるメリットが大きい」と反論するなど、しばらく緊迫した議論が展開された。研究会メンバーからは、「あんなにムキになるとは大人げない」という感想があったほどであった。高橋氏からも、「田村さんは痛いところを突かれて、焦ったのだろう」とのことであった。

## 4. 「まちづくり研究会」への発展

「都市問題を考える会」の活動を開始した翌年に、当時の飛鳥田市長が社会党委員長に就任するために市長を辞職することになり、新市長(細郷道一氏)のもとでは、田村さんは、企画調整局長を外され、「技監」となった。その後の規則改正で技監職の権限は実質的に調査研究に限定されることになり、企画調整局は名称は残ったものの、解体状態となった。この年の夏に、私は「B型慢性肝炎」で、半年の入院(2年後には完治)となったことで、「都市問題を考える会」は休会状態となったのであるが、数十名の参加者のネットワークができたことで、その後の「まちづくり研究会」の基礎となった。

主要業務からは外された田村さんであったが、私にとっては、時間的に余裕ができた田村さんを技監室に訪ねたり、大学の同窓の若手職員を集めて、非定期な勉強会を開催することができ、さまざまなまちづくりの実践に関する知識を吸収することができた。

そして、「まちづくり研究会」の発足が1980年3月とされているので(「調査季報」1991年11月号、「まちづくりを楽しむ「まち研」」)、1980年の当初だと思われるが、当時の職員研修所職員だった中原正治氏が、田村さんを講師にした4、5回連続の「技術講座」を企画した。この研修に、田村さんから「参加しないか」と打診された私は、「田村さんには、さまざまな勉強会などで、多くを教えていただい

たので、別の職員に機会を与えた方が良いと思う」と答えたのだが、 田村さんは「実は、この研修講座を機会に、継続的な研究会を創ろ うと思う。南君は、研究会の運営に慣れているから、ぜひ手伝って 欲しい」と言われたのだった。そして、この講座に、「都市問題を 考える会」のメンバー数名にも声をかけて、参加することになった。 今、思えば、そのときには、横浜市を退職する決心を固めていたの ではないか。

講座には、係長になる前の若手職員が20名ほど参加したと記憶しているが、閑職に追いやられた田村さんの研修講座に、人事への影響を懸念する係長級以上の職員は参加しなかったのだと思う。そして、講座の最終日の前に、田村さんから「ボクは10分ほど遅れて入室するから、その時間を使って、研究会の呼びかけをしてくれないか」と依頼され、その呼びかけによって、その後20年以上続く「まちづくり研究会」(以後「まち研」)の発足となった。

# 5. 20年以上にわたり、月に1回の研究会を開催

「まち研」には、田村さんも、横浜市役所内に足跡を残こすという目的をもって、重視してくれたと思う。当初、世話人(後に、運営委員会)を呼びかけた時も、手を挙げた職員ついて、「彼は、職場でも浮いた存在らしいので、気を付けてくれ」などと注文をだしたこともあった。私は、「都市問題を考える会」のメンバーに声をかけて、世話人を増やし、極端な意見を中和するような対応をしたこともあった。

運営委員会と言っても、実質的には、講座を企画した仲原氏と共同で、横浜市政に関して、お互いの興味のある分野のテーマと講師を選び、田村さんの日程を調整し、市役所近隣の会議室を借りて、 庁内メールを使って参加者に通知し、司会を務めるという手順であっ

128

た。

おおよそ、月に1回の研究会を開催したが、横浜市政に関するテーマ(事業)が主であったので、講師は、事業を担当している係長にお願いし(もちろん、担当職員や課長の時もあった)、午後6時くらいから開始して、1時間ほどのレクチャー、その後の1時間ほどの質疑応答、最後に10分から15分程度の田村さんのコメントという流れであった。田村さんのコメントは、いつも「この問題で話しをすれば、1時間では収まらないのだけれど、中心的な課題をまとめれば」という出だしであり、早口で複雑な背景などを話してくれるのだが、市役所業務の経験の少ない職員には、理解するには高度な内容も含まれていた。そして、終了後は、講師も含めて、近くのレストランや居酒屋で2時間かそれ以上の二次会で、講師の「本音」による背景や経緯を聞きながら、田村さんの周辺事情に関する話しを聞くという、貴重な機会に恵まれた。

このような研究会を20年以上にわたり、月に1回開催したので、なんと240回以上の地方行政に関する事例研究(ケーススタディ)を続けたことになる。この月に1回の研究会の他に、休日に現地視察を行ったり、当時、有名だった大分県の「一村一品運動」を訪ねたり、さらには、オリンピックを目前に控えたソウル市、姉妹都市交流のあった上海市訪問、ルックイースト政策を展開していたマレーシアなど、海外視察を行ったりもした。

さらに、田村さんが取り組んだ「現代都市読本」や現代用語辞典「イミダス」の一部の下書きを担当したこともあった。自分自身にとっては、大変貴重な勉強の機会であり、人脈を広げる点でも大きな成果があった。しかし、研究会を同じような仲間を集めて続けることは非常に難しい。主催している人間と、参加してくる人間とには、当然のことながら意識の温度差があるので、数年経つと、研究会への出席が数名程度と少なくなり、存続も危うくなることが繰り返さ

れた。もちろん、田村さんは、おそらく人材育成を通じてご自身の 遺伝子を残そうとしたと思われるので、毎回の参加は確定であった。

参加者が少なく、停滞感を感じたときは、「まち研再建委員会」 と称して、気心の通じたコアメンバーに声をかけ、どのようにしたら、 活性を取り戻せるかという議論をしたこともあった。少なくとも、 その後の1年間くらいは参加者が増えるというようなサイクルを繰 り返した。このような「再建委員会」を開催するときには、ニュー グランドホテルのマッカーサールームを借りて、雰囲気を高めると いう工夫もしたのである。このようなサイクルを繰り返しても、主 催者と参加者の意識の差は埋めることが難しい。田村さんの業績も、 仕事の進め方も、人柄も十分には理解できない世代(政権交代以後 に入庁した職員など)が増えるにつれて、運営委員会に参加する人 間の意識も、「横浜市を何とかしていこう」というような意識から、 まちづくり一般の興味関心に沿ってテーマを選ぶ「お勉強会」的な 方向になっていった。それでも主催者として20年間続けたことで、 多くの知識と経験を持つことになった。運営委員会の中心として、 テーマと講師を企画するだけで、大筋の内容は理解できるし、質疑 応答、田村さんのコメント、二次会での「本音トーク」を経験した ことで、私としては、後の係長試験の市政に関する問題は、たいし た勉強もなく、大半は正解を選択することができた。さらに、役に 立っているのは、大学教員に転職してからの地方行政に関する授業 内容の組み立てと講義には、事前準備の時間が大幅に節約できるこ とであった。また、民主党政権となった2009年に大きな話題となっ た「事業仕分け」に、たまたま「仕分け人」として参加したのだが、 国(省庁)の事業内容と問題点は、かなり正確に把握することができ、 追及できたという効果もあった。

ここまでは、田村さんとの出会いとその後の研究会活動の経験、 学んだことを述べてきたが、ここからは、学習したことがどのよう

130

に役に立っているのかという点を「論じて」みたい。

# 6. 横浜市を離れて、田村さんの「総合性」の理解がより進んだ

私は、現在、大学の客員教授という肩書きのもとで、多くの自治体のアドバイザー業務をはじめ、職員や地方議員の研修などを行っている。特に、この数年は、「公共施設マネジメント」という領域での仕事が大半となっている。この領域の主要課題は、高度経済成長期に建設された学校をはじめとするさまざまな施設やインフラが老朽化したものの、人口減少や経済衰退によって、その維持更新が難しくなっているために、公共施設の統廃合を進めなければならない状況への対応策を検討することになっている。まさに、田村さんから学んだ、縦割りを越える「総合性」、政策の主柱である「市民的利益」、実践における「プロジェクト方式」を応用できる領域となっている。

公共施設は、それぞれが、縦割りの行政目的に沿って整備された ものであるが、特定目的をもった専用施設(例えば、庁舎や学校、 保育所など)であっても、「公の施設」として、一定の条件のもと で幅広い市民が利用できる汎用施設であっても、実際の使われ方を 観察、分析すれば、稼働時間は少なく、利用者も限定され、維持管 理に膨大な税金が投入されているという実態が分かる。

成熟化、人口減少の時代において、公共施設の空いている空間や時間を効果的に使えば、総面積の圧縮をしても、市民生活に必要な機能は十分に維持することができ、むしろ、利便性や魅力を高めることもできることは明白となっている。そのためには、行政組織の縦割り構造を越えた施設概念を構築しなければならないし、それを実現する財源も、税金だけではなく民間の資金を充てることも視野に入れながら検討する必要がある。つまり、公共施設マネジメント

を前進させるためには、個別部局毎の施設面積削減を進めるのではなく、複合化・多機能化をすすめるプロジェクト方式によってすすめる必要があるということであり、横浜市の六大事業という戦略性とプロジェクト手法が適用できる分野となっている。

公民連携の手法を活用して、さまざまな財源や事業手法を導入することで、公共施設の「縮充」(規模は縮小しても機能は拡充するという造語)を実現するためには、「プロジェクト方式」でなければ、実践が進まないので、手法として導入を試みているのだが、あまりにも縦割り組織・予算の構造に慣れ親しんでしまっている行政組織(特に国の省庁)にとって、途は険しい。

公共施設マネジメントには、プロジェクト方式という手法が必要だと認識するようになった背景は、共施設の老朽化が自治体において、もっとも重要な課題の一つであることが明確になったにもかかわらず、公共施設の「縮充」がほとんどすすまない現状を考えたときに、その主因が縦割りの組織と予算という自治体の基本的構造にあることが明確になったからである。そして、この「縦割り構造」を突破して、公共施設マネジメントをすすめるには、縦割り組織・予算の構造を越えて、なおかつ、公共施設での収益事業も含めた民間の資金やノウハウも組み込むようなプロジェクト方式を活用することが、効果的であると認識するようになった。

横浜市におけるプロジェクト方式による「六大事業」は、ほとんどの自治体で作成されている「総合計画」とは違って、数十年間のまちづくりの方向に対する戦略目標のもとに、さまざまな施策・事業に対して大きなインパクトを与える事業(プロジェクト)を企画・設営し、自治体以外のさまざまな事業主体に対して、事業推進上の必要性や留意点を「市民的利益」の観点から説得し、納得を得て、進捗管理をしたことに大きな特徴があった。縦割りの組織毎につくられた公共施設を「縮充」するマネジメントとの共通性は大きい。

132

さらに、施設という物理的な建物を対象にすることで、「総合性」ということに関して、新たな発見もあった。それは、縦割りを越える総合性には、水平的な側面(立地と分野、組織)と、垂直的な側面(時間軸)の二つが密接に関連するということだ。水平的な縦割りの打破は、一定の地域全体を俯瞰して、合理的な配置を念頭に置きながら、一つの施設を複合的、多機能的に活用することを目的に、建設主体は行政と民間のそれぞれの特徴を検討した上で決定し、資金は税金という公的資金と民間の投資資金とを組み合わせるという「総合的な」取り組みとなる。これは、これまでもさまざまな形態が検討されてきた経緯がある。

垂直的な縦割り(?)の打破という観点は、施設という物理的な存在によって、考えやすくなっている。つまり、過去に整備された施設は、「資産」としての観点から、その価値を基に修繕、建替、解体という選択肢がしめされる。もちろん、資産的価値があるのなら「売却」という選択肢も含まれる。そして、現在の観点からみれば、最小のコストで最大の効果をあげる方法を検討することになる。利用者や利用形態の想定、収益可能性、管理運営形態の選択(行政直営、民間経営、指定管理者制度などの公民連携手法)に結びつく。さらには、施設寿命とされる50年から80年程度を視野において、未来(将来)への資産として現在の投資と未来世代への負担の転換など、施設のライフサイクルコストを視野においた経営感覚が必要となる。

このように、公共施設マネジメントという、ニッチな政策分野であるが、田村さんの展開した「総合性」(国、自治体行政内部、市民の壁を突破する)を応用する分野として、非常に興味深い実践を展開することができている。横浜市役所での新入職員研修で学んだことを継続するということが、田村さんとの出会いを産み出し、半世紀を経た現在に活かされ、実践の場に存在できていることを幸運と思っている。

# 田村明先生との出会い~ 地方に住んでまちづくりを学ぶ

#### 三木基弘

#### 1.はじめに

134

私は、姫路市で地方公務員をしていました。今は定年を迎え、「自由人」として活動をしております。私は田村明先生(以下、先生と略記します。)と出会い、まちづくりについて学ぶことができました。私と先生の関係を一言で申し上げれば、押しかけ弟子ということになるでしょう。この度もこのご縁で、文章を寄せる機会を得ることができました。そこで、できる限り私が接することができた先生のお人柄やお話の内容を、記憶を辿りながら書き進めて参りたいと思います。姫路という地方都市に住み、先生のご活躍の内容を身近に体験することが出来て、私は嬉しいことでした。今私は、地元の公民館などで『まちづくり』について、参加者と共に考える機会を得て、塾として継続しています。先生が提唱された『まちづくり』の理論や実践を、自分の住む場所で今後も進めて参る所存です。

今回の文章は、平成30年(2018年)1月22日(月)に、横浜市民活動支援センター4階セミナルーム2号室で、NPO法人田村明記念・まちづくり研究会の公開研究会の場で話をさせて戴いた内容を基に、短くして分かり易い内容として整理しています。また先生が、横浜での「まちづくり」を基点としながら、地方都市にも広く関心を持たれ、また人との交流を大切にしてこられたことの一端を、私なりにご紹介したいのです。そこから、先生が如何に全国各地に広く影響を及ぼされたかが見えてくると、私は考えております。

## 2. 壺中天有

私が田村明先生(以下、先生と呼ばせて戴きます。)の本に出会いましたのは、『環境計画論』です。難しそうな題名でおそるおそる手にしました。このときに私は、初めて先生という人に興味を持ちました。昭和55年(1980)です(この年に私は結婚しました)。

次には、昭和59年(1984)の著書『都市の個性とはなにか』です。 都市の個性という表現に、驚きと新鮮さを感じ読み耽りました。私 は、例えば新幹線の駅など全国どこでも同じような造りの構造物に 違和感を感じつつ、都市の利便性ではなく住み易いまちを理論的に 深めてくださる内容に、初めて出会った思いでした。

その頃、先生のご活躍ぶりを知り始めるにつけ、私はいつかどこかで、この先生から直接お話をお聴きしたいものだと、願うようになりました。当時は、先生の「まちづくり」への並々ならぬ熱意やお人柄をご教示くださった方もおられましたから。それからは私なりに地方で活動しながら、アンテナを立てて全国からの情報を得ようと努めました。

これから私が先生にお会いし、先生から直接に教えを賜ったこと を、時の順にお話ししたいと思います。

○初めての出会い 自治体学会設立準備会 先生59歳(私32歳) 昭和61年(1986)2月12日 神戸市で自治体学会設立準備会として「自治体学フォーラム」が開催されました(横浜市での開催に続く)。会場は多くの人が参加し、大変な熱気に包まれていました。そして壇上に4人の論者がおられ、先生は司会をされておられました。「この方が田村先生か」。お話された内容は、これから設立予定の「日本自治体学会」について熱く語られたことです。先生は、まちづくりをするのは「人」だということ。「私はものをつくる建築

科を出たけれども、ものをつくることだけにこだわらない。人・もの・ 仕組み・財政、そんな要素も含めて、いろいろ研究する都市プラン ナーだ」、ということを言われました。私は都市問題を研究してい る仲間と二人で、この会議に参加しました。そして会議終了後に、 先生と初めて直接にお話をすることが出来ました。感激至極でした。 只、先生と交流を希望する人々が長蛇の列をつくっていましたので、 お話できた時間は短いものでした。自治体学会設立総会が開催され たのは翌年で、以来私は自治体学会会員を続けました。

#### ○初めてのご来姫 昭和61年(1986)3月25日~26日

それから1か月余りが過ぎた3月25日の午後、私の職場に1本の電話がかかりました。私は偶然受話器を取りました。電話をかけてこられたのは、先生でした。お声で直ぐに分かりました。今夕姫路へ立ち寄るという内容でした。私は、びっくり仰天。嬉しいやら慌てるやら。私はそれから仲間を次々と誘い、歓迎会を思いつきました。先生は、その日に広島の大学で集中講義があり、その夜は姫路で泊まられるとお聞きしました。

先生は、岡山から姫路まで山陽本線を各駅停車で来られました。 先生は私に「県境がどこにあるか分かったよ」と言われました。それは岡山(備前)と姫路(播磨)との国境を、車中の人の乗降の様子や話の内容・方言などをじっくりと聴いている中で理解できたと、言われたのです。このお話をお聞きして私は、先生が各地域の特色を積極的に理解しようとされる行動に、深く感動しました。

翌日は、先生が姫路の町並みなどを歩いてみたいと言われました ので、仲間が手分けしてご案内しました。お城やら街路、幾つかの 施設などご案内しました。その中で、福祉の職場にいた職員が或る 会社へも、先生をご案内しました。そこでは障害者が主体的に働い ているのですが、施設運営などの運営をパソコンでシステム管理す

136

る仕事を障害者自身が進めている会社で、姫路市も応援していたも のでした。

○先生の編著『シリーズ自治を創る12~自治体の政策形成』の中に 姫路が掲載される。平成元年(1989)9月10日付 先生63歳 先生から、姫路の福祉関連会社の文章を作成しないかと、お話し がありました。先に先生が姫路へ来られたときにご案内した障害者 が活躍する会社のことです。早速、福祉の職員が「自治体の福祉政策」として文章を書き、先生にお送りしました。これが本に収められたとき、私たちは仲間として本当に嬉しかったものです。

私は、先生が姫路へ来られたときは、複数の仲間とお会いしてきました。これは研究会仲間が先生に高い関心を寄せていることもありますが行政の様々な分野で活躍する仲間の誰かが、先生から教わった「まちづくり」の手法を活かし、力を発揮してくれたらよいという思いがあったからです。

- ○先生が自治体学会で基調講演を行う テーマは「文化型ヴィジョン」 平成2年(1990)7月6日、大阪商工会議所 先生63歳 (先生のご発言要旨)
- ・この学会は、全国の「個」の交流・研究の場であること、多角的学会。
- ・「自治」は専門を超えた問題だ。
- ・自治がしっかりしていることは重要だ。例えばドイツなど。
- ・ツリー型からメッシュ型(成熟型)に進み、それぞれの地方自治体が情報発信元となることが重要だ。
- ○姫路文学館を見学される。 平成3年(1991)2月17日 先生64歳 姫路文学館は、安藤忠雄が設計をしました。お城から少し離れた 場所にあり、お城を展望できるように建物をつくりました。先生が

そこを見たいと言われましたので、ご案内をしました。その施設は 姫路駅から少し離れているのですが、その道中であるとか、周辺の 景色、施設からの展望であるとか、町並みなどを一所懸命見て歩か れ、写真も撮られておられました。先生は、まちをよく歩かれました。 その施設は、4月1日にオープンいうことが決まっており、開館の直 前で工事が未だ進行していた時期です。

先生は、その著書の中で和辻哲郎の『古寺巡礼』などを読んで、 京都に行ったとか、奈良に先生の案内で行って、非常に勉強になっ たという記述があります(『東京っ子の原風景』 P. 218)。この文 学館では、姫路で生まれた和辻哲郎も含めて紹介しています。

○先生からのお手紙(『都市ヨコハマ物語』を戴く) 平成3年(1991)2月20日

(お手紙)

先日は突然お電話しましたのに、大勢のお仲間とも久振りに会えて短時間ですが楽しいひとときでした。せっかくのお休みの日に本当に申訳けありませんでした。どうもありがとうございます。

すばらしい都市や地域をつくるのには、それぞれの地域の自治体が活き活きとした人々によって動かされていることが一番です。皆様方の御健斗をお祈りいたします。

(中略)

私の書きおろしとしては一番最近の「都市ヨコハマ物語」をお送りいたします。装丁も見て下さい。

他の皆さん方にもどうぞよろしく。明日は滋賀から佐賀に参ります。 二月二十日 田村明

(注、この本の装丁は先生の兄・田村義也氏の作品です。)

○地域交流センター15周年記念交流会・講演 平成3年(1991) 4 月25日、東京・日本青年館 演題は『地域づくりからの変革を求めて』 地域交流センターは民間のシンクタンクだと私は思います。ここでは多くの人が自由に集い、意見交換が行われています。15周年を祝い、先生がお祝いに駆け付けられて、お話をされました。

(お話の要旨、私のメモから)

- ・代表者の田中栄治氏とは、お付き合いをしてきた。
- ・日本青年館は、自分の故郷。江戸時代は、お狩場。
- ・これからは地域づくり、まちづくりの時代だと思っている。
- ・私にとっては、まちづくりは一生の仕事だと思っている。まちづくりには、全ての事柄が入っている。そこで私は、まちづくりを 仕事に決めた。
- ・昭和30年代、当時は民間がまちづくりをすることは無かった。
- ・その地域らしい地域づくりを目指す。地域づくりは、住んでいる 人の為にする。住み良いものにする。今までは、お金を持ってい る人だけでつくることが多かった。
- ・横浜市でのお手伝いは、官の欠点を変えることを心がけた。
- ・中央では縦割りの弊害を是正できないが、地域ならできる。地域 は生きている。具体性があるから、様々なことができる。
- ・中央は集権ではなく、分権化が進んでいる。地域・地方の集権化 ができる。生きて実体のある地域は大切。
- ・「天は円く、地方は角(四角い)」(古語)
- ・私は「地方の時代」という言葉は、好きではない。地域は、自分 たちのアイデンティティのあるものを創っていく。ボーダレス化 が進む。
- ・これからは、地域づくりの次代であると考える。
- ○先生、姫路で基調講演『都市の個性─歴史・文化と新しい都市の 創造』

平成6年(1994)10月13日、姫路市文化センター (主催、全国

市町会・東京市政調査会・日本都市センター・姫路市) 先生68歳 先生を書写・美術工芸館、書写山・圓教寺にご案内(寿量院)、 ご希望により「灘祭り」を観られる 14日

先生に、初めて姫路で「まちづくり」について講演していただきました。姫路市民を前に、「まちづくり」について具体的なお話をしていただきました。市立文化センターの小ホールで開催しました。500人が入れる小ホールですが、そこが満席となったことを覚えています。まちづくりの専門家が来られるので、関心の高い人々が熱心に聞かれていました。またこの裏方をしていた職員は研究会仲間で、先生が初めて姫路へ来られ歓迎会を催した際の参加者の一人です。

翌日は、私共が姫路の名刹・書写山「圓教寺」(えんぎょうじ)をご案内しました。天台宗のお寺で、延暦寺に繋がりがあります。このお寺は、戦国時代に羽柴秀吉が毛利氏の中国攻めをするとき本陣をおいたところです。圓教寺には根来塗という漆器が残されています。これは秀吉が播磨へ来る前に、紀州の根来寺を攻めたことがあります。危機を悟った根来寺の一部僧兵たちが圓教寺へ逃げ込みましたが、そのとき漆塗りの根来塗技法を伝えたとされています。その一部食器を使用して、同寺壽量院では精進料理を提供しています。ここで、先生に料理を召し上がっていただきました。般若湯(はんにゃとう・お酒)も飲むことができます。

先生とお話をしている中で、姫路の祭りの話がでました。「灘のけんか祭り」がありますとお話をしましたところ「じゃあ、そこへ行きたい」と言われましたので、白浜町へご案内しました。先生は、人々の中に入っていって、この伝統行事がどのように守り続けられているかということに、興味がおありでした。地元の人の中に入り込み、祭りの練り子(屋台を担ぐ男衆)から「先生、これをあげる」と言われ、はちまきを受け取られました。先生は大層喜ばれました。先生は、笑顔で地元の方々と写真に収まっておられます。

○先生から寒中ハガキを受け取る 平成7年(1995) 1月18日付 先生68歳

#### (時候ご挨拶略)

私の方は、不整脈は治らぬままですが、元気に国外、国内を回る ことが出来、本当に感謝です。

昨年三月、ニュージーランドで家内がギックリ腰になりました。 背中の痛みは今も残っておりますが、おかげさまで日常生活ができ るほどになりました。

今年はエッセイ風にまとめた『イギリスは豊か』(仮題)を近く 出版予定。『アーバンデザイン』も執筆中。真の豊かさを考え直す ときでしょう。

戦後五十年、アジアが多くの課題を投げ掛け、我々の無知を感じます。

昨年八回の海外旅行中五回はアジアでした。十月の福岡では、私が モデュレーターで「アジアの都市の可能性」を語りあいました。カ ンボジャ、ベトナムも訪れ、その地で行われた人間の愚行に暗澹とし、 生命力の強さには感動しました。

今年も平和で、心豊かな年でありますように。

○先生、村山富市首相と会う 平成7年(1995)2月21日(22日付毎日新聞記事「首相日々」から)

先生は、この時期は東奔西走されておられたようです。

○先生、ご来姫 平成7年(1995)2月23日 姫路港から神戸市へ、 阪神淡路大震災の現地を歩かれる。

当時は交通機関の多くが不通で、姫路から神戸へ行くには船を利用しました。先生は姫路へ来られ、直ぐに神戸行きを希望されました。この地震は1月17日早朝に起きました。この地震で神戸市役所旧館が一部潰れたのですが、先生の友人が設計したというので現地をみることを希望されました。そこで神戸市職員と連絡をとり、ご案内を依頼しました。職員はこのほか、神戸ポートアイランドの液状化場所などを案内してくれました。

神戸新聞『正平調』1996.3.14に次のように記されています。「神戸市役所の旧庁舎、いまの二号館が完成したのは1957年4月のことだった。」「八階建て庁舎は六階部分で押しつぶされた。」

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成7年(1995) 9月24 日付郵便

(時候ご挨拶略)

主人はこの夏はモンゴルに行ってまいりました。「イギリスは豊かなり」(東洋経済)は、もうお読みいただけましたか。どうぞ皆様にもよろしくお伝えくださいませ。9月22日。

- ○法政大学法学部最終講義のご案内を受け取る 先生69歳日 時 平成9年(1997)1月14日場 所 法政大学・58年館833教室(3階)田村明教授を送る会・世話人 松下 圭一
- ○先生の奥様からハガキを受け取る 平成10年(1998)7月31日付 (時候ご挨拶略) 先生72歳

主人はお陰様で革命とは思えないように、一月はネパール、三月は西アフリカ、五月はサウジアラビヤ、七月は北スペインと、足をのばしながら、次の著述の想いを練っているようです。本格的な夏

に入りますので、御体をお大切に!

○先生、岡山県津山市へ行かれる 平成11年(1999)8月21日~ 22日 先生73歳 私は仲間と現地でお会いする。

先生からご連絡があり「岡山県津山市へ行くから、来ないか」と言われ、先生と津山で合流しました。先生は、津山市に完成した再開発ビル「ベルフォーレ津山」(「アルネ津山」)を見に行かれました。そのビルの中で先生とお会いしました。それからまた例によって、町並みとかお城などを中心とした地域を歩き回りました。武家屋敷群も一緒に歩きました。津山市は、河童の名所でマンホールにデザインとして使い、銅像などを各所に設置しています。その日は、仲間と共に先生と湯郷温泉に宿をとりました。先生と同じ所で泊まったのは、このときだけです。湯郷温泉は、美作三湯の一つで、湯村温泉、奥津温泉と共に有名です。

翌日は、大原宿・智頭急行線「宮本武蔵駅」・播磨の佐用町平福で土塀のある川並みなどを歩きました。智頭急行線というのは、ちょっと道草になりますが、鳥取県の念願で創られた鉄道会社です。鳥取から姫路までつながっています。また智頭急行は、京都まで特急電車が走っています。何十年も前から鉄道計画があって、財政的に課題がありましたが、やっとできた鉄道です。ところが、完成した途端に存続の危機に見舞われるのです。それは、阪神淡路大震災が起きたからです。開通した直後に、神戸周辺の電車が不通になってしまい、京都まで行くことはできなくなりました。結果的には何とか持ちこたえました。県も地域も、非常に肩入れしましたから。勿論今も走っています。

大原宿は昔の宿場町が残っています。私たちは、まちの中を歩き まわりました。先生は、歴史や文化が残っている場所には、非常に 興味を持たれるのです。本陣周辺を歩き回ったり、街道でのことを いろいろ調べたり、写真に撮ったりされました。

次に智頭急行「宮本武蔵駅」。駅舎周辺には大衆作家・吉川英治の石碑があります。吉川英治は「東の大佛次郎、西の吉川英治」と言われた作家で『宮本武蔵』などを著しました。その著書の中で、武蔵が美作生まれとしたものですから、石碑があり、智頭鉄道の駅まで作られています。武蔵の生まれた地は諸説あるのですが、駅名に使用したことは、ここだけです。早い話が造ったもの勝ちです。宮本武蔵に関係する生家跡とか、いろんな所を整備して、観光に期待をしています。

平福は播州、兵庫県の西端部です。ここにも古いまち並みが残っていて、川を隔てて土塀があって、土塀の美しさが写真になるというので、景観地区に指定されています。先生はここも一所懸命見られました。昔ながらのしょうゆ屋に入り、まち並み保存の資料館へも行きました。

そこから、姫路までお送りするのですが、その道中で三日月町いう所に「光都」があり、立ち寄りました。ここには、8GEVSRという施設があります。光を高速回転させて、分子の構造まで調べることができる施設です。山の中に、できた研究都市です。先生はそこにも興味があり、磯崎新の建築物とか、その他先生のご存知の建築家が作った建物なども含めて、時間の許す限りご案内いたしました。先生は、ご機嫌よくあちらこちらと歩かれました。

○先生からハガキを受け取る 平成12年(2000)1月2日付 先生73歳 2000年が明けました。(中略)昨年は何といっても美作でのムサシの旅はたのしかったです。ムサシ播州説を読ましていただきました。武蔵自身が書いても、吉川英治が書くことによって美作生れに変ってしまうというのは歴史のおもしろいところですね。年末から今日も2月に出す「自治体学入門」の校正でフーフーです。珍らし

く外国へも出かけませんでしたが、5日から短期間東南アジアへ参ります。どうぞ今年も(途中判読できず)お元気で。

○先生と岡山駅周辺で飲む 居酒屋『車屋』(岡山市本町) 平成12年(2000)3月23日 先生73歳

当日午後は地元経済団体の方々を対象にした講演会があり、その後飲もうと先生からお誘いがありました。先生曰く、「姫路から岡山は近いでしょう。」私は?と思いつつ、飛ぶように岡山へ行きました。駅前周辺で居酒屋を探して、入った店でした。日生の肴があるという店でした。そこに姫路のお酒があったので先生と驚きながら、愉しく過ごしました。

○先生からお手紙を受け取る 平成12年(2000)6月19日付け 「全文〕

新緑も日増しに緑の色を深めております。

皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

私は、去る五月三〇日に、日本建築学会から図らずとも「都市づくりの理論及び手法の構築とその実践」により、二〇〇〇年度の大賞を頂きました。純粋の都市分野に対象が与えられましたのは、故高山英華先生以来二二年ぶりのことで、大変に名誉なことです。また、ミレニアムの区切りの年でもあり思いの深いものになりました。その際、さまざまな励ましやお祝いなどを頂きましたことを、ここに厚くお礼申しあげます。

私は、建築学科を卒業したその日から、建築の外へ飛び出した人間です。卒業後の四月からは現職の運輸事務官と東大法学部の現役学生を兼ねるという身分でした。その後も、建築自体を職業にしたことはありません。非常勤では建築学科や都市工学科で教えましたが、三年前まで勤めた法政大学も法学部政治学科です。都市計画へ

の大賞は極めて稀ですし、ほとんど建築学科の大学の教授をしていた方々に与えられています。私はその枠からはみ出しているので、まさか大賞を受けるとは思っても見ませんでした。今回は西遊記の孫悟空のような思いです。悟空がお釈迦様の手から十万里の遠くへ雲で飛んで、柱に自分の名前を大書してきたつもりが、その柱はなんとお釈迦様の指で、その手からは出ていなかったという話があります。私も建築から遠くへと出たつもりでいましたのに、いつのまにか建築の回りを廻り、建築という大きな手の中に捉えられていたという思いです。

若い頃の私は、国家公務員や民間大会社に事務職として勤めました。そのままでいれば一応エラクはしてくれるのでしょうが、それは誰でもできる。折角のただ一度の人生としては、小さくとも自分に与えられた納得できる「天職」を見つけたいと思っていました。今までのは「職場」であっても「職業」とは思えません。もとより特別な才能もない私は何をすべきか悩み、三五歳までと期限を設定しました。やっと決めた仕事が、地域や市民の立場から統合的に地域を考える実践的な「都市づくりプランナー」です。建築も含めそれまで学んだことや経験の全てを生かすことができると思ったからです。固定的な官庁都市計画の枠を超える手法も必要でした。当時はまだこのようなプランナーはほとんど生まれていません。そのように、私が思いの末に選んだ仕事に、出発点だった建築学会から半世紀後に大賞が与えられたことには、なにか不思議なものを感じます。もし、私が建築学科を卒業していなかったら、未だに天職を探せなかったかもしれません。

その後、横浜市という場を与えられ、さまざまな課題に挑戦し、 新しい理念と手法を求め、創造し、実践することができました。アー バンデザインを実践的なものにすることができたのも、建築学科を 卒業していたことが効いています。幸に多くの優秀なスタッフに恵 まれ、その人々が成長していったことが実践を継続的なものにして ゆけました。そうした人々にも、ともに悦んで頂きたいと思ってい ます。

今回の受賞でもう一つ嬉しいことは、ほかの賞ならば先輩の審査 員が後輩を選ぶのが普通ですが、大賞の場合には、若い方々が先輩 を選ぶことになります。私の仕事を評価して下さる次の世代の方々 が評価し、賞が与えられたということです。それは、まだ未熟であっ た「都市づくり」の分野を理解し実践する人々が育ってきたことを 意味します。都市づくりは終わりのない継続的な仕事ですが、私の 仕事をなんらかのかたちで次の世代へと継続し発展させる多くの人々 がいるということは、望外の喜びです。

私ごとですが、今年二月には懸案の『自治体学入門』を岩波書店から刊行できました。「自治体学」を正面から銘打った書物としては最初です。自治体学会も今年十五年目を迎えました。自治体がこれからの人間生活や都市づくりの大きな鍵を握るでしょう。

今年も相変わらず海外各地を廻っています。最近は石油の力で懸命に砂漠と都市の緑化を実行しているアラブ湾岸諸国を訪ねました。訪れた国も100ケ国以上になります。もし健康が許されるならば、二二世紀の都市論、文明論を書いてみたいと思っています。世界の多様な文化の存在は魅力的で、示唆的です。二一世紀始めまでは、二〇世紀の惰性が続きそうですが、二二世紀は全く新しい局面を迎えるでしょう。

まずは、建築学会大賞受賞に際してのお礼とご報告まで。

末筆ながら、併せて皆様方のご健康と御多幸をせつにお祈り申し 上げます。

二〇〇〇年 六月

田村明

追伸 同封にて、学会から送付されました表彰業績のコピイを送らせて頂きます。また、五/八付の神奈川新聞の記事を併せてお送りします。御笑覧下さい。

(直筆追記) 5月末に新幹線で姫路を通過いたしました。皆さんによろしく。

- ○ブックレット《市民の政府論》の送付を受ける ○平成12年 (2000) 8月付け 財団法人横浜市政調査会から田村明理事長の 要請と記載有り
- 一先生、ご来姫 平成13年(2001) 12月12日 『親龍蔵』で仲間と飲む 先生75歳
- 一先生、ご来姫 平成14年(2002)11月18日 『親歳蔵』で仲間と飲む 先生76歳 同日、姫路商工会議所青年部主催の先生による講演会開催

演題は『イギリスに学ぶ~市民が支えるまちづくり』

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成15年(2003)7月(推定) (日付印無) 先生77歳

(時候ご挨拶略)

横浜が水不足に見舞われていること(中略)

主人はこの7月で古希になりますが、不調な心臓をかかえながらも、 こうして一先ず元気にこの年を迎えられましたことを感謝しており ます。

○先生からお手紙を受け取る 平成16年(2004) 12月8日付け 先生78歳 早いもので今年も暮れようとしていますね。(中略)

今年も海外は南インド、アフリカ(ウガンダ、ルワンダ、マラウィ、 など七ケ国)、中央アジア(ウズベキスタン、トルクメニスタン、 カブフスタンなど五ケ国)となり、かわらず回っていますが、国内 はメッキリ減りました。その代りに伊豆のセカンドハウスなどでの んびり温泉につかったりしています。それでも夏に京都に用事があ り、足をのばして淡路島に渡り北淡町の震災記念館で断層の保全さ れている実物を見てきました。姫路の手前の明石までは行ったので すが、また機会がありましたらお目にかかりましょう。東京と横浜 とで「まちづくり塾」、それに「自治体学講座」と月に三回全然別々 のテーマで活動しています。大学の講義は大して準備もしないでやっ たのですが、東京の塾では世界の都市の興亡の話をしていて、準備 がなかなか大変です。そのほか、「自治制度研究会」を月一回やっ たり、「日本の未来を考える会」その他の会で、何かと忙しくして います。いつまで続けられることかは分かりません。頭を使う方は よいのですが体の方はアチコチが痛くて参ります。しかし未来志向 で行きたいものです。

貴君もどうぞお元気で皆様方にもよろしく。

12月8日

田村明

追伸 最近書いたものを少し同封しました。御笑覧下さい。

- ・2004. 9. 14日付 「悲しい大虐殺伝えるルワンダの記念施設|
- ・2004. 11. 2日付 「自立したレソト王国。争っても平和を保つ」
- ・日付なし 「障害者施設を働き甲斐ある場に変えた人」

上記何れも新聞社名なし 田村明(地域政策プランナー、法政大学名誉教授)

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成17年(2005)7月25日 付 先生79歳お誕生日

## (時候ご挨拶略)

主人は、この五月にはイランの世界遺産など訪れ、今はこの伊豆のセカンドハウスで、新しい本にとり組んでおります。今日七月二十五日で満七十九歳になりました。お暑い中、御体お大切に。

- ○先生、ご来姫 平成17年(2005)8月26日 姫路キャッスルホテルにて仲間と飲む
- 〇シンポジウム「日本の未来をつくる会(第2回)〜美しい国をつくる一完全自治の州制とコミュニティの復権」平成17年(2005) 11月16日、岡山県立美術館ホール(岡山市)(主催、特定非営利活動法人「日本の未来をつくる会」)

先生が司会を務められました。

岡山県知事はじめ4人の方がパネリストになって、田村先生が司会をされた会議です。場所は、岡山城のすぐ北側にあります。岡山県知事のお話を聞いていましたら、もし中国地方で道州制が行われたら、広島に拠点が移ると、心配を述べていたメモが残っています。岡山は中国第2の都市と言われています。できれば岡山がイニシアチブを取りたい、そういう思いがあったのかなと思うのです。岡山で開いたというのは、ちょっと不思議なことでした。

先生は司会者ですから、見解を発言することはされませんでした。 只パネラーの方々に発言を求めてゆく進め方に興味を持って聴いていました。当時のメモから先生の司会ぶりをお示ししますと、例えば「地域から元気を出す。自由や自立の発言がありました。他方で、地域の活性化について地域で勝ち取るものだとも言われた。ならばどうする」など積極的にパネラーからの発言を求めているお姿が、そこにありました。

また先生は、ご存じのように、「美しい日本をつくる会」の副理

事長として活動しておられていました。先生の本の中で、新しい「自治州制」ということを述べておられます。ドイツの連邦制などを意識しながら、はっきり「市民政府」という考えを書かれています。今は、都心を移すという話しがありますが、権限そのものを地方へ移してしまえば、その問題はもっと柔らかくなるという考えも示されています。単なる権限委譲ではなく、権限を渡してしまうというのが、ほぼ田村先生の考えだと私は理解しています。それが進めば、副都心構想そのものが不要になる。そういうお考えをお持ちでした。地方にもっと権限を委譲するということではなく、地域自身が頑張らなあかんということ、「市民政府」という考え方は市民が自覚して、自分のまちは自分でつくる、自分で守るという発想がいるというお考えを書いておられます。だから、その延長で、会議を進められたというように思います。この会議は、先生が亡くなられて後、平成27(2015)年9月30日に解散しています。

また『NEWSLETTER自治体学会』NO. 83(2000.5月)には先生の文章で、「憲法調査会と自治体」が掲載されています。「自治体に憲章制定権を認め、自主的な運営を行うようにすべきだし、「財政自主権」を持たせ、過度の中央統制を排除する必要がある。また主権者である国民の権利は、自治の場で最も発揮しやすいから、「住民投票権」や「住民提案権」を認めるべきである。」

「連邦制でさえ「地方公共団体の長を公選とする」という曖昧さ を逆用して連邦制の首長を公選にすればよい。」

私は、自治体学会が創会されて以来、25年以上会員となってきま した。

○先生の著書「まちづくりと景観」を受け取る 平成17年(2005) 12月

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成18年(2006) 1月24日 付 先生79歳

(時候ご挨拶略)

私(先生)は暮に肺炎に冒されましたが何とか平癒しました。

昨年末、まちづくりシリーズ第三作『まちづくりと景観』を岩波 新書として刊行することができました。また五月、十一月には「日 本の未来をつくる会」を東京、岡山で開き、六月は「かながわロー カルマニュフェスト推進委員会」代表として、知事・横浜・川崎市 長などのコーディネーターも務めました。

東京・横浜の「まちづくり塾」「自治体学講座」も毎月開き、今年も続けるつもりです。

海外は、スーダン、エリトリア、コロンビア、エクアドル、イラン、サイパンを訪れました。サイパンからの毎晩の爆撃に怯えていたことや、世界各地の内戦を思うと、現在の平和は恩恵そのものです。

今年は自治体学会創立満二十年。発祥の地横浜で八月に開催される予定で、その神奈川実行委員会委員長を務めております。これからも、心身が許される限り、日本の平和と、未来の自治と「まちづくり」のために、務めを果たせればと祈念しております。

二〇〇六年 寒中

(奥様の添え書き)

肺炎が完治せず困っております。(以下略)

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成18年(2006) 7月31日

先生80歳

(時候ご挨拶略)

主人はこの冬の肺炎の後、間質性肺炎という治療法のない難病の 一つになってしまいましたが、次の本の仕上げにがんばって居ります。

## (以下略)

○先生からハガキを受け取る 平成19年(2007) 1月22日 先生 80歳

(時候ご挨拶略)

昨年始めに、治す方法がないという間質性肺炎と診断されました。 一時は歩行も困難なほどでしたが、何とか七十%ほどに回復したの は感謝です。加えて腎臓結石の衝撃波破砕のために五度の入院。頑 固な石はまだ残っていて、海外旅行はお預けです。

満八十歳の誕生過ぎに『市民の政府論』と『都市プランナー田村明の闘い』を刊行することができました。理論編と実践編です。八月には自治体学会創立満二十年大会を、原点の横浜に帰って開き「市民の政府」をテーマに全大会のコーディネーターを務めました。

毎月定例の横浜・東京の「まちづくり塾」は、今後も許される限 り続けてゆくつもりです。横浜の「自治体学講座」では『首長論』『環 境論』を講義しました。何時まで元気かは分かりませんが、生ある 限りは、都市・自治にかかわりたいと思っています。

目下『二十二世紀論序説』を執筆中。本論は何時になるか不明で すが、現代文明と人間社会が心配です。

皆様方が今年もお元気でお過ごしくださいますように。何処かで お会いすることを楽しみにしております。

二〇〇七年 寒中

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成19年(2007) 7月30日 付 先生81歳

(時候ご挨拶略)

昨年は外国へは一歩も出られなかった主人は、今年はどうしても アウシュビッツを自分の眼で見てくるのだと、ポーランド12日間 の旅に出、無事帰ってまいりました。八月は舞鶴での自治体学会以 外は、伊豆で静養の予定です。(以下略)

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成19年(2007) 12月22日 付 先生81歳

(時候ご挨拶略)

難病の肺炎は治りませんが「まちづくり塾」は毎月続け、次の本も書いて居ります。去年出られなかった海外も七月にはポーランドへ暮れには私も一緒にハワイへ金婚旅行(前倒しで)に行きよい想い出となりました。(以下略)

○先生(名義) からハガキを受け取る 平成20年(2008) 1月18 日付 先生81歳

寒中お見舞い申し上げます

間質性肺炎は相変わらず。しかし、昨年はお預けにしていた海外 旅行に出かけることができました。七月にポーランドを一周、アウ シュビッツに人間の愚行を見届け、世界遺産のワルシャワ、クラクフ、 グダンスクの旧市街地に人間の素晴らしさを見ました。

十一月には金婚前倒しで、久しぶりに家内とハワイ島を一周、真珠湾に日本の降伏文書調印のミズーリ号も訪れました。体当たりした神風特攻機のパイロットを手厚く葬ったキャラハン艦長の行動に感動しました。

定例の横浜・東京の「まちづくり塾」では、改めて人間がなぜ都市を作ってきたかを、原点に返って考えています。『二十二世紀論序説』を昨年始めに共著の中で書きましたが、いずれ本論を書くつもりです。目下は自分史と東京史を背景に、『戦争と平和』を執筆中。健康が許される限り、都市や自治のあり方を考えてゆくつもりです。異なる多様な人間が共存できる都市は、実りある豊かさと、

世界平和の原点です。

今年も皆様方がお元気でお過ごしくださいますように。何処かで お会いすることを楽しみにしております。

二〇〇八年 寒中

田村 明 眞生子

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成20年(2008)7月25日 付 先生82歳お誕生日

(時候ご挨拶略)

一月より体調が悪かったのですが、五月に心臓肥大で水がたまり、 緊急入院いたしました。生命はとりとめましたが、入院三週間で15 キロやせ、今伊豆で静養中です。でも頭はしっかり。六月は「まち づくり塾」の講義もいたしました。(以下略)

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成20年(2008) 12月17日 付 先生82歳

(時候ご挨拶略)

主人は五月の危機を脱し、「まちづくり塾」も再開しました。15 キロもやせて、すっかり"おぢいさん"めきましたが、頭は幸いピンピンです。(以下略)

○出版社から送付された『東京っ子の原風景』を受け取る 平成21 年(2009)年2月20日発行 先生82歳

この本は先生の自叙伝ですが、この中で嬉しいと思った記述があります。私は、猿飛佐助など真田十勇士の研究をしているので、この記述を見つけて喜びました。立川文庫の創始者・立川熊次郎が姫路の生まれだからです(同書78頁)。(文章抜粋)

学校では少年講談というのが流行っていた。一冊ずつ英雄豪傑が出てくる。剣豪物では塚原卜伝、宮本武蔵、荒木又衛門、堀部安兵衛。三十三間堂の通し矢、愛宕山の石段を馬に乗って上がり下りする間垣平九郎、忍者者では猿飛佐助、霧隠才蔵。虚実取り混ぜて何でもある。だがこうした本は、あまり品がよくないと家では嫌われる。友達から借りてきて、電車の中で読む。家では勉強をしているふりをして親が来ると上に教科書を載せてごまかす。一日で返さなければならないから夢中になって読んだ。他の兄弟はこの少年講談の洗礼を受けなかったようだが、私はおかげでずい分雑学的知識が身についた。

○先生の奥様からハガキを受け取る 平成21年(2009) 11月5日 付 先生83歳

(時候ご挨拶略)

「東京っ子(の原風景)」も読んでいただき、また主人が御案内して横浜を歩いていただけたら、どんなによかったでしょう。(中略)「神力」(お酒の銘柄)は食慾の衰えた主人を毎夕励ましてくれています。10月も半月余り入院し、急速に体力が弱っております。(以下略)

○先生(名義) からハガキを受け取る 平成22年(2010) 1月10 日付 先生83歳

寒中お見舞い申し上げます。

長い間私の年間報告にお付き合い頂きありがとうございました。 体調すぐれず、この方式は今年二〇一〇を最後にするつもりです。 この間、講演、シンポ、学会、塾など多くの場を通じて「まちづく り」「自治体」「景観」「都市文明」などについて語りあい、また海 外百三十余国を訪れましたのは感謝です。

懸案の戦中・戦後の東京を生活実態から描いた『東京っ子の原風

景』も二月に出版することが出来ました。一生の仕事に「まちづくり」 を選んだ原風景です。

自覚ある市民が自分たちのものとして「市民の政府」をつくり、 世の中がどう変わろうと生活の基礎にするというのが私の持論です。 それに応ずるクニの具体的なカタチを、「日本の未来をつくる会」 のまとめの本に、「完全自治州制」として昨年出版させて頂きました。 さらに「国と自治」「市民組織と官僚」「母親力」など考えることは 沢山あります。

個々の課題に向かう余裕はありませんが、許されれば、人間がな ぜ集まって住むかの『都市論』と『二二世紀論』は書きたいと思っ ています。世界中の人々が誇りを持ちながら、他人や他国を尊重し あうのが基本です。都市は多様な人々が心温かく生き生きと交流す る場で「まちづくり」はそのためのものです。

皆様方の御健康とお働きを切にお祈りいたします。

二〇一〇年 寒中

○先生、平成22年(2010)1月25日永眠。御年83歳 奥様から電話がある。驚愕、そして落涙。

# 3. 啐啄同時

今まで、先生とお会いでき交流を重ねさせていただいた経過と、 その際に教えていただいた内容などを、ご紹介しました。ここで変 化をもたせて、私の話をさせて戴きます。

私は、姫路市で市役所職員をしてきました。今は定年退職をして「自由人」として行動しています。私が市役所に入りましたのは、昭和50年(1975)です。その頃は姫路市の知名度は全国的に低く、愛媛県にあるのかとか、岡山より西かなど、意外な回答が寄せられ

ていました。また、古代から播磨の国にありましたが、播州といえば赤穂と答えが返ってきたものです。赤穂義士の話が広く日本人の心を捉えていたからです。

姫路市には姫路城があります。姫路のまちは、明治維新後は軍都 として栄え、太平洋戦争時には二度の空襲により壊滅的な打撃を受 けますが、戦後は重化学工業都市として発展してきました。その後 重化学工業の衰退により、市民の間で観光への期待が高まってきま した。姫路城は、その観光の目玉として市民から期待が高まり、平 成5年(1993) 12月10日、日本で初めて姫路城が奈良・法隆寺と 共に世界文化遺産に登録されました。画期的な出来事でした。私は 当時、その世界文化遺産登録への申請に関係していました。それは 姫路市民にとって嬉しいことでした。実は、私は今回の発表会後(横 浜での発表)に、参加された方々と交流会を持ったのですが、その とき参加者のお一人から、文化庁に木造建築に造詣が深い人がおら れ、その方が世界文化遺産への登録に熱心に取り組んでこられたこ とを知りました。一方で市民の熱意があり、他方で応援をする文化 「方の方がいた。これが軌を一にして世界文化遺産への登録に結び付 いたということです。このことを知り、私は改めて喜ばしく思いま した。

また私は、「都市と行政の会」という研究団体に参加していました。この会は、市役所の仲間が自主的に「まちづくり」を研究するため作られたものです。代表者は東博幸さんという方で、機関紙の創刊は、昭和52年(1977)です。お金も持ち寄りで、自分たちで取りあえず研究から始めようということでした。残念なことに、東(あずま)さんは病気のため志半ばで亡くなられました。

私が先生をお訪ねしたときも、その後もずっと研究会仲間と共に 交流を重ねてきました。先生が姫路に来られたときは、急いで声を かけて集まれる人が寄り合いました。こうすることで、誰かが先生 に教えて頂いたことを姫路の地で活かせると考えたからです。現在では、先生を直接知る職員は殆ど退職しています。先生とこの会の仲間とのことで、幾つかの思い出があります。一つ目は先生が初めて姫路へ来られたときのことです。その日は歓迎会で盛り上がり、普段著書を通じて理解してきた「まちづくり」の先生に直接お目にかかりお話を伺う機会を得ました。有り難いことでした。

次には、『自治体の政策形成』(シリーズ自治を創る12・学陽書房・1989年9月10日初版発行)の中で、福祉の職員の文章として姫路のことが掲載されました。嬉しかったことです。

また、先生が姫路に来られたときは、いつも市内の本屋に立ち寄って先生の著書を買い求めました。そしてそれらの本に署名をしてもらい、当日参加できなかった仲間に届けました。先生の著書を通じて教えを理解してもらいたかったからです。これは好評でした。お蔭で私の手元には、先生の署名がある本は、あまりありません。今は、これらの著書を受け取り、また読んだ職員が、自分の置かれた職場で「まちづくり」の実践に取り組んで欲しいと願っています。

○私は先生に教えを戴いてきました。先生はいつも笑顔で接してくださいました。お酒を飲んで笑顔、お話しに夢中になって笑顔、です。姫路は、先生がどこか関西のまちへ出かけられた際に、気軽に立ち寄ろうと思ってくださった場所の一つではないかと思うのです。 只私は、先生がお酒を飲まれたことが、持病の心臓病を悪くされた一因ではないかと申し訳なく思っているのです。

お酒の席で幾つも思い出話を言われました。それを少しご紹介します。

○エジプトで死にそうになられたこと。先生がエジプトへ行かれた ときは暑い季節だったようです。ある観光名所で急に心臓発作が起 きて、ご自分で死を覚悟されたそうです。先生は、ツアーでの行動だっ

たそうですが、幸いにも次に来た団体の方に発見され、病院へ運ばれ一命を取り止められたというお話でした。

○先生は「自分は建築学科も卒業している。そこで一つ作品を作ってみようと考えている。」と言われたことがありました。先生が作られるのはどんな作品か皆、興味津々でした。でも先生は、中々答えようとされませんでした。ここにおられる皆さんは、どうお考えですか。答えは、話の最後に申し上げます。

○法政大学法学部教授にマッカーサーの研究者がいる(袖井林二郎 氏)。この方が姫路へ行きたがっているので、その際は宜しくとの お話を受けた(ご本人の健康状態により実現できなかった)。

# 4.腹中書有

○先生の著書の中に『田村明の闘い』があります。私は、この本を 先生が出版社を通じて送ってくださったとき、一気に読みました。 そしてお礼と感想を急ぎ書いてお送り申し上げました。一番痛快な 本だと思ったこと、この本だけ京都の出版社であることも興味深い ことでした。特に先生が建設省の事務次官と高速道路地下化問題の 最終決着をつけるため、横浜から東京へ出かけるときの記述があり ます。降り積もる雪の中を単身で出発するところは、記憶に残る場 面です。また実名が多く登場しますが、相手はどう思っているかも 興味深いこと、などを申し上げたと思います。

この本は、実に読んで痛快なものです。いっそ演劇にでもしたら、 多くの人から共感を受けるのではないかと思うのです。今年、テレ ビドラマで「半沢直樹」が高視聴率だったようですが、この本の内 容は事実に基づいたものだけに迫力があります。大佛次郎なら、原 作を書いたかもしれないなど、私は一人勝手に空想しています。

(同書からの一部引用例)

- ・「私は、どの地域とつきあうときも、その地域や都市の歴史の概略 を調べた。それは地形や経済などと同様に、地域づくりには欠か せない作業である(P. 54)。
- ・「私はどこの都市の調査に行っても、まずその都市の簡単な歴史から勉強するのだが、一般に市の職員が自分の都市の歴史に関心が無いのには驚いたものだ(P. 268)。
- ・横浜の再生には、こうした歴史を生かしてゆくことが重要だと考えた(P. 269)。

○先生に「姫路のまち」について印象をお聞きしたことがあります。お酒の場での戲言です。先生は「幕の内弁当」のようなまち、と表現されたことがありました。幕の内のように幾つかの仕切りがあり、それぞれ特色のある要素が含まれている、といった説明があった記憶が残っています。私たちは何度も姫路をご案内しました。お城はもちろん、書写山や周辺(「書写の里美術工芸館」を含む)、白浜の「灘のけんか祭り」、山野井町の「姫路文学館」や周辺など。先生は、いつもよく歩かれました。建物本体だけでなく、街路やストリートファニチャー(施設関連構造物)、一つ一つの構造や置かれている位置、人々の動きなどをじっくりと歩きながら、多面的に見ておられました。ときに大きなカメラで記録されていました。

〇先生の著書の中に、姫路市は2回出て来ます。1つは『自治体の 政策形成』です。他の1つは、要綱行政の紹介記事の中で、進事例 として紹介したものです(どの著書の中かは、忘れました)。

○先生は、島根県の横田町(現在は奥出雲町横田町)で何かの審議会委員をしておられました。私も行ったことがありますが、山里深い町です。先生はこの町へも足を運ばれて活躍されておられました。 そして横浜への帰り道に、時折姫路へも立ち寄られました。

○先生は鳥取県智頭町の郵便局長さんについて、活躍ぶりを話され たこともあります。一度訪ねてはどうか、とも言われました。この

方の活躍ぶりは、先生の「まちづくり」シリーズの本の中に登場しています。先生には「まちづくり」三部作というべき本があって、 これがよく売れていたようです。

執筆といえば、先生は原稿を執筆されるときは、世間が静かになる 夜に集中して書かれたと言われました。そのときは、昼と夜が逆転 していたと言われていました。また先生の字は、先生曰く「悪字」 で編集者を困らせたとも、よくいわれていました。

実際、私に戴きましたお手紙などに解り難い字もあります。これは「都市の個性 | を書かれた先生の「個性 | なのでしょう。

〇先生は、「まちづくり」ということばを、初めて使った人だと言われています。

「六大事業を市民に分かりやすく伝える冊子を横浜市から依頼された。(中略)題名をどうするか迷った。いままでの《都市計画》とか《総合計画》では市民になじまないと思った。その結果「都市づくり」と書いて「まちづくり」と読ませた。その少し後になってから《まちづくり》《「街づくり」》《町づくり》という言葉が併用されるようになった。1973年につくった総合計画では、もっとも市民的でハードもソフトも含む《まちづくり》を採用することにした(『田村明の闘い』 P. 60.61).

# 5.本懐

先生は私たちに多くの著書を残してくださいました。これからも 多くの人に読み継がれ、「まちづくり」は様々な地域で進んでいく ことでしょう。先生が見続けてこられた先は「22世紀論序説」で 触れられています。何と先を読む力に溢れた方であったか、今改め てその方の偉大さに思いを馳せています。「市民政府論」で地域の 自立を謳われ、「自治州制」を求められています。今後先生が予想 された幾つかのことが、現実味を帯びてくることでしょう。

先生はまた「まちづくり」の中で、「人」を大切にしてこられました。「まちづくり」というひらがな言葉を最初に使われたのは先生です。その先生は「まち」を建物や構築物中心に考えられるのではなく、「人」が住み易いことが一番大切だと力説しておられます。「人」が住み、時代の変化に対応して「人」が「まち」をつくり続けてゆく大切さを述べられておられます。実際に先生は研究者ではなく、実践者として活躍してこられました。その実績が示すとおり、「まちづくり」の主体は「人」なのです。

# 6.結び

先生は私に寒中見舞いのハガキを何度も送ってくださいました。 その中に、先生が天皇陛下に「まちづくり」を御進講された記述があったと記憶しています。只、そのハガキは見つからないのです。不確かな記憶ですが、そのことに喜んでおられた記憶があります(『東京っ子の原風景』 P. 55に記述があります)。

また、先生は私に「一度僕が横浜を案内しようか」と言ってくださったことがあります。これは、今ではお誘いに乗っておけば良かったと悔やまれます。先生のご案内場面をビデオにでも収めておけば、後に皆様にお伝えできましたのに。

ところで私の息子が、横浜の大学へ行くことが決まったことがあります。このとき下宿先を探し回ったのですが、私が求めた場所は、山の上から「みなとみらい地区」が良く見える所でした。山の上からランドマークタワーなどを見たかったのは、息子より私であったということです。

私はあるとき、先生の著書をパソコンで検索したことがあります。 「日本の古本屋」のホームページで調べてみると、88冊が掲載され

ていました。先生の本は、今も取り扱いが多いということです。次に横浜市立図書館で蔵書等を検索すると蔵書は30冊、雑誌記事では45件を確認できました。それとは別に、同市史編集の部署には、ご遺族から寄贈された資料が数多く残されているとお聞きしています。因みに、姫路市立図書館で蔵書を検索すると、18冊ありました。地方都市としては、多くの書籍を収蔵しています。

今、先生が亡くなられて、改めて先生の偉大さと先見性の高いことを知らされます。これからは先生に続こうとされる方々、研究者や実務家が各地で活躍されていることでしょう。「田村明研究会」も、これらの方々の拠りどころとなり、情報交流の役目を果たして行かれることと存じます。私は、先生に教えを受けた者の一人として、文章を書かせていただくことにしました。姫路という一地方から先生と交流させていただきました、私の記録と記憶です。先生は全国をくまなく歩かれた方ですから、多くの都市で「人」と交流を重ねられたことと思います。できれば、他都市の方のご発言が続くことを願っております。

最後になりましたが、先生がお酒の席上で戯れに発言された「も のづくり」とは、「骨壺」を作ろうと思われたことでした。

























# 有言実行の人・・・田村 明さん

## 宮原宏至

私は2000年に民間の会社を退職するまで、田村明さんを全く存 じあげませんでした。1975年に浦和市より横浜市金沢区に転居し ましたので、途中5年ほど東北地方に転勤しましたが20年間は横浜 市で暮らしていました。横浜市の政治家・役人で印象的でしたのは 飛鳥田市長のみでした。

たまたま2001年に、横浜市主催の10回連続の「まちづくり講座」 が開催され、これに参加させていただき、初めて田村明さんにお会 いしました。

まちづくりには少しは関心がありましたが、今まで自分の仕事の ことしか考えなかったので、田村明さんの印象は大変強烈でした。 横浜市役所の役人でありながら、これほど幅広く、かつ柔軟に対応 された方がおられたとは。

数年後、横浜まちづくり塾のスタート時に、世話人のお話を田村明さんから頂きましたが、定例日が第3木曜日で、この日は私が立ち上げた「関東ふれあいの道」を歩く会の定例日のため、世話人はおろか、雨で歩く会が中止の時しか例会に参加できませんでした。言ってみれば「雨天会員」。

横浜市の歴史は部分的にしか勉強していませんが、六大事業を企画提案し、かつそれを横浜市に入って自ら実行されたのは、すばらしいことです。六大事業そのものが、横浜市の計画で前にも後にもない総合的なスケールの大きい計画です。仮に計画ができても、これを展開するためには想像を絶する障害が待ち受けています。これをいろいろな角度から攻めて実現させる手腕はいくら飛鳥田市長の強力なバックアップがあったとはいえ、田村明さんの功績は大と言

わざるを得ません。私が想像するに、田村明さんは相手を説得する 特別な能力を持ち合わせておられたと推測されます。

このように見てみると、田村明さんは極めて稀な能力とそれを旨く生かして業績を残された方、すなわち一稀有な人―、有言実行の人であったと私は思います。

# 対 話

# 田村千尋

田村明が他界し、2020年1月25日で十年になる。私に80年間、 沢山の想い出を残してくれた。もう一人の兄、田村義也は直観の人 で、合理性を重視した明とは対比的、私はこの二人の会話を聴くの が好きだった。義也邸には達筆な父の書で「観よ、はらから相睦て 共にをるは、いかに善く、いかに楽しきかな:詩篇133-1」が部屋 の入り口のドア―にかけてあった。

# 1.田村義也の履歴

# 1.1 誕生から小学生まで:

田村義也は、関東大震災の年、発生の5か月前、1923年(大正 12)4月5日、東京の信濃町の慶応病院で生まれた。両親は内村鑑 三の聖書集会に出席し、人生の希望を聖書に見出していた。旧約聖



女性はまだ皆和服の時代、この伯母の家は全員、洋服姿、家の中も 靴ですっかり洋式だった。義也の小学校は近くの青山師範付属小学 校で、すでに長男、忠幸が前年、入学しており、義也も追いかけて 入学することになった。この時、信伯母が義也をしばらく預かった。 信伯母の養子という考えもあったようだが実際は半年ほどで帰って きた。扱いなれない男の子に手を焼いたのだろう。だが義也にして みれば貴重な経験をしたわけだ。なにしろ、当時、世界は閉ざされ ていて異なる言語の存在自体、不思議な時代だったのである。そう いえば義也の英語はどこか垢抜けした発音で、あいまい母音やLR の発音がきれいだった。

小学校は彼にとって厳しい所だった。担任は沼田訓導、学校には 六年間、同じ先生と言う原則があった。小学二年になると後ろの席 に「目安箱」のようなものがおかれ、「こうあってほしい、こうし てほしいこと、好きなこと を書きなさいといわれた。義也はそこ に「先生、キリスト教になってください」と書いて投稿したもので ある\*。「田村君がこんな手紙を入れてたよ。先生はキリスト教な んか大嫌いだから、なるわけなんかないのにね」と先生から満座の 前で嘲笑をうけた。後に大政翼賛会に行ってしまうような人だった から無理もない、ただ、6年時間この先生にひどく虐められた。内 申書も悪かったのだろう、旧制中学の受験は悉く落ち、最後は無試 験で募集した日本中学に入学した。ここは国粋主義者、杉浦重剛の 教育拠点だったのである。義也は入学すると一年の一学期、学年で 二番と言う、ずば抜けた成績を出した。たまたま麻布中学に欠員の 応募があると聞き、両親は願いを込めて義也を受験させると見事に 合格してくれた。こうして2学期から再び忠幸と一年違いで同じ中 学生活が始まったのである。ここは明と同じ意だが満州事変や大恐 慌、226事件など、あらゆる意味で日本が軍国主義を進行中させて いた時代に、青少年期を過ごした。

家庭新聞の創刊日、千尋は小学2年生の時、義也のこういう発想に驚かされた。忠幸、明そして千尋までこぞって兵頭家(いとこ、同い年の従兄弟が四人そろい非常に仲が良かった)たちとニュースの交換が始まったが殆どみな十数回でとん挫した。家庭新聞の内容は初めの頃、家庭内の諸々の事象に目を向けようと努力していたが、なかなか記事は集まらなかった。そのなかで父の援助は大きかった。二年後、第二次世界大戦が始まり、急速に新聞情報から得た戦局と時事問題に目が向けるようになった。

#### 1.2 旧制麻布中学校:

中学生時代は暗室にこもり写真の焼き付け現像をしたり、庭先に 暗室を作りサボテンをそだてたり、なぜか彼にはそんな趣味の自由 が与えられていた。最もユニークな仕事は、「家庭新聞」の発行、 主筆、田村義也である。1938年10月17日から戦後の1946年5月 20日まで、900号あまりが発行された。徴兵時代を除き、通算する と毎週、二回の割合で発行していたことになる。ある時には、毎日 発行ということもあった。用紙は、父親の会社で不要になった印刷 物の裏面を使っていた。内容は、日常の事なんでもありで茶の間の 連絡版にピン付けされていた。この時代のニュース源は殆ど新聞で 時局もの、小評論など、すでに一人前のジャーナリスト気分だった。 しかし、義也はこの家庭新聞でも既に愛国青少年的な表現も多く、 後の明とは対比的である。そしてとうとう小学校の沼田教諭の意思 が伝わったのか、どこか純粋な愛国者の様相も見せる程になってい た。いずれにしろ、この新聞、兵役時代の休刊を除くと、だいたい 一年百号ほど、週に2~3報ほどになる。兵役期間の休刊は別にし て除隊後も書き始め継続の価値を知っている人だった。敬服のみで ある。

## 1.3.大学と兵役:

このあと旧制山形高校を受けるが失敗、結局、慶応大学の予科に 進学した。だが、その年、学徒動員が発令され入隊、兵役についた ことで内心の苦痛が伝わる文を兵役時代の日記が語っている。当初 の戦況は連戦連勝と派手な勝利気分に踊らされ青少年たちもいたが、 隠れたところで兵役拒否の者もいた。入隊後、とうとう幹部候補生、 即ちプロの軍人になる道を選んだのである。兵営で母にその事を伝 えていた時、千尋も同席、そこには涙を溢れさせる無言の母の顔が あった。その幹部候補生コースは自爆型の人間魚雷「回天」(周南 市に記念館)の自爆要員だったことが後になってわかった。10枚ほ どの葉書が義也から発信されている。西宮にあった陸軍の船舶兵部 隊で潜航艇の生産ができず、8月15日を迎え死をまぬがれた。軍人 になり将官を目指した彼が敗戦で自分の立ち位置を失う、家に帰り、 どれほどの葛藤があったか計り知れぬ。しかし一か月後、彼がとっ た行動は兵役につく時の悩みを解消術と同じ「筆の力」だった。家 庭新聞の復刻版に素直に自分の敗戦将校の立場であったことを文章 にしている。敗戦の現状を認め、必然的に過去の自己否定から始め たのだった。食料の逼迫状況は日本全体が何をどうしたらよいのか 分からないという状態が続いた。終戦尉官の恩給が学費になり義也 は慶応大学に復学、卒業した。帰還した義也の整理はどこから始め たのだろう。もう一度、資本論を読み直し、千尋を生徒にして何回 か講義を聞かされたことがある。部屋はごちゃごちゃしていたがそ の書籍類は大塚久夫や丸山真男など、それまでの国家権力に最も冷 静な立場で学問をしていた常識人の立場に回帰していった。こうし て勉学とアルバイトの毎日を過ごし大学を卒業する。就職は三菱電 機と岩波書店に合格し、彼の選択は岩波だった。父親は非常に喜ん だ。この選択はその後の義也を本来、父や母が願っていた道を進む 第一歩になったのである。

●今日は少し興奮してゐたかもしれぬ。神経の高ぶの今日は少し興奮してゐたかもしれぬ。神経の高ぶのた、なくなってゐたのではないかと思ふ。
●井荻に居住し、軍人に対し、そして以前持ってゐた様な感情で自己(?)批判をする様になったのではないかと思ふ。
●和が兄弟よ、なんなってみたのではないかと思ふ。
●日本人の死、いつになっても亀井勝一郎の若い、いのちのあふれるやうな文章をよむと(それがたいな字の羅列ではないことだ、生きてる、呼吸してゐる)新しい感激と刺激。純粋に対する情熱、それがたいな字の羅列ではないことだ、生きてる、呼吸してゐる)新しい感激と刺激。純粋に対する情熱、それがたいなが容著書をもたせてゆくものなのであろうか、だん落着書をもたせてゆくものなのであろうか、だん落着きをもたせてゆくものなのであろうか、だん落着きをもたせてゆくものなのであろうか、がのちのあふれるやうな文章をよむと(それがたばかり、近さまされる。
●表天の水の面にゆらゆらする薄日の影のやうに、ものうく明るい考えが胸にゆらぐ。
ものうく明るい考えが胸にゆらぐ。
く肌触りの柔らかい闇がにわかに、、、

▲入隊中のメモ帳日記である。文は極端に抽象化されている。恐らく、検閲された時の用意だろう。内容は自己批判でも、勿論、体制批判でもない。自分を納得させるような文意が伝わってくる。文中、亀井勝一郎の文に生きてる、呼吸している、の深意は軍隊生活を「純粋」という言葉で表現し、精神的な回避行動とも読める。またヤコブ書は母親が「お守り」と記した袋を作り新約聖書をしのばせたものからだろう。後、「お守り」は検閲され没収されたと聞く。「余は如何にして基督信徒となりしか」は内村鑑三著である。最後の二点は詩の形をとっているようでもあるが、内容からは一種の錯乱状態であることを表現しているのであろう。もっとも本人は実は極めて冷静であったとも解釈され、一種のかけひきだが裏を返せば生への強い憧れなのではないだろうか。

能は還ってきた。難という感慨であろう。」そして 大きのには慰安が生ずる。それが作られたものが は虚無(ニヒル)に向かって急転直下してゆかんと する己の気持ちを何としょう。希望のない混乱の でなく俺は密鉱炉の中に投げ込まれたのだ。 とき、俺には慰安が生ずる。それが作られたものが はたことを手を動かす事によって文字を為しゆく とき、俺には慰安が生ずる。それが作られたものが にたことを手を動かす事によって文字を為しゆく とき、俺には慰安が生ずる。それが作られたものが にたことを手を動かす事によって文字を為しゆく とき、俺には慰安が生ずる。それが作られたものが とき、他には慰安が生ずる。それが作られたものが とき、他には慰安が生ずる。それが作られたものが とき、他には慰安が生ずる。それが作られたものが とき、他には慰安が生ずる。それが作られたものが とき、他は選ってきた。難という感慨であろう。」そして とき、他は また立ちあがれそうにもない。だが思索し、且つ感 とき、他は また立ちあがれそうにもない。だが思索し、且つ感 とき、他は また立ちあがれそうにもない。だが思索し、自つ感 とき、他は また立ちあがれる。 とき、他は また立ちあがれる。 とき、他は また立ちのへ何らかの方向を与えて呉れれば幸いと とき、他は とき、他は とき、他は とき、他は とき、他は また立ちの、この新聞を五〇〇号から発足せしめる事と

▲中学三年の時、家庭新聞を発刊、戦時体制に向かう日本の立場を踏襲した編集方針だった。残念ながら両親の心の声は聞かれない。知らないまに沼田訓導の言うとおりの軍国少年になっていたのである。召集令状がおりるまで家庭新聞は継続、そうして帰還の第一声がこれである。いみじくも義也が小1の時からなにかと皇国思想のバクテリアにサラされ、そのまま軍人になる道に入ってしまっていたとみえる。敗戦の事実から改めてこの後どのような変遷をたどるのか、時間の経緯をたどって、ものの見方が次第に変わり生涯の仕事は本作りの道に進んでいた

#### 1.4 岩波書店の編集者:

174

入社して8年目の1956年から岩波新書の青版を担当し、1971年まで43冊の新書を世に送った。多くの文化人との交流が義也の最大の財産であろう。編集者として彼の仕事を確立したのは二年目、坂口謹一郎(農芸化学者(1967文化勲章受賞)の「日本の酒」、「世界の酒」を纏めた仕事だったという。最初、お家を訪れると先生か

ら「私は研究者だ、紀行文のようなものは書くべきでない、と自分 に言い聞かせている。それに時間もない」と断られた。それでも何 度も何度も訪問し、最後に「それならあなたがやりたいようにやり なさい と言って自分の研究室に行ってしまう、そういう扱いだった。 それから実質、先生の意向に沿い、信頼を獲得するまでの時間はす さまじかった。こうして坂口謹一郎を研究者から文化人に引きずり 込んだのは義也だったといえよう。後に雑誌「世界」に移ってから も親交が続き、二編の酷のあるエピソードを起草頂いたという。「君 知るや銘酒泡盛」の一節も泡盛を飲みながらの先生との合作のよう な意味合いのことが記されている。そして、ある日、突然、大島久 美子との結婚が発表された。1967年5月5日結婚式、既に父は世を 去っていたが母は健在だった。久美子は田村家の母の思考と行動力 に共感し、約一年間、母の所で生活し、田村忠子風を身につける努 力をした。二人の弟から母、忠子を最高に理解するお嫁さん、と 位置づけられ、ある意味での羨望だった。義也がこの結婚で得たも のはこの上なく大きい。それまで「つむじまがり」、「ストイック」 といった風情があったのが、みるみるそんな感じが消え失せ、寛容 で物腰の柔らかな、どこか「はにかみ屋」の義也が帰ってきたのだった。

「のの字物語」の「まえがき」から

一冊の書物を企画して、著者に依頼する。さまざまな経緯があって、ようやく原稿が完成する……。こんどは、その内容にふさわしい 「意匠」を着せること、つまり「装丁・造本」が終着点としての仕事になってくる。

モノを書き、著作を活字化して世に問うということは、骨身を削るようなきびしい作業だ。ある種の錯乱におちいったとしても不思

議はないほど、それは極度の集中力を必要とする。その全過程にかかわってというか、ある距離をおいて介在して、全体を按配するのが編集者の仕事である。もとより編集者は表に出るべきではないから、いわゆる「黒衣」のごとく、「縁の下の力持ち」として、立ち回る。したがって、注意深い編集者がいないと、完壁な本はなかなか生まれない、といってもいい。

云々

1995年12月 田村義也

1.5 装丁家:

「本来、編集者はみだりに本を書くべきではない」と前置きしながら「のの字物語」なる一冊を世に送った。言わば「本づくりの総仕上げ」のあり様を自分の事柄で纏めたものであり、本に込められた愛情であろう。人が考えや思いを文字にし、労働者は活字を一つ一つ組んで印刷して仕上げる。その一体感まで伝えたかったと理解する。どこか棟方志功を感じさせるような作風だが、生涯で1400冊ほど、人様の本の装丁、本の顔を作り続けた。内田百聞の66冊、本多勝一の63冊、安岡章太郎の36冊は圧倒的に多い。金石範、羽仁五郎、鶴見俊輔、大江健三郎、宮尾登美子、坂口謹一郎、鎌田慧、岡部伊都子、石牟礼道子など文化人の幅は広く、ご交際頂いた。

# 2. 田村明の履歴

176

#### 2.1 誕生から小学生まで:

田村明の誕生は1926年7月25日、父はかねてから宏大な宇宙の 仕組みに興味を抱いていた。とりわけ1910年ハレー彗星が地球に 接近、それを見てから宇宙の広さに興味を広げ、三男坊に「宇宙太」と名付けたいと思った。母は自分の幼少期を思い出し、「周辺に虐められる」と猛反対、ならば、と「日月太」で「ウチュウタ」と父の再提案も母は拒否、結局、「日月」から「明」になり読みも普通



の「アキラ」になったとの話だ。一般には明治天皇から名前をとる人が多い時代だったが彼の場合は宇宙からきているのである。この年の暮れ昭和元号が始まった。その昭和という時代をどう見るか、日本が日清、日露の戦争で勝利し軍人達が次第に国政にも口をだすようになった。1929年の世界恐慌のあおりを受け日本は財政のひっ迫、満州事変、クーデタ226事件と続く、既に、欧米は略奪的な植民地主義に反省が始まっていたが後進の日本はその権益を奪取せよという民意造りに策動した。国策は皇国史観を前面に出し一気に軍国主義万歳の体制が始まったのである。そのことは同時に民需圧迫と欧米排他の流れになり、父の仕事のNCRは低迷し家計は厳しかった。母はそのためには自分も働き家計を支えるべきだと考え幼稚園の保母を目指すこととしたのである。千尋が誕生し一旦手が離れ、

シンちゃん(父方の姪、16歳の時わが家に来た。終生、田村家の為に尽くした。千尋にとっては第二の母親である)の手助けがあって西荻窪の玉成保母養成所に通い、免状を取得すべく勉強に入った。母に言わせると「明は幼いころから家の状況がわかっていたのか、欲しいものをねだる」事をしない子で助かったという。小学校は青山師範付属小学校で成績は何時も中の上だったようだ。押し付けられて勉強しても本番で実力が出せない同級生の話をし、遊びながら勉強するのがいいという話を笑い話のようにした。

この写真は第二次世界大戦が始まった年、季節はその寸前の秋である。明に寄り添う千尋は手を背の後ろに回し、明はそれを抱え、お互いの距離は近い。明だけが真正面のカメラを見て微笑みがあり、千尋も白い歯を見せている。この時、兄弟4人で写真を撮る事が嬉しかった記憶がある。しかし、せまりくる兵役や不安な時代を感じているのだろう。忠幸(左端)は後ろに手を組み、下方の一点を見て暗い。義也(右端)も表情は暗く、態度が微妙だが、弟たちを見守る長男の様な雰囲気もあるだろうか。後ろの欅は隣にもう一本あり、この周辺の象徴でもあった。柿の木坂のこの家は奇妙な建築だった。家の風格に似合わないおよそ8畳程のバルコニーがあった。作りが悪く、雨漏りがひどくなったが戦時中故、5年間修理も出来なかった。

# 2.2 府立一中(現日比谷高校):

178

この時代、母方の親戚同志の交流は非常に密で、特に「兵頭家」とは、下の4人が全部、男で同い年、府立一中に入ったことで親戚中からすっかり一目置かれる存在になった。中学に入って一年のとき数学が落第点、それまでなら叱り飛ばす父親が静かに「この夏休みは研数学館に通え」と指示した。教え方が上手だったのだろう、

急に数学のコツが分かったような気がしたと記す。その結果、2学年であっという間にトップクラスに入り、全体に成績があがった。彼は努力の効果を最大限に発揮するため「80点主義」を進めた結果、全体が上がるようになった勉強が楽しくなったという。明は3年生になり成果が上がったが突然、体調が崩れる。微熱が続き医者に行くと、肺逡巡という診断、母は仰天した。正岡子規や堀辰雄など著名人が結核に襲われ、多くの青年たちをむしばむ最大の病魔として恐れられていたのである。母親は当時、知られていた最大限の療養法、即ち新鮮な空気と栄養補給だったのである。そして母親は夏休みに明を連れて新鹿沢の温泉宿に行く(転地療法)、家では一番温かい南側の最高の一人部屋を与える。ともかく、子供達への対応が激変、何もわからない小学生の千尋には理解不能な突然の母の行動にひどく寂しい思いをさせられたのである。だが、これが功を奏したのか明は病が回復、三学年は休学したが、飛び級の4年修了で旧制静岡高校に入学した。

一方、世界の趨勢はひどいことになって行った。日本の植民地政策が進行し中国への越境、満州帝国樹立など、さらに欧州では1939年、ナチスドイツによるポーランド占領、英仏との戦いが進み、明、18歳の1941年12月8日、ついに第二次世界大戦が勃発した。緒戦の戦果を朗々と歌い上げ、翌年、6月に殆ど原住民しかいないアッツ島を占領し、成果を上げたとした。1942年4月18日、米国はB25爆撃機による日本全土の爆撃を受けた。東京の上空に飛行してきたB25の回りを日本の戦闘機がクルクルと追尾、邀撃したが何も起こらず悠々と飛び去るのを見た。だが、その年、ミッドウェイ海戦、ガダルカナル島の闘いで兵士、武器を失い、1943年にはアッツ島も奪還されドイツも降伏、最後は広島、長崎の原爆を浴びて敗戦が決定的となった。

#### 2.3 旧制高校と大学:

180

戦争は終わったが軍国精神そのままの旧制高校の職員達には自治 という概念はなく、気にいった学生だけを寮に入れた。翌年、GHQ の指示などがあって1946年、やっと寮生活に自治が始まる。嘗て バンカラにあこがれていた若者たちは思い出すように新時代を模索 した。寮生の創意で演劇をやることになり、周辺の住民を招いて観 劇の対抗戦をした。明は率先して演出をやり、自分のグループを優 勝に導いたという。演出の面白さを発見し、この世界でもやって行 けるのではないか、そんな希望を抱いたりしたと話す。だが、「新円」 発行など日本の経済は瀕死の状態で食料もおぼつかず、餓死者もち らほら、「飯が食える」が近々の問題であった。ララ物資(北米の 飢餓キリスト教支援団体)によってこの窮地が救われた。明の成績 は上位だったので東大を受け、工学部の中で文系に近い建築学科を 選んだ。思えば父方の祖父は村上の宮大工、知らないうちに繋がる ものがあったかもしれない。初日、工学部の建物に近づくと男性の コーラスの歌声、大学はハイカラで文化的雰囲気だった事に希望を 感じた。母から「コ―リューブンゲン」をもらい独学で楽譜が読め るようになった。さらに、あまり得意でなかった絵画も大学の授業 で遠近法など学理的な理解が進むと急速に脳内が整理されたのか、 さらっとした母親譲りの絵が描けるようになり、後に亡くなるまで 世界134か国をめぐり、沢山のスケッチを残した。卒業研究の指導 教官は丹下健三助教授、論文は「大都市地域構造の変動に関する研 究| であり、人々の暮らしやその動きを考えていた。大学を卒業し 運輸省につとめる傍ら、再度、東大法学部を受験、さらに公務員試 験を受け大蔵省、農林省、労働省を覗いた。どこもひどい官僚機構 のタテワリ構造で、この時、人間が作りたがる「組織構造の根源的 な問題 に着目したくなった。民間ではどうなっているのだろうか、 さらに歴史的そのもの、あるいは風土といった所に興味をもち、大 阪の日本生命に入社した。そこに八年務めた明の感想は民間の大会 社は官僚よりも官僚的だったという。

#### 2.4 社会人:

仕事は不動産部、周辺は未経験者ばかりで既に新入社員の方が知識豊富という逆転現象があり本人も楽な仕事をさばいて過ごしたという。そして高度成長期における不動産の売り買いをした事が貴重な経験になったことは間違いない。また不動産鑑定士の制度が始まり、その第一号をとったというのが自慢だった。試験問題を出す側も手探り状態で、自分だったらこんな試験をだすな、と思う問題が次から次へと出たという。だが、この土地売買をライフワークにする気にはなれなかった。悩みぬいた挙句、建築の丹下研究室を訪れるとかねてから親交のあった浅田孝に声をかけられ、結局、彼が主催する環境開発センターに転職することになった。今度は最小の会社に就職、そこにタイミングよく飛鳥田一雄横浜市長から戦後荒廃した「横浜のまちの再開発」の要望があり、これに応えて「六大事業」を策定、提案する流れになったのである。

# 3.対話:

父が亡くなり、それまで通っていた矢内原忠雄の聖書集会も先生が亡くなられて解散した。母親の指示で聖書を読む会を始めることになった。お祈りをし、聖書を輪読し、交代でいろいろ調べて解説する、讃美歌を歌う。一か月一回の集会だった。全員で食事をした後、一呼吸すると義也、明、千尋のメンバーは毎回、義也宅で2次会を持った。当時まだ、安保の問題が激しく社会を揺さぶり、高度経済成長から公害問題へ、或いは三全総のような国土開発の行方も話題だった。勿論、それぞれ自分たちの仕事上で起きたことから派

生する話題もあるが厳しい議論にはならず、対話を楽しんだという ことである。この時代は義也、明そして千尋ともに一番、充実して いた時間だった。

1967年、岩波の雑誌「文学」の編集長だった義也が、雑誌「世界」 の編集部も兼務するよう要請された。後に岩波の社長になる安江良 介は美濃部都政が発足したとき都知事の特別秘書として助ける様、 要望され岩波はこれを受け入れた事に始まる。結果として手薄にな る「世界」の編集部を補強する為、義也に援助が要請された。当初 は「我その任に耐ええない」と断ったが、結局、受けざるを得なく なったという。その二年後の1969年、3月号で大内兵衛が東大を特 殊部落という表現を使ったことで部落解放同盟から強硬な抗議が入 り、結局、雑誌3月号を廃刊した。義也は編集者の配慮不足として 岩波書店からのわび状を持って大内家を訪れた。大内兵衛は、もと もと、自分の思考的配慮不足が原因で岩波に迷惑をかけた、と主張、 社会通念のありように話が進んだという。この事件で義也は辞表を もって社長に謝罪したが却下された。所で、久美子の話だが、当時、 熊本に在住し、東京に出て来て勉強したいと願った。母親が縁戚の 大内家に頼み、高校時代(新宿高校)は大内家から通ったという。 久美子は初めて他人の家での経験になるが家の中のあちこちに活字 ばかりの雑誌「世界」が置いてあり、どういうお家なのかと思った という。そして、すっかりおばあちゃまに可愛がられて勉強できた という。そのようなわけで久美子は義也と一緒に5か月の赤ん坊(義 民)をだいて大内家を訪れ、車から降りずに待機した。義也の「詫び」 が済んだ後、久美子は義民を大内家のぢぢ、ばばに初対面の挨拶を 果たすことが出来たという。それにしても久美子が大内兵衛との縁 戚関係の話に明も千尋もびっくりしたことだった。

これが解決した矢先、1970年11月、三島由紀夫が「自衛隊の決起」 を促して市ヶ谷の自衛隊総監部で自殺という事件を発生させた。義 也は雑誌「文学」及び「世界」の編集長だった。三島は強烈な皇国 思想で知られていたが、岩波との交流は少なかった。そして、この 事件を黙殺するという決断をし、今回も辞表を胸に社長に報告に行っ たが辞表は却下された。義也は三島由紀夫と少なからず交流があり、 よく酒席を共にした。ただ、後半にジェンダーの問題で相いれず、 やや、距離を置くようになった、そんな時この事件になったという。 結局、義也の三島評は「面白い表現をあみだしたが、耽美的で極端 に自己中心的、結局、彼は精神病、決起して何をなせ、と叫ぶのか 全く見えない」だった。明は付け加えるように「一人芝居、一種の 自己顕示欲だけ、最後の腹切りは全三島作品の最後のどぎついレト リック」と評した。私は「天才と称される芸術家に、才能を出し切 ると井戸が枯れるように病気や自殺でこの世を去った人が多いね」 と付け加えた。

明が横浜市に就職した頃は全く寡黙になってしまった。当然だろう。なんと言っても初めが大切だ。全てのエネルギーをここにかけていた。ともかく「六大事業」のお題目だけでは動かない。まして新しい体制に新しいやり方が求める以上、なんとしても信頼関係が重要である。市庁に来て最初に市長と話しあったのが現在、進行している「関内駅前付近の『高架高速道路』を何とか地下化出来ないか、だった。明も景観上からみても地上占有率からみても不適と判断、最大限の努力で建設省に立ち向かった。庁内でそれまで進めてきた流れを変えることになるが努力の甲斐あって変更が認められた。この時から寡黙を続けていた明はやっと口を開くようになったのである。そして「この仕事の後は庁内の人々の僕への目つきがガラッと変ったょ」という。義也は「よくやったな、仕事場はテリトリーと名誉が先行するからな」。その後、しばらく自治体の活動が活性化されたのは間違いない。

三菱重工、国鉄(当時)、日本鋼管の移設問題は六大事業の最も

難航を予想される事業だった。日本の最大規模の企業との交渉事で あり、それぞれ一筋縄ではいかない彼らなりの歴史と政治背景を含 んでいたからである。不動産の取り扱いに十分な経験があった明も、 その覚悟の程が知れる嘗てやったことのない規模であった。それで も三菱重工は時間を追って交渉の場が整えられたが国鉄(JR)の横 浜新貨物線問題は住民への相談なく一方的に貨物線を住宅専用地に 建設計画を進めようとして住民の反発を招いた。横浜は市民運動の まちとして飛鳥田市政を打ち出したこともあり極めて難しい行動が 要求された。明はこれに直接行政側の立場で対峙することはしなかっ た。この微妙な立場に立たされたという話をすると、義也は「安保 条約の1956年の時、どこにいたのか」ときいた。「大阪。組合が別 で御用組合みたいなものだから」、義也が「そうか、組合運動しないで、 そのまま偉くなったわけだしというと、明は「まあ纏めちゃうとそ うかもしれないしとなった。義也が「一度は組合活動を実感してほ しかったな、若いうちに一緒に怒ったり、泣いたりして、その経験 なしに行政をやると奥行きのない判断になっちゃうのではないか、 ということなんだが」と言った。明が応えないのでさらに「明はやっ ぱり東京大学だな、上から目線で物を言う癖がついてしまっている。 もう一つ弱者の立場にそった表現を学んでほしいという意味でね」 と付け加えた、この時ばかりは明も多少の不満があったようだが結 局も言わなかった。

少し遡るが、1967年の正月、千尋はアメリカ、イリノイ大学への留学を終えて帰国した。1962年から三共研究所の「ふぐ毒研究」で世界の化学者たちと競い、その化学構造を決定することが出来て1964年、京都で開かれた国際天然物会議に発表することが出来たのである。会社はその栄誉に2年間のポストドックの研究生活を供与したともいえる。まだ、1ドル360円の時代だったし、羽田の空港で恥ずかしながら当時、「万歳歓呼」での出発だった。さてかの

184

地は遠い国、どこまで行ってもトウモロコシ畑という大地の広さ、豊かさをしみじみ味わった。こうして日本に帰国してみると別の国のように発展中のエネルギーを感じたのである。兄達への報告はそんな感覚を交えながら日常の生活や食事、買い物の話をした。義也が「2年間の外国生活の話はよくわかった、誠に羨ましい、前に聞いたが千尋の仕事の話は外国語を聞いているのと同じでサッパリだったが」、とコメントした。



丁度、千尋が帰国したころは車と工場からの公害が激しくなっていた時で丘の上の我が家から鶴見、川崎方面の夕暮れ時は薄黄色の 靄がかかったような毎日になっていた。地方でも産業の発展と公害



でメチル水銀やカドミューム、酸 化窒素、亜硫酸ガスなど多岐にわ たり、それに加えて車からの鉛、 一酸化炭素などがあふれ、明治以 来の産業優先の認識はいまだに変 わらず、被害の認定が遅れて地域 の大問題となっていた。ともかく

国の公害への対応は全て鈍く、さらに法令の整備は遅れていた。明が横浜市に入るとこの問題を喫緊の課題として考え横浜市が市民代表の立場で主要企業と公害防止協定を締結すると、やがてこれが全国自治体にも普及していった。1970年公害国会が開かれ公害法が制定されると、さらに環境庁が発足したのである。この自治体が先行した意義は非常に高く、国の地方自治体への認識が次第に変わるきっかけになったと考えられる。

1972から1995年にかけて恐ろしい事件が二つ起きた。「あさま山荘事件」と「オウム真理教事件」だ。いずれも人間集団の負の側

面である。この二つの事件、動機には相違があるが集団運動の動きは極めて類似した流れであった。人間が腕力、権力、権威に対しどう向き合うか、人間が、いたわり、なぐさめ、手あて、を受けた時どう感じるか、取り立てた会話を思い出せないが「支配」「欲望」「制裁」「制御」「排除」「祈る」、「神経毒」そんな単語が流れていた。三人は結局、最終的には「法の裁きを受ける、現行の仕組みしかない」という結論に達した。だが、死刑制度には三人とも反対だった。

1980年になっていたか、義也が福島県の仁井田本家の純米酒「田村」を出してきて「まずは味わえ」という。「すっきり」という表現が似合う吟醸の味わいだった。義也がその一升瓶の表をデザインしたという。田村神社全景を緑の背景に明朝体の「田村」の文字が「すっきり」おさまり、良い感じだ。明はしきりにうなずいて「ラベルと味がこんなに近く感じた酒は初めてだ」と応じた。その評価を義也はとても喜んで実は同じ明朝体でも出版社によって随分感じが異なるのだ、という話が始まった。義也が「酒文化研究会」の雑誌の創刊からかかわったことで仁井田本家十八代、仁井田穏彦氏と接する機会があり、装丁家として名が売れ始めたころでこの話が実現した。

一方、明がはじめてヨーロッパを訪れた時、チェコのプラーハで 広場や道路の模様に注目、機械的な案内行為ではなく、マチを歩い ているだけで楽しくなるような品のいい仕掛け、そうした綺麗さを 感じた。あれから5年以上たったが自分がマチのプランナーとして 横浜のマチを歩いた時、ふっとあの感覚を思い出した。絵タイル、サインポールの発想はそこが原点だ、というと、義也は「とても面 白い話だ、だが文化の継承という点で、この先、どれだけの人々が この真意を繋いでくれるか、だな、一種の社会実験なんだろうかね?」 と問われる形の意見に明は一瞬、沈黙した。おもむろに「まあ、そ ういうことだね」と、いつもと違う義也の評論的な質問に明はハッ

とした様子だった。

義也は雑誌「世界」の編集長になり心がけとして自分なりのテーマを持ちたかったのだろう。過去に自分が経験した「運命的に弱い立場に置かれたり、追い落とされたりした人達」に目を向けたい。そういう事例の話だけでも集めてみたい、という考えを向けたが明は行政側には強い守秘義務があり、関係書類を見ること自体が難しい、犯罪行為が拘わり警察側からの要求があれば一部開示はあるだろうが、となって殆ど駄目だ、と答えた。義也もこの展開はあきらめたようだった。

# 4. 義也を送る俳句と和歌

明が思う義也への慕情は久美子に託した俳句と和歌に込められている。今、明の心は宇宙を舞う。我が此の皮、この身の朽ちはてん後われ肉を離れて神を見ん、ヨブ記19章26節 "

東京 関寄風に 乗り忽然と 兄天へ 君見えぬ 妻の手を取り 遠ざかる その刻まで 意識たしかに 兄逝けり 本と生く 八十年や 菜み冴えて 装丁の 色芽ぶく前 天駆ける

宇宙太

リベラルなロマンチストでありし人 自由・愛とは口にいださず

八十年長きというか短きか 本づくりには終わりなければ

千三百余骨太文字の装丁や 背筋通れる反骨精神

難しき人との四十年 その妻語る 面白き日々と

はらからに先立ちて逝く兄 父母とこの世の事を何と語るらん

宇宙太

# NPOのこれまでの活動記録

# NPO法人田村明記念・まちづくり研究会について

2015年4月に発足したNPO法人田村明記念・まちづくり研究会は、いまや日本全国に広まったまちづくりを、田村明という人物を軸にしながら、客観的かつ科学的に検証することを目的としている。およそまちづくりに携わったことのある人間であれば、一度はどこかで田村明の名を耳にしたことがあるだろう。

1926年に東京に生まれた田村は、東京大学工学部建築学科で学んだ後に、東京大学法学部を1953年に卒業した。都市に関する総合的な仕事を模索しながら、運輸省・生命保険会社の不動産課・都市計画コンサルタントと職歴を重ねたのちに、1964年に当時の横浜市飛鳥田一雄市長に請われた彼は、都市の将来構想となる「六大事業」を提案する。そして1968年に、この「六大事業」の遂行のための実働機関である企画調整室の部長として田村は横浜市役所に奉職することとなる。

企画調整室はのちに企画調整局となるが、名が体を表すように、 それぞれの事業を単なる「企画」に終わらせることなく、その実現 のために様々な部局を「調整」するための組織であった。田村はこ こではじめて総合的な仕事に巡り会えたという。市街地を通る高速 道路を地下化するための建設省との粘り強い交渉にはじまり、現在 のみなとみらい21につながる三菱重工横浜造船所の移転交渉、市 内中小公害工場の集約近代化を意図した金沢地先の埋め立て、大通 公園に代表される緑の軸線計画、港北ニュータウンやベイブリッジ の建造、歴史的建造物としての赤煉瓦倉庫の保存活用、山下公園周 辺・馬車道や元町・山手の丘の都市デザイン、そして緑を保全する 市街化調整区域の広範な指定や公的負担を求める宅地開発要綱の制 定運用に至るまで、様々な事業において田村の功績を見ることができる。これらの事業が現在の横浜市のイメージ形成に果たした影響は否定しえないだろう。しかしここで疑問も生じる。これらの大きな事業において、田村の活躍が不可欠であったことは論を俟たないが、それでは果たしてどこまでを彼の功績として評価することができるのだろう。

いうまでもなく、こうした大規模な事業はひとりの人間のみの力で成し遂げることができるわけではない。多くの課題を解決しつつ、利害関係者の意志をいかに調整していくのかが重要であるはずだ。それでは田村ひとりの圧倒的な調整能力によって、これらの横浜市の大規模な事業の成否が左右されたのか。それも違うだろう。おそらく横浜市企画調整局という場において織り成された営為の相互作用が、のちの横浜のイメージを決定的なものとする事業を可能にし、また現代のまちづくりを考えるうえで不可欠のエレメントもそこに混入されているに違いない。そしてその軸にいるのが田村であるといえるのではないだろうか。

しかし田村は、生涯を通して40冊を超えるまちづくりや地方自治に関する著作を残しているが、そこから読み取れる情報はかなり限定的だ。彼は理論家というよりは実践の人だったのだ。すると「田村明が読まれる」ということを単に著書として結実されたものを、読み解いて抽出するだけでは、その本質的な部分を見誤ることになる。田村の活動や実践を読み解く人々への広がりへと向かっていき、そこから再び彼の著書や考え方などに戻って光を当ててみることが大切だ。

飛鳥田市長の国政転出に伴って、細郷道一が新しい横浜市長となり、企画調整局長の任を解かれた田村は1981年に市役所を退職した。その後彼は法政大学法学部の教授に就任し、自治体学会の代表幹事などを務めながら、日本全国の自治体や市民によるまちづくり

のグループとの交流を深めた。

田村はともに学ぶことを大切にした人なのだ。横浜市ではいくつもの市政や都市計画に関する私的な勉強会においてまとめ役を務め、退職後もそれらの活動は継続していった。こうした活動の帰結は、たとえば、日本全国の赤煉瓦建造物の保存・活用を考える赤煉瓦ネットワークの形成や、横浜市の都市文化戦略である「クリエイティブシティ・ヨコハマ」に寄与する多くの人材の育成を促したことなどを挙げられる。こうした学びの場において、田村は職業や専門性の如何を問わず、人々を招き入れ、ともに議論を重ねていった。最晩年まで彼はした活動を続けており、いまも東京の「現代まちづくり塾」のように田村の意志を引き継いた勉強会が開催されている。

考えてみると、田村明とは都市について様々な関心をもつ人々を結びつけ、そこからなにかを生み出そうとする卓越したコーディネータのように思えてくる。しばしば「まちづくりはヒトづくり」だと言われる。しかし田村はそれに加えて、まちづくりは「総合的なモノづくり」であり、「シクミづくり」であると言っている。単なる人材育成ならばどのような人でも多かれ少なかれ行なっていることだろう。しかし真に創造的なまちづくりを行うためには、「総合的」でなくてはならない。そしてそのための土台がなければ単なるひとりよがりになってしまう。だからこそどんな人でも受け入れられて、考え方を折り重ねられる「場」が必要不可欠なのだ。そこではじめて意味のある「ヒトづくり」が可能となるのではないだろうか。

NPO法人田村明記念・まちづくり研究会は、田村明自身によって立ち上げられたものではないけれど、彼が生前に開いていた研究会の雰囲気を伝えている。田村明の弟である千尋氏が理事長を務めており、また田村明と一緒に仕事をしたことがある横浜市の職員や都市プランナーが多く顔を揃えている。しかし田村明にあったことのない参加者もおり、様々な問題関心が、田村明という人物を軸に重

なり合っている。

2015年に設立されて以来、継続的に公開研究会を開催してきた。 回ごとのテーマを追ってみると、田村明の生い立ちや革新自治体・ 横浜市での営為がいかなるものであったのかといったことが中心に なっている。さきの「どこまでを田村明の功績として評価できるのか」 ということも欠かせない検討課題のひとつだ。

田村明はもうこの世にはいないけれど、研究会には都市やまちづくりについて、彼の実践や語ったことから学び取ろうという人々に開かれている。2016年4月には、シンポジウム「田村明からのメッセージ」を開催し、190名もの参加者を集めた。最近ではこれまでの歴史的な実践の検討ももちろんだが、田村明の発想や実践がいかに継承されてきたのか(されてこなかったのか)ということや、そうした実践を革新自治体という文脈から離れたところでいかに応用できるのかという検討課題にも向き合うようになってきている。また2018年7月開催のIPHS(International Planning History Society)横浜大会において、世界に田村明と彼が遺したものや引き継がれていくべきものを発信する機会を得て、今後はより国際的に、またより学際的に、研究会の交流が広がっていくことが期待されている。

NPOパンフレットより抜粋

文:青木淳弘

# 活動記録

# ▶2015年度

本年度は法人設立の初年度であり、この法人の目的に沿って着実な活動のスタートができ、関係者との連携を図りつつ、基礎的な活動の枠組みづくりを行った。

# <通年でのプロジェクト>

- ・みなとみらい21田口論文と田村眞生子ヒヤリング
- ・田村明の世界スケッチ画集とスライド等整理編集事業

<研究会・意見交換会>

## 2015年4月24日

NPO法人発足後の研究方向についての話題提供

## 2015年5月29日

NPO設立記念講演会の内容と情報発信機能としてのHP活用について意見交換

# 2015年6月12日 NPO法人設立記念講演会

講演:理事長・田村千尋「田村明の背景にあるもの」 横浜市立大学・鈴木伸治教授「今、田村明を読む」 副理事長・田口俊夫「横浜まちづくり研究のこれまでとこれから」



## 2015年7月10日

本会 HPへの投稿基準の設定と田村眞生子ヒヤリングプロジェクト の発足についての話し合い

## 2015年8月7日

自治体学会奈良大会ポスターセッション参加に向けて意見交換会

## 2015年8月22日

自治体学会奈良大会ポスターセッション参加

# 2015年9月25日

自治体学会奈良大会ポスターセッション参加に係る結果報告会

2015年10月23日

田村眞生子ヒヤリングプロジェクトの進捗報告と意見交換会

2015年11月7日

旧法政大学田村ゼミ卒業生との合同研究会

2015年12月18日

みなとみらい21田口論文の事前発表会

2016年1月29日

みなとみらい21田口論文について意見交換

2016年2月24日

4月3日 NPO 設立記念シンポジウムの企画内容について意見交換

2016年3月21日

みなとみらい21田口論文の発表方針について意見交換

# ▶2016年度

本年度は法人設立2年目で、記念シンポジウムの開催とその後の研究会等を開催し順調に活動を積み上げることができた。

<通年でのプロジェクト>

- ・田村明と横浜の都市づくりのテーマ別史料の発掘編集事業 →横浜市史資料室田村明寄贈資料その他の関連資料等の発掘作業
- ・田村明の世界スケッチ画集とスライド等整理編集事業

<研究会・意見交換会>

# 2016年4月3日

# NPO設立記念シンポジウム「田村明からのメッセージ」開催

# 当日のプログラム:

- 1. 主催者あいさつ (田村千尋理事長)
- 2.講演「田村明の遺したもの一出版の経緯と概要」 (鈴木伸治・横浜市立大学教授)
- 3. 研究発表「みなとみらい21開発の経緯」(田口俊夫副理事長)
- 4.講演「横浜の都市計画を、日本で唯一、世界標準の高みに引き上げた人、田村明」(養原敬・都市プランナー)
- 5.講演「『都市プランナー田村明さん』の横浜都市づくりへの功績」 (廣瀬良一・元横浜市助役)
- 6. 鼎談「田村明からのメッセージ」 (蓑原敬・廣瀬良一・田村千尋 モディレーター:鈴木伸治)
- 7. あいさつ (田村眞生子夫人)



197

2016年4月19日

正会員意見交換会

2016年5月25日

正会員意見交換会

2016年6月9日

2016年度「総会」

2016年7月29日

遠藤包嗣氏「企画調整室の活動と金沢地先埋立事業の展開」

2016年8月10日

鈴木伸治横浜市立大教授を囲む会

2016年9月12日

田村千尋氏「田村明の思想に影響を及ぼした家族、そして…」

2016年11月14日

高橋正治氏「市会議員からみた横浜の都市づくり」

2016年12月2日

田口俊夫氏「革新自治体における開発コントロール手法形成の経緯 と変化」

2017年1月24日

遠藤包嗣氏「港北ニュータウン建設事業の課題と展開」

2017年2月10日

田口俊夫氏「宅地開発要綱田口論文第二回発表」

2017年2月23日

田村明プロフィール作成部会

2017年3月16日

川股隆氏「飛鳥田市政の財政事情と事業運営」







2016年度の公開研究会の様子

# ▶2017年度

本年度は法人設立3年目で、国際都市計画史学会IPHS横浜大会への参加に向けた論文準備を行いつつ、その他研究会等を開催し順調に活動を積み上げることができた。

# <通年でのプロジェクト>

- ・まちづくりに関する情報資料の収集発信活動に係る事業
  - →首都大学東京・田尾亮介准教授ヒヤリング
  - →横浜市職員自主勉強会取材
  - →地球環境戦略研究機関(IGES)との合同セミナー開催
  - →宅地開発要綱に係わる川西市出張
- ・田村明の世界スケッチ画集とスライド等整理編集事業



NPOとIGESとの交流

<研究会・意見交換会>

# 2017年4月28日

「総会」の開催と鈴木伸治市大教授の記念講演

#### 2017年6月23日

奥津憲聖氏「近現代個人文書が有する価値とその編成 - 都市プランナー・田村明の旧蔵資料を事例に-」

青木淳弘氏「社会学からみた田村明の功績についての研究構想」

## 2017年7月14日

東秀紀氏「田村明プロフィール」

## 2017年9月15日

田口俊夫氏「横浜市における宅地開発要綱制定と変化の経緯分析-革新首長飛鳥田一雄と都市プランナー田村明の働きを通じて

#### 2017年10月2日

東秀紀氏「田村明プロフィール草稿」 青木淳弘氏「田村明への社会学的アプローチ」

#### 2017年10月13日

真矢正弘氏「田村塾と歩んだ15年」

#### 2017年10月18日

地球環境戦略研究機関IGESとの共同研究会

2017年11月6日

IPHS横浜大会部会の企画・打ち合わせ

2017年11月27日

関根龍太郎氏「田村明と現代まちづくり塾」

2017年12月6日

IGES研究者とのマチ歩き(港北ニュータウン・MM21)

2018年1月22日

三木基弘「まちづくり伝道師田村明との出会い・姫路からの報告」

2018年2月25日

淺川賢司「Soft Law と宅地開発指導要綱」

# ▶2018年度

本年度は法人設立4年目で、7月の国際都市計画史学会IPHS横浜大会に参加し会員4名が英文論文を発表した。その関連で2019年3月には米国ジョージア州立大学での国際会議にも参加し、英文論文発表を行った。田村明と横浜のまちづくりを世界に発信する当NPOの事業目的が緒についた年といえる。

#### <通年でのプロジェクト>

- ・まちづくりに関する情報資料の収集発信活動に係る事業
  - →田村明に縁のある島根県旧横田町と兵庫県姫路市への取材
  - →横浜市都市農業に関する資料収集
  - →横浜市都市美審議会議事録の発掘
  - →岩波書店と田村明に係る著作権の確認

- →元横浜市都市デザイン室長ヒヤリング
- ・田村明の世界スケッチ画集とスライド等整理編集事業

<研究会・意見交換会>

2018年5月14日

「社員総会」の開催と地球環境戦略研究機関IGES藤野純一氏の記念 講演

2018年6月11日

小田島浩二氏『福岡におけるコミュニティ活動と半生』

2018年6月13日

地球環境戦略研究機関IGESとの合同研究会

# 2018年7月15日~19日 国際都市計画史学会IPHS横浜大会への参加

## 当日のプログラム:

- 1.The Genesis of Yokohama's Strategic Planning Environment: Reflecting on the contribution of Akira Tamura and his work (パネルの主旨説明・田口俊夫副理事長)
- 2.Profile of Akira Tamura Yokohama City Planner (田村千尋理事長)
- 3.The Adoption and Abolition of the Local Development Exaction system by the city of Yokohama (田口俊夫副理事長)
- 4. The status and use of soft law in local governments'

management of urban development: Restructuring the logical framework of administrative guidance on impact fees for housing development (淺川賢司会員)

5.A study of unorthodox town making by Akira Tamura: the transmission of Tamura's vision to younger generations (青木淳 弘会員)





2018年8月9日・8月23日 韓国人研究者との研究交流(市民の政府論に代表される田村明研究)



韓国の会員との田村明研究交流

# 2018年8月29日

韓昌祐・哲文化財団への研究費助成申請(田村明と市民像)

# 2018年11月27日

田村千尋氏『最小単位としての暖かい家庭、母親力』

## 2018年12月18日

青木淳弘氏「田村明にとっての市民像」

# 2019年1月25日

比較住宅都市研究会で田村明研究の講演会

# 2019年1月29日

遠藤包嗣氏「赤レンガ倉庫・保存活用事業」

# 2019年2月22日

森誠一郎氏「みなとみらい・こぼれ話」

#### 2019年3月6日~10日

田口俊夫氏、米国ジョージア州立大学主催国際会議に出席・論文発

#### 2019年3月25日

関根龍太郎氏「田村明〈市民の政府〉への道|

## 2019年3月29日

NPO内自主勉強会〈田村明の市民像〉



公開研究会(森誠一郎氏講演)の様子



# ▶2019年度

本年度は法人設立5年目にあたり、田村明の国内外への発信が更に 加速した年となった。田村明の世界レベルでの先端性と総合性を伝 える素材の発掘と研究の進展がおおきく進んだ。NPO設立5周年/ 田村明没後10周年記念の準備作業もあわせて進めた。

# <通年でのプロジェクト>

- ・田村明著『都市ヨコハマをつくる』英訳出版事業
- ・国際都市計画史学会モスクワ大会(2020年7月予定)に向けた準備
- ・Wikipedia国際版への田村明の掲載
- ・田村明と横浜の都市づくりのテーマ別史料の発掘編集事業
  - →下河辺アーカイブズの訪問(港区虎ノ門・開発構想研究所内)
  - →旧静岡高等学校資料(静岡大学内)見学会
  - →大阪市公文書館訪問調査(受益者負担制度資料調査)
  - →日本建築学会シンポジウム参加(革新市政と都市づくり)
  - →西山夘三記念すまい・まちづくり文庫調査訪問(京都府木津 川市)
  - →元岩波書店編集者ヒヤリング(都市問題講座)
  - →ニューヨーク市立公文書館訪問調査(高速道路問題関係資料)
- ・田村明の世界スケッチ画集とスライド等整理編集事業
- ・NPO 内自主勉強会〈田村明の市民政府論〉

<研究会・意見交換会>

## 2019年4月22日

田口俊夫氏「高速道路地下化の経緯|

2019年5月10日

越文明氏「田村幸太郎の人生」

2019年6月24日

南学氏「政治家市長と官僚OB市長」

2019年7月16日

青木淳弘氏「都市デザイン行政の革新性は継承されたのか」

2019年8月5日

田口俊夫氏「ニューヨークと横浜における都市内高速道路問題の共通点」

2019年8月24日~25日

自治体学会堺大会でのポスター発表

2019年9月6日

日本建築学会金沢大会での論文発表

2019年9月19日

平山実氏「横浜の都市農業」

2019年10月8日

西脇敏夫氏「横浜と佐世保での都市デザイン活動」

2019年11月9日~10日

日本都市計画学会横浜大会でのポスター展示

# 2019年11月15日

卯月盛夫氏「横浜市の都市デザイン行政を振り返る-アニヴェルセ ルみなとみらい横浜を事例に-」

## 2019年12月17日

田口俊夫氏「田口会員の米国出張報告・リンゼイ市長と高速道路問題」 地曳良夫氏「都心部強化事業と環境設計制度を活用した開発指導」

# 2020年2月17日

NPO 設立5周年/田村明没後10周年記念出版企画打ち合わせ



本誌出版のための打ち合わせの様子











2019年度の公開研究会の様子



# ▶2020年度

コロナ禍のために、すべての対面形式による活動が休止された。 ただし、理事会はリモート形式(Skype利用)により、毎月第二月 曜日夕刻で開催した。なお、理事として、東秀紀氏と星卓志氏が退 任され、南学氏と青木淳弘氏が就任された。

研究会活動等については、2020年9月には、待望の田村明著『都市ヨコハマをつくる』(中公新書1983)の英訳版 Akira Tamura, YOKOHAMA: THE MAKING OF A CITYが完成した。会員をはじめ、国立国会図書館や市内図書館そして国内外の大学等に寄贈した。また、会員各位のご協力により、『NPO法人田村明記念・まちづくり研究会5周年記念誌』の編集も進み、今回の発行となった。

会員それぞれによる研究活動も進んでおり、会員有志と大学研究者による共同研究『企画調整機能の形成と消滅に関する歴史研究:1960年代後半以降の横浜市を題材に』(研究代表者:檜槇貢・長崎国際大学特任教授)で、文部科学省科学研究費助成事業に応募している。

その他の研究活動等も進んでおり、コロナ禍に負けないNPO活動を継続していきたい。



オンラインでの研究活動

# **About Us**

Akira Tamura Memorial - A Town Planning Research Initiative NPO was founded in April 2015 to consider the essentials of town planning and how it should be done. Its primary goal is to objectively and scientifically verify the history of Yokohama's town planning since the 1960s, under the direction of Akira Tamura, the preeminent urban planner of post-war Japan.

Akira Tamura was born in 1926 in Tokyo. He entered the University of Tokyo and majored in architecture in the Faculty of Engineering. After his graduation, he worked as national bureaucrat in the Ministry of Transportation. At the same time, he attended the Faculty of Law at the University of Tokyo and successfully obtained a Bachelor of Laws, wishing to commit himself to a work with a broader scope. He quit his job at the Ministry of Transportation and continued to seek his vocation. He went on to work for a real estate company and then as a consultant for urban planning. In 1964, Tamura proposed to Ichio Asukata, who was at that time the socialist mayor of Yokohama city, a new city development project, the Six Spine Projects. Asukata then invited Tamura to join the city government.

Asukata considered it was necessary to establish a new section in charge of the Six Spine Projects in the city government, because the projects would require coordination across several bureaus and sections. Against this background, he established a section within the city apparatus named the "Planning and Coordinating Section" and Tamura was appointed chief of this section. From that point, Tamura had finally found his vocation.

Tamura's challenges working in Yokohama city included not only the Six Spine Projects, but many others. His first conflict with the national bureaucracy concerned the municipal highway route that was originally planned to run overhead, but which was successfully changed to one that was semi-subterranean in order to preserve the landscape. He was heavily involved in numerous city projects, including the negotiation regarding Mitsubishi's Yokohama shipyard over its relocation which resulted in the construction of today's MM21 district, The Green Axes planning that culminated in building Yokohama's Main Street park, constructing the Kohoku New Town and the Bay Bridge, urban design around Yamashita Park and the Motomachi-Yamate area. and establishing the "Local Development Exaction System" as an administrative guideline, which facilitated seeking legal agreement to make contributions of land or betterment levies prior to development permission being granted, and which continued to be used in Yokohama city until 2004. It is without doubt that Tamura's contribution had an enormous impact on the face of today's Yokohama. However, how can we understand the actual impact of his contribution?

Needless to say, those big projects and controls could not have been implemented by him alone. Multiple stakeholders needed to participate in solving urban problems and these were the fruits of their collaboration. Tamura, however, was a key person in controlling and coordinating stakeholders in each of those big projects. Hence, the important elements for understanding and improving town planning can be found embedded in his approach

to coordination.

Although Tamura authored over 40 books, the information that may be gleaned from those books is very limited. Tamura was not originally a theorist of urban planning but instead crafted his own town making theory through responding to the needs and circumstances of Yokohama city and its residents. So the essence of Tamura's approach to town making needs to be understood by focusing on his activities and those of his collaborators.

Tamura retired from Yokohama city in 1981 as mayor Asukata left and Michikazu Saigo, the successor to Asukata, removed him from his practical duties and appointed him to a leisurely post. Tamura went on to become a professor of the Faculty of Law of Hosei University and lectured on urban policy. Moreover he launched a campaign to increase public awareness regarding town making by writing books, lecturing citizens and supervising study groups. He prioritised study altogether. Those study groups remain all over Japan and welcome people regardless of their work background.

Tamura was a distinctive coordinator who connected people with diverse interests to create brand new city environments. It is often said that "Town making is human development", and Tamura added that it requires the comprehensive collaboration across multiple fields and the construction of systems as well. More or less, any person can engage in human development, however, in order to conduct truly emergent planning, it must be "comprehensive". Where there is no foundation for that, it will be little more than just self-satisfaction. That is why a place where any person can be welcomed and engage in thinking about the

future of cities is essential. Having such opportunities, it might finally be possible to realise meaningful human development.

Akira Tamura Memorial – A Town planning Research Initiative NPO was not founded by Akira Tamura himself, but it intends to foster the atmosphere of the study groups founded by him. Our president is his brother, Chihiro Tamura, and many people who have worked with him gather here. However, some other participants have never met Akira Tamura, and have various concerns or interests overlapping in relation to him.

Based on the results of our research so far, some members are enthusiastically pursuing the innovative application of our research in other countries or regions. In addition, the uniqueness of Akira Tamura's organisational management lies in human resource development and utilisation, therefore a sociological research initiative focused on this aspect has already been launched by one of our young members.

As three years have passed since the establishment of our organisation, we have been focused on the conference of the International Planning History Society (IPHS), to be held in July of 2018, in Yokohama. From the IPHS conference going forward, international research interaction such as visits from overseas scholars to Yokohama is expected to increase and we are ready to welcome them. While the content of our research is subject to empirical analysis, objective data collection regarding the town planning process during the term of mayor Asukata and planner Tamura is required. Future developments in this field are expected to continue apace. We hope that all people concerned with

town planning will consistently and kindly support the research activities of our NPO.

Source: Pamphlet of our NPO

Atsuhiro AOKI

# NPO法人 田村明記念・まちづくり研究会 定款

# 総則

# (名称)

第1条 この法人は、NPO法 人 田村明記念・まちづくり研 究会という。英文名を "Akira Tamura Memorial - A Town Planning Research Initiative NPO" とする。

# (事務所)

この法人は、主たる事務所を神 奈川県横浜市に置く。

# 目的及び事業

# (目的)

第3条 この法人は、都市プランナー田村明たちによる横浜での総合的な都市づくり、そして各地の市民主体のまちづくりを学び直し、その活動成果を次世代と共有し、まちづくりの推進に寄与することを目的とする。

(特定非営利活動の種類)

第4条 この法人は、前条の目

的を達成するため、次に掲げる 種類の特定非営利活動を行う。 特定非営利活動促進法(以下 「法」という)第2条別表に掲げ る「まちづくりの推進を図る活 動」を行う。

# (事業)

# 第5条

この法人は、第3条の目的を達成するため、次の特定非営利活動に係る事業を行う。

横浜の都市づくりと市民のまち づくりに関する研究会活動に係 る事業

# まちづくりに関する情報資料の 収集発信活動に係る事業

まちづくり関連団体や市民等と の交流活動に係る事業

まちづくりの研究支援に向けた 基金運用活動に係る事業

その他この法人の目的を達成するために必要な事業

## 第3章 会員

#### (種別)

第6条 この法人の会員は、次 の2種とし、正会員をもって法 上の社員とする。

正会員 この法人の目的に賛同 して入会した個人及び団体

賛助会員 この法人の目的に賛 本人が死亡し、又は会員である 同して活動を支援するために入 会した個人及び団体

# (入会)

第7条 会員として入会しよう とするものは、理事長が別に定 める入会申込書により、理事長 に申し込むものとし、理事長は、 そのものが前条に掲げる条件に 適合すると認めるときは、正当 な理由がない限り、入会を認め なければならない。

2 理事長は、前項のものの入 会を認めないときは、速やかに、 理由を付した書面をもって本人 にその旨を通知しなければなら ない。

## (入会金及び会費)

218

別に定める入会金及び会費を納 入しなければならない。

#### (会員の資格の喪失)

第9条 会員が次の各号の一に 該当するに至ったときは、その 資格を喪失する。

退会届の提出をしたとき。

団体が消滅したとき。

継続して1年以上会費を滞納し たとき。

除名されたとき。

#### (很会)

第10条 会員は、理事長が別 に定める退会届を理事長に提出 して、任意に退会することがで きる。

# (除名)

第11条 会員が次の各号の一 に該当するに至ったときは、総 会において正会員総数の4分の 3以上の議決により、これを除 名することができる。この場合、 第8条 会員は、総会において その会員に対し、議決の前に弁

明の機会を与えなければならな

この定款等に違反したとき。

この法人の名誉を傷つけ、又は 目的に反する行為をしたとき。

# (拠出金品の不返還)

第12条 既納の入会金、会費 及びその他の拠出金品は、返還 しない。

#### 役員

## (種別及び定数)

第13条 この法人に次の役員 を置く。

- (1)理事 3人以上9人以下
- (2)監事 1人以上3人以下 2 理事のうち、1人を理事長、 1人を副理事長とする。

#### (選任等)

第14条 理事及び監事は、総 会において選任する。

2 理事長及び副理事長は、理 事の互選とする。

#### (職務)

第15条 理事長は、この法人

2 副理事長は、理事長を補佐 し、理事長に事故あるとき又は

を代表し、その業務を総理する。

理事長が欠けたときは、その職 務を執行する。

3 理事は、理事会を構成し、 この定款の定め及び理事会の議 決に基づき、この法人の業務を 執行する。

4 監事は、法第18条に規定 する職務を行う。

# (任期等)

第16条 役員の任期は、2年と する。ただし、再任を妨げない。 2 補欠のため、又は増員に よって就任した役員の任期は、 それぞれの前任者又は現任者の 任期の残存期間とする。

3 役員は、辞任又は任期満了 後においても、後任者が就任す るまでは、その職務を行わなけ ればならない。

#### (解任)

第17条 役員が次の各号の一 に該当するに至ったときは、総 会において正会員総数の4分の 3以上の議決により、これを解 任することができる。この場合、

その役員に対し、議決の前に弁明の機会を与えなければならない。

職務の遂行に堪えない状況にあると認められるとき。

職務上の義務違反その他役員と してふさわしくない行為があっ たとき。

# (報酬等)

第18条 役員は、その総数の3 分の1以下の範囲内で報酬を受けることができる。

2 役員には、その職務を執行 するために要した費用を弁償す ることができる。

3 前2項に関し必要な事項は、総会の議決を経て、理事長が別に定める。

#### (顧問及び相談役)

220

第19条 この法人に、必要に応じて顧問及び相談役を置くことができる。

2 顧問及び相談役は、理事会 及び総会に出席し、意見を述べ ることができる。

#### 総会

#### (種別)

第20条 この法人の総会は、 通常総会及び臨時総会の2種と する。

## (構成)

第21条 総会は、正会員をもって構成する。

## (機能)

第22条 総会は、次の事項に ついて議決する。

# 定款の変更

#### 解散

# 合併

事業計画及び予算に関する事項

事業報告及び決算に関する事項

役員の選任等に関する事項

入会金及び会費に関する事項

長期借入金に関する事項

事務局の組織等に関する事項

その他この法人の運営に関する 重要事項

#### (開催)

第23条 通常総会は、毎年1回 開催する。

2 臨時総会は、次の各号の一 に該当する場合に開催する。 理事会が必要と認め招集の請求 をしたとき。

正会員総数の5分の1以上から 会議の目的である事項を記載し た書面をもって招集の請求が あったとき。

法第18条第4号の規定により、 監事から招集があったとき。

#### (招集)

第24条 総会は、前条第2項 第3号の場合を除き、理事長が 招集する。

2 理事長は、前条第2項第1 号及び第2号の規定による請求 があったときは、その日から 30日以内に臨時総会を招集しなければならない。

3 総会を招集するときは、会 議の日時、場所、目的及び審議 事項を記載した書面又は電磁的 方法をもって、少なくとも5日 前までに通知しなければならない。 (議長)

第25条 総会の議長は、その 総会において、出席した正会員 の中から選出する。

## (定足数)

第26条 総会は、正会員総数 の2分の1以上の出席がなけれ ば開会することができない。

# (議決)

第27条 総会における議決事項は、第24条第3項の規定によってあらかじめ通知した事項とする。

2 総会の議事は、この定款に 規定するもののほか、出席した 正会員の過半数をもって決し、 可否同数のときは、議長の決す るところによる。

#### (表決権等)

第28条 各正会員の表決権は、 平等なるものとする。

- 2 やむを得ない理由のため総会に出席できない正会員は、あらかじめ通知された事項について書面若しくは電磁的方法をもって表決し、又は他の正会員を代理人として表決を委任することができる。
- 3 前項の規定により表決した 正会員は、第26条、前条第2項、 次条第1項第2号及び第49条の 適用については、総会に出席し たものとみなす。
- 4 総会の議決について、特別の利害関係を有する正会員は、 その議事の議決に加わることが できない。

## (議事録)

第29条 総会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 日時及び場所

正会員総数及び出席者数(書面若しくは電磁的方法による表決者又は表決委任者がある場合にあっては、その数を付記すること。)

審議事項

議事の経過の概要及び議決の結果

議事録署名人の選任に関する事項

- 2 議事録には、議長及びその 会議において選任された議事録 署名人2人以上が署名又は記名 押印しなければならない。
- 3 前2項の規定にかかわらず、 正会員全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたことにより、総会の決議があったとみなされた場合においては、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 総会の決議があったものとみなされた事項の内容

前号の事項の提案をした者の氏 名又は名称

総会の決議があったものとみな された日 議事録の作成に係る職務者の氏

理事会

(構成)

第30条 理事会は、理事をもって構成する。

(権能)

第31条 理事会は、この定款 で定めるもののほか、次の事項 を議決する。

総会に付議すべき事項

総会の議決した事項の執行に関 する事項

その他総会の議決を要しない会 務の執行に関する事項

#### (開催)

第32条 理事会は、次の各号の一に該当する場合に開催する。 理事長が必要と認めたとき。

理事総数の3分の2以上から会議の目的である事項を記載した 書面又は電磁的方法をもって招集の請求があったとき。

# (招集)

第33条 理事会は、理事長が

招集する。

- 2 理事長は、前条第2号の規定による請求があったときは、その日から14日以内に理事会を招集しなければならない。
- 3 理事会を招集するときは、 会議の日時、場所、目的及び審 議事項を記載した書面又は電磁 的方法をもって、少なくとも5日 前までに通知しなければならない。 (議長)

第34条 理事会の議長は、理 事長がこれに当たる。

(定足数)

第35条 理事会は、理事総数 の過半数の出席がなければ開会 することができない。

# (議決)

第36条 理事会における議決 事項は、第33条第3項の規定に よってあらかじめ通知した事項 とする。

2 理事会の議事は、理事総数 の過半数をもって決し、可否同 数のときは、議長の決するとこ ろによる。

## (表決権等)

第37条 各理事の表決権は、

平等なるものとする。

- 2 やむを得ない理由のため理 事会に出席できない理事は、あ らかじめ通知された事項につい て書面又は電磁的方法をもって 表決することができる。
- 3 前項の規定により表決した 理事は、第35条、第36条第2項 及び次条第1項第2号の適用に ついては、理事会に出席したも のとみなす。
- 4 理事会の議決について、特別の利害関係を有する理事は、 その議事の議決に加わることが できない。

#### (議事録)

第38条 理事会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 日時及び場所

理事総数、出席者数及び出席者 氏名(書面又は電磁的方法によ る表決者にあっては、その旨を 付記すること。)

審議事項

224

議事の経過の概要及び議決の結果

議事録署名人の選任に関する事項

2 議事録には、議長及びその 会議において選任された議事録 署名人2人以上が署名又は記名 押印しなければならない。

資産及び会計

(資産の構成)

第39条 この法人の資産は、 次の各号に掲げるものをもって 構成する。

設立当初の財産目録に記載され た資産

入会金及び会費 寄附金品 財産から生じる収益 事業に伴う収益 その他の収益

(資産の区分)

第40条 この法人の資産は、 特定非営利活動に係る事業に関 する資産の1種とする。

#### (資産の管理)

第41条 この法人の資産は、 理事長が管理し、その方法は、 総会の議決を経て、理事長が別 に定める。

#### (会計の原則)

第42条 この法人の会計は、 法第27条各号に掲げる原則に 従って行うものとする。

#### (会計の区分)

第43条 この法人の会計は、 特定非営利活動に係る事業に関 する会計の1種とする。

## (事業計画及び予算)

第44条 この法人の事業計画 及びこれに伴う予算は、理事長 が作成し、総会の議決を経なけ ればならない。

#### (暫定予算)

第45条 前条の規定にかかわらず、やむを得ない理由により予算が成立しないときは、理事長は、理事会の議決を経て、予算成立の日まで前事業年度の予算に準じ収益費用を講じることができる。

2 前項の収益費用は、新たに成立した予算の収益費用とみなす。

# (事業報告及び決算)

第46条 この法人の事業報告 及び決算は、毎事業年度ごとに 理事長が事業報告書、活動計画 書、貸借対照表及び財産目録等 として作成し、監事の監査を経 て、その年度終了後速やかに総 会の承認を得なければならない。 2 決算上剰余金を生じたとき は、次事業年度に繰り越すもの とする。

#### (事業年度)

第47条 この法人の事業年度 は、毎年4月1日に始まり翌年 3月31日に終わる。

# (長期借入金)

第48条 この法人が資金の借入をしようとするときは、その事業年度の収益をもって償還する短期借入金を除き、総会の承認を得なければならない。

定款の変更、解散及び合併 (定款の変更)

第49条 この法人が定款を変更 しようとするときは、総会に出 席した正会員の4分の3以上の議 決を経、かつ、法第25条第3項

に掲げる事項については、所轄 庁の認証を得なければならない。 (解散)

第50条 この法人は、法第31 条第1項に掲げる事由により解 散する。

2 法第31条第1項第1号の事由によりこの法人が解散するときは、正会員総数の4分の3以上の承諾を得なければならない。3 この法人が解散(破産手続開始の決定による解散を除く。)したときの清算人は、総会において選任する場合を除き、理事が清算人となる。

# (残余財産の帰属)

第51条 この法人が解散(合併又は破産手続開始の決定による解散を除く。)したときに残存する財産は、法第11条第3項に規定する法人のうちから総会において選定したものに帰属するものとする。

## (合併)

226

第52条 この法人が合併しようとするときは、総会において正会員総数の4分の3以上の議決を経、かつ、所轄庁の認証を

得なければならない。

#### 公告の方法

(公告の方法)

第53条 この法人の公告は、 この法人の掲示場に掲示すると ともに、官報に掲載して行う。 ただし、貸借対照表の公告につ いては、この法人ホームページ に掲載して行う。

## 事務局

#### (事務局の設置等)

第54条 この法人に、この法人の事務を処理するため、事務局を置くことができる。

- 2 事務局には、事務局長その他必要な職員を置く。
- 3 事務局長その他の職員は、理事長が任免する。
- 4 事務局の組織及び運営に関 し必要な事項は、総会の議決を 経て、理事長が別に定める。

#### 雑則

#### (細則)

第55条 この定款の施行につい

て必要な細則は、理事会の議決 を経て、理事長がこれを定める。

## 附則

- 1. この定款は、この法人の成立の日から施行する。
- 2. この法人の設立当初の役員は、次に掲げる者とする。

理事長 田村千尋

副理事長 田口俊夫

理事 五島哲男

理事 関根龍太郎

理事 寺田芳朗

監事 遠藤 博

- 3. この法人の設立当初の役員 の任期は、第16条第1項の規定 にかかわらず、成立の日から 2016年6月30日までとする。
- 4. この法人の設立当初の事業 計画及び予算は、第44条の規 定にかかわらず、設立総会の定 めるところによるものとする。
- 5. この法人の設立当初の事業 年度は、第47条の規定にかか わらず、成立の日から2016年3 月31日までとする。
- 6. この法人の設立当初の入会 金及び会費は、第8条の規定に

かかわらず、次に掲げる額とする。

入会金

正会員 個人3,000円

団体5,000円

年会費

正会員 個人3,000円

団体5,000円

# 附則

- 1. この定款は、2015年7月10 日から施行する。
- 2. この法人の定款変更後の入 会金及び会費は、次に掲げる額 とする。

正会員 個人3,000円、団体 5.000円

賛助会員 0円

年会費

5,000円

入会金

正会員 個人3,000円、団体

賛助会員 個人2,000円、団体 3.000円

#### 附則

1. この定款は、2017年6月30 日から施行する。

# NPO会員名簿(2021年4月現在)

田村 千尋(たむら ちひろ)

田口 俊夫(たぐち としお)

関根 龍太郎(せきね りゅうたろう)

遠藤 包嗣(えんどう かねつぐ)

寺澤 成介(てらさわ せいすけ)

南 学(みなみ まなぶ)

青木 淳弘 (あおき あつひろ)

遠藤 博(えんどう ひろし)

東 秀紀 (あずま ひでき)

星 卓志(ほし たかし)

漆原 順一(うるしばら じゅんいち)

田村 眞生子(たむら まきこ)

小林 明仁(こばやし あきひと)

永山 克男(ながやま かつお)

川崎 洋子(かわさき ひろこ)

淺川 賢司(あさかわ けんじ)

藤野 純一(ふじの じゅんいち)

奥津 憲聖(おくつ のりまさ)

三木 基弘 (みき もとひろ)

宮原 宏至(みやはら ひろし)

三浦 大樹(みうら ひろき)

呂菊喜(ヨ グッキ)

理事長

副理事長

理事

理事

理事

理事

理事

監事



# 田村明を天に送って

くしております。

亡夫、田村明が召されましてから十年がすぎました。そしてNP O法人田村明記念まちづくり研究会も、始めてから五年の歳月が流 れました。艱難を乗り越えて様々な活動をされ、また成果も上げて、 今年は「都市ヨコハマをつくる」(中央新書)を英訳し、欧米の方々 へ発信したと伺います。こうして田村明の成果がかの地のひとびと にも理解されるようになっていく事は、誠に嬉しい事でございます。 思い返せば彼と結婚した当初、大阪の生命保険会社での仕事に満 たされないものを感じていることを知りました。自分のライフワー クは何かと悩んでおりましたが様々な経過を経て、戦後、遅れてい た横浜のまち再開発の仕事をさせていただくこととなりました。彼 が運輸省で経験したタテワリ構造の欠点をおさえこみ、横浜市独自 の都市づくり、地方自治の精神の旗をあげて仕事が出来たことは、 とても良かったのではないかと思っております。その後、法政大学 に拠点を置きつつ、全国に足をのばして、「まちづくり」を実践、 さらに東京、横浜での「塾」活動などに励むことができましたこと も幸せな事でございました。もう一つは世界の人々の活動を自分の 目で見、手で触れることのできる世界旅行にでかけることができた こと、これは彼のもっとも楽しい時間だったのではないかと思って おります。こうした活動の源泉は聖書を読み、祈る、時間をもった からだと思います。内村鑑三先生の「後世への最大遺物」にこの世 の活動の規範を得たこと、そして聖書の言葉「地の塩」「世の光」(マ タイ伝五章一三、一四節)の句にこの世に生きていく心の目標をあげ、 少しでもそれに近づけるようとする営みがあったのだ、と感慨を深

田村眞生子



玄関飾り 田村眞生子氏自宅にて



田村眞生子氏とNPOメンバー

# NPO法人田村明記念・まちづくり研究会

設立 2015年4月1日 横浜市認証特定非営利活動法人 代表者名 田村千尋

主たる事務所 横浜市南区若宮町四丁目52番1号

定款に記載された目的 この法人は、都市プランナー田村明たちによる横浜での総合的な都市づくり、そして各地の市民主体のまちづくりを学び直し、その活動成果を次世代と共有し、まちづくりの推進に寄与することを目的とする。

Website https://www.machi-initiative.com/

# Akira Tamura Memorial - A Town Planning Research Initiative NPO

Established in 2015, Yokohama City Certified Non Profit Organisation.

Address: 4-52-1 Wakamiya-cho, Minami ward, Yokohama city, Japan.

Purpose described in the constitutional document:

The primary aim of our organisation is to understand the scope of the achievements of urban planner Akira Tamura and his planner colleagues in terms of Yokohama's history of city management and planning, and also citizen-centred machi-zukuri (town making) movements throughout Japan that have benefitted from Tamura's guidance, and in due course contribute to the advancement of machi-zukuri all over the world through sharing the results of our organisation's activities with future generations.

※表紙の写真は仲原正治氏提供(1990年1月17日・香港啓徳空港にて)

# 田村明をなぞらえる:未来へ

2021 年 7月 25日 第 1 刷発行

著者 NPO法人田村明記念・まちづくり研究会

発行者 つむぎ書房

〒 103-0023 東京都中央区日本橋本町 2-3-15 共同ビル新本町 5 階

電話 03(6273)9874

https://tsumugi-shobo.com/

発売元 つむぎ書房

© NPO corporation tamurakinen matidukurikenkyukai Printed in Japan

ISBN978-4-910205-88-5

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はお手数ですが小社までお送りください。

送料小社負担にてお取替えさせていただきます。

無断転載・複製を禁じます。